

---

# 翼、あるモノ。『蒼翼の欠片』

月森うさこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翼、あるモノ。『蒼翼の欠片』

### 【Nコード】

N6195H

### 【作者名】

月森うさこ

### 【あらすじ】

「翼、あるモノ」の本編最新作です。前作から約半年後の設定。人探しの為、旅を続ける精霊使いで呪術師の主人公ラヴィ・クラフトは王都に近い街で旅費を稼ぐ為、相変わらず下働きのバイト中。そこで偶然？彼の師と墮天使に出会い、女神が眠るといふ碧い石「聖光碧石」をめぐる騒動に巻き込まれる。全ては必然。話は過去にまで遡り、彼が旅を続ける理由や、愛する者の裏切りや愛憎が入り交じったものになっております。

## 蒼翼の欠片

毎夜、眠る度に見る夢は、  
これが夢であれば、と  
願わずにはいられない現実。

狂わされたのは、誰？  
わたし、あなた……それとも、キミ？

全てはここに存在することから始まる。  
ここに。あるから

それが始まりで  
それが終わり。

そしてここに、生み出される無限ループの法則。  
人とはこれを繰り返す生きモノなのだ。

「この状況、どうする？ 翼有種」

雨粒が、足許に濃灰のしみを落とした。  
目の師は両腕の自由を奪われたまま、黙してただラヴィを見据える。

「面白くなってきたじゃん？ みんながオマエに期待してるんだ、  
見せてあげれば？ 本当のオマエはこんなにもグロイってところ  
を」

降り出す雨は神が嘆き零した涙だと、人が幼子に読み聞かせる物語。

「平気じゃないフリなんてもうやめなよ。オマエは数えらんないくらい屍、踏んで今そこに立ってんだろ？」

違うよ、神は無慈悲。

一滴の涙もくれたりしない。

「……そうだね、間違ってないよ」

もう一つ、ラヴィの咽喉元を付き付ける鈍色は、愛憎のかたち憎悪の象徴。

「クレイド将官、カラク・ラリスを天使に渡して」

「石を渡してお前は どうするんだ？」

「私の願いを叶えてもらうの。最初からその約束だったから」

想いの在り処が悲鳴をあげる。

その言葉も優しさも微笑みも……全ては何一つカタチを成さない目に見えない心の記憶。

神は願いを叶えてはくれないよ。

ただ祈るだけでは、何も起こりはしない。

それは奇跡じゃない、

神の所業は人のそれと同じ。

どんなものにも、その代償は存在するのだから

。

だから、ね、

「君の願いも、叶うか、な」

不意に絞り出された声は、か細く彼女の耳に届く。

「…私のっ、私の願いはっ…」

それでも。

「師匠僕は、信じることでしか…他には何も…だから」

「それら全てを、お前は受け入れるか？」

クレイドの苦言に、こぶしをぎゅっと握り締める。

「…ごめんなさい、師匠」

水平に持ち上げた左腕、ラヴィは俯いたまま硬く結んだ手の平を広げる。

「…それは、違うだろ」

噛み締める唇、真意と行動が伴わない痛み。  
そして。

「成せ　クレイド・グレイ」

「悲しいの、間違いだ」

陸離として光彩を放つ粒子の凝集。銀の光は閃光が瞬き、そこに剣が形成される。

「待つて、何をするのっ！？」

予想だにしないラヴィの選択にズレが生じる。

それは有り得ない答え、彼ではない選択肢。

「ごめん…」

ほんの少しの誤算から、全てが狂い出す。

迷いの刹那は、容易にラヴィから解放を与えた。姿勢を落とし、構える剣の切っ先は肉を裂き、手に伝わる重い感触を味わう。

「ラヴィ様…っ！！！」

名を叫ぶ声を後目に、躊躇わずクレイドの腹を刺し貫いた。

「……お前にしちゃ出来、これでいい…馬鹿弟子」

終わりは、始まりを生む。

愚かしくもそれは繰り返される。

何よりも憎むべきは、その不確かでありながら、尚もそこに存在することを認める力。

なのに人は、渴望とする。

その力は、万人の望む願いも、未来すらも叶えることができるのだと。

だから、  
わたしも、あなたもキミも、

「貴方をずっと憎んでいたのかも知れない

ラヴィ・クラフト」

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

読んで下さってる方も、初めての方もありがとうございます、うさこと申しますっ^^

この話は現在、ブログの方で佳境に入っております。

一応出来るだけ続けて更新できたら…と思っておりますが、良ければブログの方にも遊びに来て下さいっ。

小説と同じくらいの趣味で絵を描いております、主人公のラヴィや、今回登場するキャラたちのイラストもバンバン載せておりますっ^^

零れ話もいっぱい書いてますので、興味のある方は、ウェブ検索で月でお散歩。と打って下されば、グーグルでもヤフーでも多分トップに出ると思いますっ。

## 蒼翼の欠片

### 二つの再会

数十年に渡って行われてきた戦争にピリオドが打たれたのは、今から六年前。

二人の王によつて、お互いの領地を奪い合う争いは、やがてその矛先を一つの国に向ける。

二つの大陸に挟まれる形で存在する離島、アースカルド公国

その最後を、時の大公が自らの死をもつて諫めたことで終戦へと導いた。

「よしっ ! カンペキ」

成果として、幾つかの相手側の領地と、アースカルドの半分を手に入れたのはエルトフェニア大陸を支配する現王ファールラット・エクトニア。

その王が城を構えるのは、大陸の北にある王都ガーラント。

「うんっ。最高記録だよね、この早さは」

ナイフを置いて立ち上がると、うーんと背伸びしてから満足気にひとり頷く。

見た目に少年、象牙の様な肌と色を持ち、薄い色素の髪に深い緑の瞳は、そこに居るだけで人の目を惹き付ける。美しい容姿を持つ彼を　　ラヴィ・クラフトと言った。

新緑の頃、瑞々しい木々の匂いと心地よい風が渡る。

見渡す街並みは、ガールントより南西に位置するキルトの街。

「薄く剥くのが難しいんだよ、でも僕は会得してしまった」

自慢げに、バケツのジャガイモたちを突き出して見せる。

《……阿呆らしい》

木箱の中の、まだ土の付いたジャガイモの山の上に乗っかって、子犬程の生きモノが小ばかにして言った。

《毎日毎日イモ剥いたり、皿洗ったり、ナニがそんなにオモシロイんだか》

呆れて吐息するその生きモノは、凡人には可視の出来ない、外界に霊子として存在する精霊と言われるモノ。

全体をオレンジ色に包み、トカゲとネズミをかけた合わせた様な、そんな見た目を持つ火属の精霊は、支配する彼によってその容を与えられ、名をジンと定められた。

「ショーがないでしょっ」

時刻は間もなく正午。

店の勝手口から、厨房で料理される食材たちの空腹を刺激する匂いが、この裏庭にも漂ってくる。奥に見える店内はお客様たちで賑わい出す頃。

「だって僕、ホールの仕事には向いてないみたいだし」

《仕事にならないもんな、女どもの質問攻めで》

「毛色が変わってるから珍しいんでしょ」

自分の持つ容姿から「モテる」と言う単語が出て来ないあたりが、彼らしいと言うか。

気だるい気候に、ジインが欠伸を一つかくと、奥から大きなお腹のオヤジが声を上げる。

「おいつ新入り、ジャガイモが終わったら、次は玉ねぎを剥けよっ」

「はいつ今からやりますっ」

ラヴィが玉ねぎを幾つか手にまた腰を下ろした時、ジインの半分閉じかけた目蓋が、ぱちりと開いた。

《ラヴィっ、火の気配だ》

「火？ そりゃ隣は厨房だし」

《阿呆かつ！！じゃなくてあっちだっ、西の方…来るぞっ！！》

「え。ちよっ…なにーっっ！？　ここ街中　ジインっ」

《火の精霊相手に火炎術送ってくるなんざ、頭の悪さが知れるってのっ》

尻尾の様なもので、ジインはこちらに目掛けて飛んでくる炎の塊を

薙ぎ払う。

「わあああつ　！　！　ジインの馬鹿つ払っちゃ火が移っちゃうだろーっつ」

案の定。積み重ねてあつた薪木に落ちて、あつと言つ間に燃え出す。

《あ、ワルイワルイ》

さして悪いとも思つてなさそうなジインに、ちよつとムツとしつつも今はそれどこでは無い。

誰が何の目的で。思考を巡らせるが、ともかく今は。

「マズイよつ、このままじゃお店に…」

となると、ここは水の精霊を召喚するしかないだろう。ラヴィは左の手を伸ばすと、空から声がした。

「……見つけた。カラク・ラリスのニオイだ」

瞬時に宙を仰ぐが、その声の主はもうラヴィの左腕を掴み、真横に立っていた。

「！？」

その素早さにラヴィは目を瞪る。自分と同じくらいの背丈、灰色の髪にコバルトよりは淡いセルリアンブルーの瞳を持つ少年、しかし

「違った。さっきの火炎避けたんだ…お仲間？」

「な、に？」

「それとも…商売敵、かな」

少年はニヤリと嗤い、もう片方の手がまるで蛇の舌の様に伸びてラヴィの耳元を掠めた。

「あ、れ」

「…君はナニ？」

人の形をした人で無いモノ。その目をラヴィは凝視する。可視とは違う、奥に潜む正体を見極める呪術師の目で。

「どうして掴めない？ちゃんと狙ったのに」

「これは僕の意味でここにあるモノだから。……鈍の翼…墮天使なの？」

「… だったら、どうした？」

ラヴィの言葉に、初めて感情らしきものが見えた様だった。

「何故下界に？ここは君の居場所じゃない、それにこのままだと君は…」

「ふん。堕ちたモノに居場所なんてないだろう」

まだ掴んだままの腕を持ち上げ、少年は力を籠める。そのまま明らか

かに不機嫌といった表情でラヴィを見据えた。

「偉そうに。何だよアンタ……へえ？結構グロイ……いや、相当グチャグチャしてんのな？」

「！？ つ、離してよっ！」

「いつてえ！？ ナニ今の術？ ナニ使った？」

振り払い、痺れたその手を見ながら少年が問い掛けるが、ラヴィは眉根を寄せて僅かに視線を外し、何も答えない。

「ふふーん？ まあいいや、僕達って似てるのかも…ねえ？」

「……覗くなんて、悪趣味な天使と一緒にされたくない」

「覗かれてムキになるくらい、悲惨な人生だって認めるの。それ」

「帰れないんならっ…手伝うよ、でもそれ以外は話したくない」

「なあーんか上から目線なんだよね、アンタさ。気に入らない」

天使のプライドの高さは、知る者には当たり前前の事実として語られることも無い。

それくらい、気高い気質の彼らを厄介だと感じるのは当然のこと。それだけだと、ラヴィは自らに言い聞かせた。

《おおおいつー！さっきから店のオヤジが怒鳴ってんだけど、火消さないと首になんぞっラヴィ》

視界に割り込むジンが、ラヴィの目の前で声を張り上げる。

「……え？ ……ああうん、今消すよ」

「あれって僕の火だよな？簡単だよ、氷の吐息で一吹き」

ふっ、と息を吹き掛け、薪木の火は敢え無く消沈したが、今度は簡単に溶けそうにもない氷の塊になってしまった。

「あ、あのねえ…っ」

「僕の方が早い」

でなくて…。

よほど先の手に施した術がお気に召さなかったのか、少年は勝ち誇った様に笑う。

「なんなら、ついでにアンタも凍らしちゃおうか」

付け加えて、天使とは残虐なことを平気でやってのける。

存在を見ることが出来ない人達が語るのとは、雲泥の開きがあるのも事実。

こんな人の多い場所で本気になられては困ると、ラヴィは不本意ながら謝ることを決めて頭を下げようとした時、背後から違う声があった。

「おいっ」

(…え)

「街に出て早々…ボケがつ　！　そのくらいにしとけつ、シエラ」

その声に、ラヴィは胸の音がトンと高鳴り、跳ねるのを感じる。

「やっと追いついたの　？　クレイドって足遅っ」

「阿呆かつ。俺様はお前と違って羽根がねえのっ、一緒にすんなっ」

「あー、はいはい。そーだっ本体じゃなかったケドね、あつたよカ  
ラク・ラリス」

「……そいつは違う、放っておけ。　なあ、何年振りだ　？」

(う。。。…やっぱり、間違いじゃないやつ)

何となく、振り向きたくない。と思っってしまうラヴィだった。

「ほお　？　いい度胸じゃねえーか、俺様の言葉を無視するなんざ  
っ」

「百万年早いっ…でしょ　？　　お久し振りです、師匠」

振り向きざまに、間違いなく飛んでくる足蹴りを見事に交わし、ラ  
ヴィはほくそ笑む。

「……ぶっ。何だお前、ちつとも大っきくなってねえのな」

「五年振りくらいなんで、大きくもならないでしょ　？　僕は」

「あそ。まあ精々気張れやつ、それも必然……じゃあな。」

「え？」

五年は、人が再び出会うには結構長いと思うのだけれど。やけにあっさりと、踵を返すクレイドにラヴィは啞然とする。

「クレイドっ、アイツと知り合い？ 僕なんかジエラシー感じちやうなあ…それに、違っつてどう言う意味？」

「あん？ …あ。おいラヴィ、お前のソレ…ココじゃ取ってる」

「師匠っ、あの…」

耳元を一度だけ指すと、ラヴィの言葉を聞きもせずクレイドは再び歩き出す。

これが師弟の再会？ これだけ？

あまりの呆気なさに、ラヴィも引き止める理由すらあるのかないのか分からなかった。

「……………おい。」

すると今度は、横から聞こえてくる野太い声。明らかにそれは、今自分が置かれている状況を把握するのに容易い怒りの声。

「明日から来なくていいから。クビだ新入り」

《何回目だ。コレで》

「……………言わないで、それを」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

《つまり、だ。お前にはこーゆるんじゃナイ仕事をしろってことだろ》

「どんなだよ？」

《術者としての才能を活かすってのは？》

「やだ。」

即答かよ…明後日の方を向いて、ジインは以前から気になっていた事を訊ねる。

《オマエってさ、正直イヤなワケ？ 精霊使いとか呪術全般》

「難しいこと訊くね…肯定しちゃうと自分を全否定するみたいだし…準備出来たよ、いい？ 氷だけ溶かしてよ」

《面倒臭い》

「仕方ないでしょっ、僕だって嫌なんだからっ」

《へえへえ》

本当に面倒臭そうに口をパクパクと開けて、ジインは火焰を吹き掛けようと氷の塊の前で浮遊する。

「でも半分は、嫌かな　って、ジインっ駄目っストップ　！！」

塊の前で手をパタパタさせて、ラヴィが制止する。

《…ぐ。なんだ馬鹿ラヴィっ！》

「だ、誰かこっち来る」

《つくづく、面倒臭い》

「あつあのっ…どちら様でしょうか？　ここ表のレストランの私有地なんです」

「おいつ、お前」

「あの、ご用件を…っ」

随分と横柄な態度で、ズカズカと男が入って来る。

止めないと、クビになったとは言えまた怒鳴られることは必至。それにあの氷の塊を見られると説明も一苦労だ。

「人を追っている。ここに、背の高い大柄の男が来なかったか？」

男の脇に差す剣に視線を移す。柄の形から、国王直属の兵士であることが分かるが、身なりは一目でそれとは分からない様に崩れていた。

( 師匠のことだよなあ…何やってんだか、あの人は… )

「聞いているのかっ、お前…んん？　女か？」

「男ですよっ…えつと、そんな人見てないですよ、こんな場所には来ないでしょ」

「ふうん？　じゃ、あれは何だ」

「あ、あれえ…？」

「あの氷の塊は何だっつて訊いているっ」

全く、何てついてない日なんだ今日は。小さく吐息を零して、ラヴイは無理矢理笑顔を作るが、間違いなく引きつっていた。

「来たんだな、クレイド・ラガーフィールドがここに」

（フルネームでご存知なんですか……あははは。もう無理っ）

元々、言うなとも言われていないのだし、見たと言ったところで、あの人が窮地に立たされるとは考えられるはずもなく。

「…来ました、少し前ですが」

「それで？　お前は何だ、知り合いか？」

「う。。…知り合いつて言えば、知り合い……かなあ」

「何だあつ！　？　その微妙な返事はっ、一般人だからって…いや、お前素性は？」

（とばっちりじゃないかーっ）

キルトの街に来て十日あまり、何事も無く過ごして来たと言つのに、クレイドに関わると、過去も現在も、きっと未来だつてろくな事がないのだ。

「……レストランの下働きを、ついさつきクビになつた者です」

お昼時の雑踏。

王都からさほど遠くも無いこの街は、完全に復興を遂げて活気に溢れていた。

沢山の商店と住宅があり、国から直接の仕事を請け負っている執務所や作業場に国軍の営舎、少し離れた場所には、罪人を捕り込む監獄もある。

「……あの、僕別に悪い事なんて」

「どうだか」

「推定で縄まで掛けられるのっておかしいですっ」

「だつたらちゃんと素性を明かせ。それに……」

人目もはばからず、両腕に縄を掛けた状態で街に行く。

道行く人の視線が突き刺さす様で、ラヴィは俯いて男の後ろから自分に伸びている縄だけを見て歩いた。

「お前がもし術師なら、その縄は必要だろっ」

答えられずに、ラヴィは押し黙る。

国王直属の兵士であれば、ピアスの石を見せればすぐに理解し釈放されるだろう。

でもそれは、自分が何者かであることを教えてしまうことになる。

(ジ…ジレンマ)

縄を見詰めて吐息する。

輪の部分に、術が使えない様にルーンが記されてあるが、ラヴィにとってそれは何の意味も持たず、逃げることは容易い。

「俺は呪術師類が大嫌いなんだ」

「え」

「あんな奴らと俺らが同じ人間だって？ 冗談じゃない」

この国の兵士とは思えない言葉に、ラヴィは男の背中に目をやる。離れてはいるが、アモネアジールの存在が充分に行き届くこの地で、それは失言くらいでは済まされない。ましてや、この男は国王が認めた国軍兵士、そのような思想を持つ者は危険人物とみなされて然りだった。

こんな人も居るのかと少し驚いたが、考えてみれば一人で行動しているのもおかしい。大抵は数人で街に出るものだ。

「あの…僕、嘗舎に？」

「いや」

(じゃ…何処に行くんだろ。そもそも師匠って何で国軍に搜索され

てるんだ？)

疑問だらけであるが、だからこそ気にもなる。ここはとりあえず、大人しく付いて行った方がいいと判断した。

「着いたぞ、中に入れ」

「……あの、ここって宿、ですよな？」

どう見たって普通の宿場。訝しげに建物を眺めていたら、強引に引っ張り込まれて、引き摺る様に二階の突き当たりの部屋に突っ込まれる。

「ここで待ってる、話ってくる」

有無を言わずで扉を閉め、鍵を掛けられた。

「うーん。どうしようか」

《どーするもこーするもっ、ノコノコついて来たのはオマエだろーがっ》

「分かってるよ、でも気になって」

《あそ。オレ様は知らんぞ》

「いいよあ…いざとなったら一人で何とかするから」

窓を覗き込んで外の景色をぼんやり眺め、ラヴィはクレイドの事を思い起こす。

なんだかんだ言っつて、自分はクレイドを好いているし、尊敬もしている。

(…久し振りだったのに、素っ気無いよ師匠)

少し淋しさを感じて、同時にあの天使のことが頭を過ぎる。

(でも…流石師匠っつて言うか、天使にですらあの口調がまかり通つてるし)

微笑み、やはりクレイドは昔のまま変わりないのだと、何か理由があるに違いないとラヴィは考える。

「シエラ…とか言っつてたっけ」

独り言を呟いて、ポケットの中のピアスの石　聖光碧石に意識を向ける。

聖光碧石　もう一つ、術者間での呼び名を『カラク・ラリス』と言った。

持つ者を選ぶこの石は、元は二対で一つになるが、今は別々の国が所持している。

その欠片で造られたのが、彼の身に付けているこのピアスだった。

(あの天使、カラク・ラリス探してるみたいだけど、あの石はアモネアジールだし、それに…)

ガチャガチャ…と、鍵の開く音がしてラヴィは振り返る。

開いた扉、そこに立っていたのは先程の兵士ではなく、若い…女性。

「　やはりっ　！！」

「…え」

素早く扉を閉め、女性が歩み寄るとラヴィの前で方膝を付いた。

「お久し振りです。カジカに御座いますっ…ラヴィ様っ！！」

その喫驚の声にラヴィも驚き、それから自分の目を疑う。

「カ…カジカっ！？カジカ…ホントにカジカなのっ！？」

彼女はにっこり笑って、手を差し出す。

「はいつ、カジカですっ！ラヴィ様っ」

今日二つ目の再会は、本当に思いもよらない人物だった。

next

## 蒼翼の欠片

カジカ・クライス。

彼女との出会いは、九年程前にさかのぼる。

『カジカと申しますっ。何なりとっ…何なりとお申し付けくださいませっ、ラヴィ様』

赤毛の髪に白い肌、ブラウンレッドの瞳が印象的な彼女は、その時まだ十歳だった。

『ラヴィ様の側に付き従うのが私の仕事です、ですからどうかご命令を』

正直、僕は彼女に戸惑い、その一生懸命に語りかける言葉も、真っ直ぐに向けられる瞳からも逃げていた。

「……ラヴィ様」

その頃、エルトフェニアは大陸全土に広がる戦争の真っ只中にあっ

た。戦況は一層厳しさを増し、貴族であった彼女の父は、その戦での軍事事業に失敗し、一家は没落、離散する。

見兼ねた当時の国軍元帥が、元々家同士が懇意にしていたこともあり、まだ幼い末娘のカジカを引き取り、僕の身の回りの世話をする者の一人としてアモネアジールに入館させた。

「ラヴィ様っ…？」

「あ…はいっ」

「どうか？…腕、まだ痛みますか」

「うっんっ、全然っ…そうじゃなくて、ごめんっ」

「…六年に、なりますか。最後にお会いしたのが終戦直後でしたから」

お互い、あまりいい記憶がない過去を振り返る。

出来れば、取り分けて彼女は逢いたくなかったのではないか。とラヴィは思う。

「ラヴィ様はあの頃のまま…髪が短くなられたくらい、何も変わられてらっしやらない」

「君はその…随分と女性らしく。驚きました、すっかり変わっていったから」

苦笑い、何一つ変わらないと言われた自分を恥じる様に、ラヴィは少し俯く。

「もっすっかり女ですよ…ラヴィ様」

窓際の彼女がゆっくりとラヴィに近付き、正面に立った。

「…カジカ」

「嫌ですよーっ、もっっっ！…！」

ばっちんっ。

(…ええ？)

思い切り背中を叩かれて、ラヴィがつんのめる。

「カ…カジ、カ？」

「あ。すみませんっつ、ごめんなさいっ私馬鹿力で…ラヴィ様になんてことをっ…本当に本当につごめんなさいっ！！」

上目遣い、髪の色と同じくらい顔を真っ赤にして、カジカはラヴィを見詰める。

「カジカ…ぷっ。」

噴出して笑うラヴィに、カジカもつられ声を出して笑った。

「お逢い出来たこと、感謝します…ラヴィ様」

「僕もです、カジカ」

それでも、僕たちに笑顔が無かった訳では無い。ほんの少し、眠りに付く間際に話した幾つかの思い出たち。それは、ほのかに優しい記憶として今でも残っている。

あの日、鮮烈なまでの一夜を除いては。

「旅をされていると聞きました…アモネアジルには？」

だから、それには触れない。

深く心に刻まれた痛みが蓋が出来れば、お互いを前にしてもまた笑っていられるのだと。

それを、知っているから…僕も、彼女も。

「帰ってないです。消息は…もしかしたらキルトに居ることバレてるかもだけど」

椅子をベッドの前に置き、彼女の前に腰掛ける。あの時と位置は逆であるが、いつもこうして話していた。

「旅って…もしかするとクレア様を？」

「うん、探しつつの旅って言うか社会勉強って言うか…手掛かりなんかも全然なくて、生死だって分からないだけど」

「…それが、クレア様を探し出すことがラヴィ様の生きる意味ですか？」

「カジカ…？」

「あ、いえっ、すみません…でも」

暫し、黙り込んだ後ラヴィは少し重く口を開く。

「分から、ない…けど、僕自身の決着は付くはずだから」

「それは…前に、進む為ですよね」

「どう、かな…自分のことなのに何にも分かんないや」

誤魔化す様に笑うのは彼の癖。

辛くても笑って、人の為にしか涙を流さない。悲しい時に、自分の為には泣かない人。

そんな時、いたたまれずに貴方を見ている人がいたこと、気付いていただろうか。

(…………知らない、よね)

その孤独は、貴方だけのものだった。

目を合わせる度、向けられるのは微笑み。それは拒絶と何も変わらない、余地なんかどこにも見つからなかった。

「カジカは？ 国務に就きたいって言ってたよね」

知らぬも罪。深い翡翠の瞳に今映っているのは、確かに私ではあるけれど。

「ラヴィ様」

「ん？」

貴方とその目で見る世界は、きっと私たちとは違う色とカタチ。

「相変わらずお美しいですよねえ…何か秘訣とかってあります？」

「…カジカあ、だから僕男だって！そんなこと言われたって、ちっ

とも嬉しくないよっ」

「だってえ？ 悔しいくらいお肌とか綺麗だし…髭とか生えないんですか」

「髭…？は、生えるのかなあ、そのうち…でも似合いそうにないなあ」

「えええっつ！？ 嫌っ、嫌です絶対っ、生やしちゃ駄目ですよっ！ 胸毛とかもNGですからねっ」

「あ、それちょっと男っぽくていいかも」

「よくありませんっ、根性であらゆる毛を阻止して下さいっ」

「あら…っつて、またそんな無茶な…んー、でもカジカの頼みなら善処する」

「ぶっ。もうっ、私たちっつて」

「進歩なーいつ、馬鹿な話ばかり」

昔の様に笑って、座ったまま背を反らし、カジカは低い天井を見上げる。

「でも楽しかったんですよ、あの頃」

「…うん」

「私、今は国軍に。クレイド将官の補佐を あ」

思い立ち、視線を落とすカジカのその正面で、僅かに身を乗り出したラヴィが口を開く。

「それっ　！　カジカ、師匠どーしちゃったの　？」

「じ…実は、ですね」

改まり、姿勢を正すカジカが硬い表情でラヴィを見据える。

「貴意を仰ぎたく。アモネアジル紺碧の左座　　クラフィスト  
最高審議官…貴方様に」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「と、言うワケでえ、ナビゲーターに付いてもらうことになったラヴィ…くん、でーすっ！ はいっ拍手っ」

しらっとした空気が漂うのも当然。

宿の一階にある食堂に呼び出された二人の男が、怪訝な表情でラヴィを一瞥し、そのままカジカに視線を移す。

「拍手拍手っ、ぱちぱちっ…ちよっ…！ 特にロイズっ、態度悪いよっ」

テーブルに肘を付いた姿勢で、カジカに溜息を漏らすのはロイズと呼ばれた男。先程、ラヴィをここへ連れて来た兵士だった。

「カジカ殿、急に言われても…これ極秘任務なんですし、それに…んな子供を」

やや物腰の柔らかい、もう一人の男がエドガー。

事前にカジカから名前と簡単な経歴は聞かされていて、二人とも二十代後半の国軍兵士で、ロイズの方はカジカと同じクレイドの部下である。

「でもラヴィくんはクレイド将官の知り合いで、私とも知り合いなのよ。あの方を三人で捕まえるなんて、しょーじき無理ってもんじやない？ ここはラヴィさ…くんの良く利く鼻を借りて…ね？」

「……犬か。コイツは」

ロイズの突っ込みに、流石にちょっと無理があつたかと、カジカは頭をポリポリと掻く。

「うー。ラヴィくん、ちょっと」

「やっぱりマズかったかしら？ 展開が強引過ぎ、私の演技がヘタクソ…どっちです？」

「うーん…じゃなくてっ、やっぱり僕は単独で探した方が…見つけたら報告するし」

「えーっ、ダメダメっラヴィ様と一緒にがいいもんっ！ ……そうよっ、私がリーダーなんだから従わすべしっ」

「いや、カジカあのね…」

強引なのは今に始まつた事ではない。昔から、一本気な彼女の性格は好きではあるが。

(でも僕だってあれじゃ納得しないよ)

「命令とあれば。構いませんよ俺は」

どうしたものかと思案していたら、意外にも無粋な…は失礼だが、ロイズの方が口を開いた。

「ロイズっ、珍しく話が分かるじゃない」

「私も…断固として反対って意味ではないので。ですが彼の素性はもう少し知っておきたいですね、特に経歴は…でしょう？ ラヴ

イくん」

「そう、ですよね……」

嘘を付くのは苦手だが、本当の事が言える訳でも無く。だからいつもは深く追求されない下働きを選んで仕事を貰っていた。

「ラヴィ・クラフトです、年は十五で生まれは…この国です。両親は六年前に亡くなりました…えっと、仕事はレストランや商店で雇ってもらって生活してます」

若干の偽りを混ぜつつ自己紹介を始めるラヴィを、少々気を揉みながらカジカが見守る。

「学歴は？」

「学、歴は……」

「何処かで学んだとか、修めた学術なんかはあるの？」

どの程度で答えるのが妥当なのか。言葉に詰まるラヴィの横で、カジカが見兼ねて口を挟む。

「ラヴィくんはあのクロスフィールドだって舌をまんんんっ」

「あははははっ……そ、そこそこ？ 上級学位は修めた、かな。…やだなあカジカ、僕が話すから君は黙っててね」

口許を塞ぎながら、ラヴィが苦笑う。

「今、クロスフィールドって…あの該博で名高い？」

「はあ、まあ…」

「十五で…上級学位」

「えっと…あの…その」

「凄いだね、伶俐な頭脳は大いに役立つよ」

エドガーがにつこり笑って褒めるものだから、ラヴィは心苦しくてペコペコと頭を下げ返す。

（まあ、学んだのは本当だし。いいよね、ここは）

「ってことはだ。今はともかく、元は貴族クラスの身分でことだよな。クロスフィールドに学べるのは特別な奴等だけだ」

厳しい目を向けて、ロイズが訊ねる。  
「やっぱり良くない。嘘はその嘘をまた嘘で塗り固めていかなければ、すぐに剥がれ落ちてしまうのだから。」

「そーなのよっ、ラヴィくんは私と同じ没落した元貴族なのっ。ほら、顔も上品でしょーよっ、それで私たち知り合いなんだよねーっ」  
「どつりで。確かに男にしておくのは勿体無いくらい繊細な顔立ちですよ」

立ち上がり、エドガーはラヴィの目前で人差し指を伸ばすと、頬にツンツンする。

「その瞳もまるで宝石の様ですね、ラヴィくん」

「あ、怪しいわよっつ　！　エドガーっラヴィくんから離れなさあ  
あいつつ　！！」

「すみません。握手しようと思ったのですが、つい」

「つい　？　ま、まあ気持ち分からないでもないけど…いえいえダメですっ、エドガー着席っ」

「はいはい」

「俺には板挟みくらってる子犬に見えるがな」

ぼそり言うロイズに、何度も頭の中でごめんなさいをラヴィは繰り返した。

「まあいい…それで　？　どーやって将官を探し当てる　？」

「そうね、その作戦のことなんだけど…」

(…か、体に悪い)

嘘なんて付くもんじゃないと、宿の中庭にある大木に背を預けて、ラヴィは空を仰ぐ。

午後、柔らかい日差しが木漏れ日になって、枝葉の間から降り注ぐ。

そのままズルズルと腰を下ろし横たわると、やや斜面のそこをコロコロと転がって、ラヴィは両手を宙に伸ばした。

「きれい」

指の間から漏れる日の光りに、僅かに双眸を顰めながら呟く。そして。

「 師匠のあほう」

もう一言呟いて、ラヴィは目を閉じる。

『クラフィスト最高審議官      その座は今もお変わりなく、貴方の称号に御座います』

王政のこの国で、唯一王に進言を許される元老院の中にあり、最高位あたるのが審議長。その下に続くのが審議官であり、左座と右座の両名が現存する。

その左座、紺碧に染まる椅子に座ることを許されたのが、このラヴィ・クラフトだった。

『随分と畏まるんだね』

何か、一本線を引かれた様な気がして淋しげに笑うと、カジカはペロツと舌を出した。

『すみません。一度言ってみたかったですよね、それだけ……ごめんなさい』

『いえ、僕こそ…それで師匠が？』

『はい、先日のことですがアモネアジールにて保管されていた聖光碧石が、何者かによって盗み出されたんです』

『うそ、』

『アノ、完璧に厳重に保管されていた聖光碧石が、です』

首を振って、カジカが話を続けた。

『だってアレは…』

『はい　ラヴィ様の結界が破られました』

『マジ…？』

『まじまじ。大真面目です』

眉を顰め、思案するラヴィをカジカがじっと見詰める。

『……無理だよ、例え師匠でも僕の…いえ、誰か他に内部の者になら、もしかすると出来ちゃう人居るかも』

『クレイド将官には無理だと？』

『それは……うん』

『ですよーっ　！　良かったあ、とりあえず将官自らはやってな

いんだ』

手を胸元にカジカは一安心するが、まだ何の解決の糸口すら掴めていない。

『でも、それなら師匠が疑われてるのはどうして？』

『それがですね、聖光碧石奪還大作戦の指揮を将官が任されたんですが、途中から雲隠れしちゃって怪しまれてるんですよ。で、私が極秘で今搜索中って訳なんです』

『大作戦…ねえ……はあ、何やってんだか師匠は』

クレイドに結界を崩されることは無いが、何らかの関係は無きにも非ず。

まだ何も分からない現時点で、例の天使の存在をラヴィはカジカには伏せて置くことにした。

『どうです？ 他って、誰か心当たりありますか』

『うーん…あるって言えばあるし、無いって言えば…内部の情報が乏し過ぎてなにと』

『そうですよね、私もそのことについては何も聞かされてませんし、大体っアモネアジールって隔離施設宛らですから』

『うんうん、だよねえ……ううう、ってことはそのうち僕んここに使者が来るかも…いや、来るよね絶対』

拒絶反応見え見えの表情に、カジカが苦笑いを浮かべていたが、は

たと思い立って手を打つ。

『ラヴィ様、それなら来る前に片付けちゃえばいいんですよ』

『ん？』

『我ながら妙案っ、一緒にクレイド将官探しましょっ！　ラヴィ様っ』

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

小説と同じくらいの趣味で絵も描いてますっ^^

ラヴィの絵がとにかく大量にあります（笑）

カジカや師匠も…若干。

良かったらブログの方にも遊びに来て下さいねっつ&amp;#9  
835;

[http://blogs.yahoo.co.jp/r\\_r|s\\_i  
mplicity](http://blogs.yahoo.co.jp/r_r|s_i<br/>mplicity)

ですっ。

## 蒼翼の欠片

カジカのその案に乗ってしまった訳だけど。  
睨を伏しがちに開き、視線は投げ出した左手の指先に合わせる。  
若草の匂い、掴んで筆りパラパラと散らす。

（あの石のこと…詳しく知ってる人っていえば限定されるけど）

だからこそ、使い道に限りがあることだって心得ているはずだろう。

「ああっもうっ、考えたって今はしょうがないよっ」

起き上がり、今度は自分の髪をくしゃくしゃに掻き乱して左右に首を振る。

ともかく今は、

「クレイド・グレイ、ここへ」

支配者に呼び出されたのは一本の剣を生きモノとして具現化した、小さな白いトラ。

その容はどう見たって猫に酷似しているが、トラならしい。

《マスターラヴィ、お久し振りです》

膝元にちょこんと座り、クレイド・グレイはラヴィに擦り付く。

「あのね、クレイド・ラガーフェルドの居場所…君なら分かるよね」

《元・マスターの居所ですか。はい》

「教えてくれる？」

《マスターの願いであれば》

「な、何かご機嫌ナナメ？」

《いいえ。クレイド・グレイは元来無愛想なんです、申し訳ありません》

何と言うか、魔法剣のくせにシユールな持ち味のクレイド・グレイは、クンクンと鼻を利かせる様に前足と背を伸ばして顔を突き出す。

「まさか匂いで分かるのお…し、師匠の匂い！？」

《それ、違いますから 掴めましたよ、ご案内しますか》

「よ、宜しくお願いします」

《はい。それと、クレイド・グレイに敬語は必要ありません、マスターラヴィ》

「あ…はい、じゃないっ、おうっ 「！」

《…無理にキャラを変えるのもどうかと》

（はははは…扱いにくいっ）

「あ、居らっしやっつた ラヴィ様っ 「！」

渡り廊下から、手を振りながらパタパタとカジカが駆け寄って来る。

「カジカ」

「何なさって…髪がぐしゃぐしゃですけど」

「えっと、ちょっと転がってみたい…」

「草も付いてますよ。触れて、構いませんか」

「？ はい」

何故か恐る恐るラヴィの髪に触れるカジカに首を傾げる。

「うきゃあつ、ラヴィ様の髪ってウサギさんの毛みたいっ、やらかあ〜」

「そう？ あーでもよく絡まるんだよね」

「うーん、確かに。草がすでに絡まっていますよあ…くすっ、子供みたいですラヴィ様」

「ごめんなさい。…カジカ、師匠の居場所分かるみたいです、これから出ますか？」

彼女に可視は出来ないが、膝の上のクレイド・グレイに視線を移して訊ねる。

「ええっ！？ もう分かっちゃったんですかーっ」

「いてっ、カジカ髪っ」

「わあっ、すみませんっ引っこ抜いちゃった。でも取れましたあ…  
草も一緒に」

「う…ありがと。じゃ、ロイズさんとエドガーさんに」

「はいっ、すぐ召集かけますっ！ ロビーで待ってて下さいっ」

「元気だなあ、カジカ」

《知ってます、彼女。ですがあんなに明るい人でしたか》

「うん…でも、あれが本来の彼女なんじゃないかな」

《そう、ですか》

「じゃ、行き…行くぞっ！ クレイド・グレイ」

《もういいです。ご無理なさらずで》

ラヴィがロビーに到着するや否や、ロイズが聞こえよがしに物を言う。  
う。

「どつやっつて居場所を突き止めたのかは、訊くなだそうだ」

まだ食堂に居たらしい二人は、ラヴィより先にここへ来て身支度を整えていたが、来るなりぶっきら棒に彼にそう言つと、不審を越え

て完全に疑いの目で見る。

「術でしょう？ 使えるなら別に隠さずとも」

エドガーも肩を竦めてラヴィに告げる。

「すみません」

「あれか？ 俺が術師が嫌いだって言ったから、だからわざと言わなかった？」

「ロイズさん」

「可笑しな気は回すな。仕事は仕事、ちゃんと割り切ってるつもりだ」

「…はい」

「私もね、呪術は使えませんが飛竜は従えてますし」

「飛竜？」

「キメラですよ」

気にするなと肩を叩いて、エドガーが笑いかける。ラヴィは二人に向け頭を下げて謝罪した。

「全員揃った？馬の用意出来たから行きましょつか。ラヴィくん案内宜しくね」

「はい」

「遠いの？ 大体でいいんだけど」

「いえ然程。一旦街を出て北に進んで下さい」

「北って…あれか？」

珍しく口を挟むロイズに、ラヴィは頷き返す。確かにあの場所は、戦を知る兵士ならば反応して不思議ではない。

「はい、恐らくは古戦場　アルトニア遺跡のあった場所です」

「クレイド将官、そんな所で何を」

「さあな、行ってみりゃ分かんたろ」

next

## 蒼翼の欠片

アルトニア遺跡は伝説上『神の建立する都市』として、叙事詩され吟遊詩人らによって口承されてきた。

その遺構は神殿と思われる建造物や住居跡が残っており、多用途に転用し維持管理もされていたが、先の戦によって多くを失い、今は遺跡には程遠い荒れ果てた廃墟になっていた。

「知ってますか？ アルトニアには、考古学上もありえない構造の建造物があったそうですよ」

その広大なアルトニアの、現在は放置状態となった荒れた地に踏み入り、エドガーがラヴィに語りかける。

「少し、学んだ程度ですが…天導回廊のことですよね」

「そうです。神殿の内陣に高く伸びた柱状のものが天にまで届いていたとか、いないとか」

「あ、でもそれって…」

手綱を引くエドガーがニンマリと笑いかけて、前に垂れた長く編まれた髪を後ろに撥ねる。

「ご謙遜ですねえ…そうですよ、柱は天ではなくアースカルドに向け伸びていた。叙事と違い、どうやらこちらが正しい史実の様です」

同意を求める仕草でやや首を傾げるエドガーに、ラヴィは微かに笑って返した。

「ラヴィくんっ、あの神殿の跡であってる？ そろそろ馬を下りて探した方がいいと思うのよね」

「そうですね。場所は間違いないですよ、目立つし分かれて回り込みますか」

「だよ、ねえ…堂々と正面からはちょっと行きにくいかも」

リーダーとは思えないカジカの口振りに、エドガーは苦笑いロイドは何処吹く風と聞き流す。纏まり無いなと思いつつ、ラヴィは馬から下りて上着を鞍にかけた。

「よおしっ！ じゃ二手に分かれましょっ」

「って、何で私はエドガーとなのよっ」

「それなら私だってラヴィくんの方がいいですよ」

断然。と付け足して、嘆息するエドガーにカジカが睨みを飛ばす。

「ダメダメっ、エドガーと二人きりは危険だわ。ここは仕方ないわね我慢っ」

「あんまりな。まあ、お互い様ですか」

「…あのさ、エドガーって別にあっち系の人じゃないよね？ 何故にご執心？」

「訊きますか。貴方なら言わずもがな、かと」

「何よお、どーゆー意味かしらね」

含み笑いだけで何も答えないエドガーに、今度はカジカが溜息を漏らした。

「まあ、ここは一つ仲良く……カジカ殿、ブレスレッドが」

山羊のなめし皮で作られた腕輪の、装飾された紅い石が光りを射す。呪術を施された石が危険を知らせる、術者の敷いたトラップを回避する時に用いられるアイテムの一つで、主に術を持たない兵士が身に付けていた。

「この先に何か仕掛けてあるみたい、エドガー貴方の飛竜で何とかならない？」

「飛ぶのはマズイですが、何も無い道は選択できるかと。やってみましょう」

「お願い。…ラヴィくとロイズは大丈夫かしら」

「分かっているでしょうに」

「なんか言った？」

「いいえ。そこで待っていて下さいね」

頷き、彼が離れるのを見届けると、崩れ落ちかけた塀に半身をまたれ掛ける様にして待機する。

辺りは建物が崩れ、足許には瓦礫が広がる。大昔の栄華は何処へやら、寂れた風景にカジカは目を細め、それから不意に口をついた。

「 貴方がやったの？ 」

「 ああ 」

長く伸びる黒い人影が、後方からカジカをゆっくりと覆い、くぐもった声がした。

「 ……急いでいるのでね。約束のものは用意出来ましたか？ 」

「 本当に いえ、もちろんよ 」

振り向きもせず、カジカはポケットの中で握り締めた小さな紙包みをそつと手放すと、全身を黒の布で纏った男がそれを受け取った。

「 間違いは無いな 」

「 当たり前でしょ…っ、早く行ってよ 」

やや声を荒らげてようやく振り返るが、そこにはもう誰の姿も見当たらない。カジカは唇を噛んで眉を顰める。

「 ……そうよ、もう後戻りなんて出来ないんだから 」

呟いて、こぶしをぎゅっと握り締めた。

「カジカ殿？」

エドガーの声に、カジカは一呼吸置いて見向く。いつもと変わらぬ表情と仕草で。

「どうだった？」

「大丈夫ですよ、少し迂回すれば」

「そう、じゃ急がないと遅れとっちゃうわね。行きましょっつ」

《マスターラヴィ》

雑木林から神殿を目指し、黙々と歩き続けるロイズを見て、後方に付くラヴィの足許に添うクレイド・グレイが話しかける。

「ん？」

《あの人…クレイド・グレイとイイ線ってますよね、無愛想さが》

「そう…そうかなあ…ははは」

《…マスター》

「なに？」

《クレイド・グレイはたまに原型を磨かないと錆びるんです》

「え。ええええつつ！？ほっほんとっ！？」

《ウソです》

「う……え？何が言いたいのっ！？クレイド・グレイ」

小さな白いトラの我が身に困惑するラヴィを、そのクレイド・グレイは無表情で見上げながら答える。

《ちよっと、冗談を言ってみました。ですがキャラじゃありませんでしたね、やはり》

「……………えっと、あのークレイド・グレイ」

もしかして、師匠は扱いに困って手放したんじゃないだろうか？  
などと思ってしまう。

更に彼はこれでナイーブなところがあって、笑い飛ばしたりすると傷付くだろうと考えて、必死で言葉をラヴィは探した。

「ちよっといいか、クラフト」

「あっ、はいっ？」

立ち止まり、振り向くロイズの眉間には、これでもかっというくらい深いシワが寄せられていた。

「危ない独り言なのか、俺に言ってるのか見分けが付かんっ、悪い

が極力静かにしてもらえないか」

「すっ、すみませんっっ」

またやってしまった。何度もぺこぺここと頭を下げ、謝るラヴィに、不機嫌を上乗せするがそれ以上は語らずに、ロイズはまた歩き出した。

《マスターラヴィ》

呼びかけるクレイド・グレイに、ラヴィはぶんぶんと首を振って、口許に指を立てる。

《いえ、そうではなく　感じませんか？》

「…え　ロイズさんっ止まってっ　！　！」

「何だっ　！　？」

仏頂面で頭を掻くロイズの腕を掴み、後方に引き寄せる。

「感知タイプのトラップです。種別は…黒魔術、師匠のじゃない　壊しますから下がって」

n e x t

## 蒼翼の欠片

片膝を付き、ラヴィはそつと地面に手の平を置く。暫らくそのまま動かなかつたが、突然地表から離れた手で髪をわしわしと掻きだした。

「クラフト？」

「なにコレ、いじめ？ あーもお何か腹立ってきた」

理解出来ないラヴィの発言に、ロイズは表情を歪めて腕を組み、言いたい言葉を呑み込む。

「ロイズさん、ここから先…あの神殿の辺りまでに、全部で二十三個の種が仕掛けてあります」

「種？」

「トランプのことですが、最初の踏んだら全部が発動する仕組みなんです。俗に棘の道って呼んでます」

「…それで、その術にかかったらどうなるんだ」

「死にはしませんが、三日は動けないかな。回避って道もあります  
が…僕、壊しちゃっていいですか？」

言ってる事とは逆に、不機嫌を露わにラヴィが尋ねる。

「見つけた以上放っておけんだろっ…！しかし、二十三個だって

「？」

「はい、明らかに僕達に対する苛めでしょうね。こんな数、普通ありえませんか」

僕達と言うより自分にだろっ、間違いなく。

「お前そう言えばさっき いや、やれるのか？」

ただ頷くラヴィに、ロイズも頷き返した。

「じゃ少し離れて、その木に掴まって下さい。揺れますから」

どんな方法で壊すのか。とにかく彼に言われるまま、下がって太めの木に手を付いて神殿までの道を眺めてみる。

「俺には何も無いただの林に見えるがな」

視線をラヴィに戻し、その後姿を見詰める。細くて頼りなさげな背中、ロイズは吐息を漏らすと、振り返った彼が取り掛かりのサインを送ってきた。

「師匠が天使にやらせたのかな…それとも他のとにかく、何だろっこの怒り」

自分でも説明出来ない怒気を持て余す。何をそんなに、この程度のことイライラしているのだろっ。

「クレイド・グレイ      ファルシオンに」

水平に伸ばした左腕。足許のクレイド・グレイは音一つ立てずにポンと跳び、空中でクルリと回転しながらその形状を元の形へ剣に変えた。

「ちょっと荒いやり方だけど」

そうでもしないと、感情に収拾が付かないと思った。

「……お、重っ」

両手で剣を持ち、鋭利に伸びる刃先に目をやりながら、内心「錆びてなかった」とか考えて皮肉に冷笑してみたり。

「ああっつ、もうっつ僕の馬鹿野郎っ　！！」

高く持ち上げた剣、そのまま勢いよく垂直に地面へ突き刺した。

「その道は枳棘地ききやくに穿つは我が剣、クレイド・グレイ」

剣身を指先でなぞり、流線を描く様に指を地に向け払い除けた後、おもいきり空気を吸い込むと吐き出す息で声を張り上げる。

「いつ　けええっつっ　！！」

叫ぶ声と同時に、剣から地上を爪痕の様なものが走る。犀利なそれは、地中に深く達して地鳴りが響き、辺りは激しく震動した。

「あと四つ、三……二………ロイズさーん、終わりましたよー」

眉を顰めて、ロイズは神殿に続く林と、地に刺した剣を引き抜いて

こちらに向かつて来るラヴィを交互に見る。

「なんだ、あれは…地震？ 木が薙ぎ倒されて…今は、それは術なのか」

「い、一応術ですよ。混ぜたつてゆーか、説明はややこしいんですけど」

「説明はいい。それより…クラフト、その剣」

自分の持ち物であつて、そうでない様な。それぐらい不相応な大きさの剣にラヴィは一瞥する。

「魔法剣、いえ…クレイド・ラガーフェルドから譲り受けました」  
柄を握り締めて、ラヴィは思い定める。

「お前は」

「ロイズさん…っ、僕本当は…あのっ、これ見て下さいっ」

シャツのポケットにしまつていたピアスを掴んでロイズに突き出す。俯いて、その手が震えていることにも気付かないのか、カ一杯に握り締めたこぶしは硬く、容易には開きそうにもなかつた。

「僕が僕だつて証明出来る物これくらいしかないんですっ、だから…」

「クラフト」

名を呼ばれて、肩を僅かに竦める。嘘つきな自分を恥じ、ロイズの顔を見ることが出来なかった。

「それ、引っ込める　行くぞ」

ポンとラヴィの肩を叩き、ロイズは歩き出す。一面を上げて踵を返し、数歩進んでから小さな声で彼に呼び掛ける。

「誰かなんて興味ない。お前はお前の仕事をしてるんだ、それでいい」

老廃したアルトニアの神殿。

隆盛期には、都市を眺望出来るその場所に壮麗に存在していた。

内陣を柱が囲む周柱式神殿は、翼廊の幅も広く、列柱によって三等分された三廊式の建築物で、内殿が露天になった小神殿が設けられていた。

そこに、一際太く伸びた青灰色石灰石の円柱が、天にも届く勢いで伸びていたのだと言う。

今はその跡形を僅かに残し、ひっそりと冷たい石灰石と大理石の塊がまばらに形を残しているだけだった。

「へえ。一掃したんだ、アイツ」

くすんだ灰色の翼を広げて、嘲笑する。

「しかも。アレ絶対ワザとだよ、あんなこれ見よがしなやり方…単純なおバカさん」

愉快的口振り、もう一度嘲て転がる石の上に座り、身体を投げ出す様に寝転んだ。

「クレイドの言った通りだった。つまんない」

「言っただろーが。あんなモンであいつが困ったり、泣きつ面見せる訳ねえの」

「あー。何かムカつくなあ、それ」

身体を起して翼を暗ますと、クレイドに近寄って側に腰掛ける。

「そんなに強いのか？ アイツ…僕より？」

「しょーもない」

「はぐらかさないですよ。好きなんだ、アイツのこと」

「阿呆か。んなことより、そろそろ客が来るぞシエラ」

「答えてくれないと、僕手伝うのやめちゃおーかな」

横顔に、うんと近付いてシエラは舌を出す。不機嫌にクレイドが立ち上がると、正面に見える入り口付近に目をやった。

「強いよ、あいつは。お前よりずっとな」

「……ふうーん。だけど所詮死すべき定めからは逃れられない。零落の種族なんだよねえ、翼有ってさ」

「違う。しかしそれはお前たちの定義だろ」

「ややこしい言い方」

「喋りはそこまでだ。来たぞ、見極めの時だ シェラ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

正面より東に雁行するポーチに立つ、黒い布を纏った者。来客を待ち構えたクレイドは、歩み寄り笑みを漏らす。

「久しいな。おおよその見当はついてるぜ？」

「……そうですか。隠していても意味はありませんか」

「だな。」

頭にかけて布をずらして、その正体を明かす。

「なあに、声だけでも充分だったが。俺はその顔が大嫌いなんでね」  
クレイドより少し低めの身長、髪は黒く細面の眼鏡を掛けた男が、切れ長の目に笑みを浮かべる。

「やあ。クレイド殿、相変わらずの粗野振りで」

「うるせえっ、さっさと出せよカラク・ラリス」

「ええ。ですが私が思慮深い人間だと、ご存知ですよ？ 貴方ではなく彼をここへ」

「鬱陶しいヤツ シェラ出番だ」

ふわり。翼を伸ばしてシェラが男の前に降り立つや否や、ぽりぽりと頬を人差し指で掻いた。

「クレイドお、見なくても分かんだけど。匂いがしない、コイツ持  
って来てないか持ってないかどっちかだ」

「！？」 シエラっ！ そいつから離れろっ」

「え…ちょ…っ！ ナニすんだよっ！？」

粗暴に翼を鷲掴み、男は眼鏡を中指で押し上げる。

「目を見るなっ、シエラっ」

「見る、な…って 痛っ！！ 離せ…よっ、離し…」

「翼は痛いそうですね。特に付け根には神経が集中していると  
クレイド殿、何ですかそれ」

「やかましいっ！！ お前の汚さにウンザリしてたの忘れちま  
ったミスっ」

僅かに視線をずらした男の咽喉元を、捕らえる剣の切っ先が閃く。

「ズサンの間違いでしょう。それにもう遅い」

突き付けた剣の刃先を、シエラの手が掴み取る。そこに高熱が生じ、  
ぐによりと折れ曲がった。

「もういいですよ。シエラくん…でしたね、君は役に立つかどうか  
…言ってもらいましょうか？ 石に眠る女神の名を」

「馬鹿っ　！　言っなよっシエラ」

「抵抗など出来ませんよ。リングの無い、落ちた天使であってもね」

「ああっそっかよっ　！　！」

「　　しっこい人だ」

纏う布を翻し、男は片方の腕を伸ばし、そこにクレイドの攻撃をまともに受けた。

「剣は何も一本じゃない」

脇差しを抜き、間違いなく腕を削ぎ落とすくらいの力を加えた筈なのに、肉を断つ感触が不明瞭であることにクレイドは不審を抱く。

「お前っ、その腕」

「……七年前ですよ、腐ってしまったので捨てました。これは貰い物です、幻獣のね」

千切れかけた、茶褐色の腕らしきものを男は事も無げに引き千切り、足許に捨てる。

「シエラくん、あの男が邪魔するので飛んでもらえますか」

命令通り、男を抱えて宙に舞う。完全に言いなりになるシエラに、クレイドは臍をかむ。

「さあ、女神の名を言ってっらん　？」

「　　デイ、アーナ」

「よく出来ました」

冷笑を浮かべる男にクレイドは髪を掻き篋り、流石に少々落ち込む。

「はああああ…ナニやってんだ、俺は」

「クレイド殿、私はこのまま彼と行きますよ」

「げっ、阿呆かつ　！　そいつまで渡す気はねえっ、降りて来いや  
っ　！　！」

「誰が。　　！　？」

シエラの動きが鈍る。不規則に翼を動かせて、神殿から出るのを拒む様に停滞する。

「何だ　？　術が解けた　？　　いや、違う」

ニヤリ、してやったりとクレイドがほくそ笑むが、同時に微妙な心中でもあった。

間も無く北側の入り口付近からする気配に、聞こえよがしの声を上げる。

「よお。最初からバレてるからな。隠れる必要はないぞお」

数秒置いて、足音が近付いて来る。

「クラフトっ、お前…待ってって何かあったら」

「いいんです。ああ言ってるんだし、どうせこっさり潜入したって意味ないんですから」

「僕かも知れんだろう　待てっ」

「ロイズさんだっでご存知でしょ　！？　あの性格っ、とにかくさっきこの神殿に　あ。」

まさに目の前、数メートルの所に立つクレイドが、ラヴィの姿を見るなり挨拶代わりに手を上げる。

「結界とは、中々気が利く。ロイズもご苦労だったな」

「……ほらね。こーゆー人なんですよ、この人は」

「よくやった馬鹿弟子」

「　何それ。何だか知らないけど、都合のいい時だけ弟子って呼ぶのやめてくれませんか」

「ああ」

従前通りの存在感で、クレイドは浅紫色の瞳をラヴィに向ける。

「そっだな。お前はもうあの頃のお前じゃないよな」

「　？　どー言っ…」

目配せするクレイドに、ラヴィは視線を移しかえる。

師よりも前方、斜め上に浮かぶあの天使と 黒尽くめの、その男の姿に驚愕する。

見開いた目は瞬きを忘れてただ一点を瞠目し、身体は固まってしまった様に動かない。

「 やあ。」

その声に、一瞬にして引き戻されてしまう記憶の彼方。うまく動かない唇が告げるのは、何万回と呼んだ彼の名。

「 ……サリ、エリ」

「 入るは容易いが出るは至難。瞬時にこの広い神殿に、高度な壁中結界とは流石ですね、天才ラヴィくん」

「 ども…して……生き、て……」

「 先程の地揺れも君でしょう、ラヴィくん？」

照り付ける太陽が溶かす氷の様に感情が溢れ出し、締め付ける心の痛みにすら虫唾が走る。

こんな気持ちはいらぬ。

こんな苦痛には耐えたくない。

なのに何故、愛執の念を抱くのか。

「 ……っ」

「生きていては、いけませんでした。」

地上に降り立った黒尽くめの男、サリエリが微笑みを呈した。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「髪を切ったのですね。私は君の長い髪を櫛梳るのが好きだったのですよ」

「……サリエリ」

「君のその美しさは、私の誇りでもありましたからね」

「やめろっ　！　僕は貴方を……っ」

直視出来ず顔を背ける。筆舌にし難い想い、一度の裏切りと相反する慈愛に満ちた日々が噴出する。

「僕は貴方を　？　……殺せますか、今なら」

「……っ　サリ……エリ」

「いい加減にしておけっ、コイツのウジウジも大概だがお前のねちこい話をもっと鬱陶しいわっ」

見兼ねたクレイドが口を挟む。最大のトラウマと呼んでもいいくらいの人物と対峙するには、冷徹さに欠いているが、しかしそれもそれと云うのもまた、

「お前がそう育てたんだよな、コイツを」

長い時間手塩に掛けて育て上げたのは、決して間違いを犯してはならない穎才を有する寵児。

「満足のいく仕上がりでしょう？                    ああ、壁中結界の理由は彼女ですか」

サリエリの言葉にラヴィが振り返る。後ろに立つ、カジカとエドガ―に重い足が動いた。

「ラヴィ…くん、あの人……いえ、これは一体どうなっ  
？」

脇腹を抱える様にして引き寄せるカジカを背に庇い、ラヴィはサリエリを双眼に捉える。

「ラヴィ様…っ？」

「サリエリっ、貴方の目的は女神の降臨ですかっ」

「然は然り乍ら。よく分かりましたね、やはり君は賢い人だ」

「だったら、そんな天使は荷物なだけだ」

「役に立ちませんか」

「                    それが出るのは、僕だから」

「あ、あほっつ                    ！                    ！                    そう言うことをペラペラと喋ってんじやねえよボケがっ」

失敗続きの上に敵に情報をくれてやるとは。クレイドはむしゃくしやるやりどころの無い気持ちと、間抜けな自分を殴ってやりたい

気分だった。

「と、クレイド殿が仰ってますが？」

「だから。僕は手伝つつもりはありません、女神は貴方には微笑まない」

「ほう。」

「絶対にです。サリエリ」

「私がお願いしてもですか」

「サリエリっ！」

目は反らさない。咽ぶ感情を悟られない様にするので精一杯だった。それでも、負けることも逃げ出すことも、自分はしてはいけない。そう　　殊に彼女、カジカの前では。

「なら、ごうしましょう」

不意に、サリエリはシエラを突き放し、その片手をひらひらと振る。

「貴方は私の注意が全部自分にだけ向けばいいと思って言ったのでしょうが、残念ながら私という人間は、貴方が知っている以上に狡猾なんですよ。故に力もある」

「なっ何よっ　　！　　力だったらラヴィ様の方が上なんだからっ」

「カジカさんは相変わらず威勢がいい。そんな子を助けたいが為に、

貴方は自らを犠牲にする……どうでもいい、ただの人間一人の為にね」

「 師匠っ、天使が攻める ！」

「分かって、るよっ ！ ！」

抵抗は出来ても危害は加えられない、その細い身体からは想像も出来ないくらいので、シエラは魁傑なクレイドを押さえ込もうと腕を掴み取る。

「私が育てた通りに動くんだね君は。本当にカワイイよ、ラヴィくん」

歩み寄るサリエリに、ラヴィの肩を掴むカジカの手に力がこもる。

「本当はね、最初から知ってたんですよ。カラク・ラリスの封印を解くことが出来るのは、この地上ではラヴィくんと……もう一人、貴方のよく知っている人物の二人、そうですねえ」

「我命を聴き生ぜっ                      ジイン・ジークハイド・アクライネっ  
！」

広い神殿に顕現するのは、猛々しい深紅の大鳥。支配する火の精霊ジインが真の英姿をそこに現し、壁中結界の中ではその姿が常人にも可視が可能になる。

初めて精霊を目にしたロイズたちは畏怖にも近い念を抱いた。

「サリエリ、貴方にその名を呼んで欲しくありません」

「戦いますか、ここで」

「貴方が退かないのなら」

「人々を救うのが、ラヴィくんのなりたいモノの一番でしたからね」

「本気です…本気だからっ　！　…分かってるんでしょうっ  
！？」

もうやめて、

気が変になりそう。

それも、これも、全部貴方の仕込んだ通り。

訪れる狂気も、その全てを貴方は、

「貴方は知っているじゃないかっ　！　もうやめてよ…っ」

見抜いている。

「僕が…っ、僕が貴方を……サリ、エリ」

貴方を手に掛けられないことも　見抜かれているのに。

「　違いますよ　？　君は、充分に人を殺せます。私が保証し  
「よし」

「っ…っわあああっっ　！　！」

「ラヴィ様っ」

飛び掛り、サリエリの胸倉を掴んで引き寄せ。上目遣い、深緑の瞳が威光にも似た光を放つ。

「そう。あの精霊は使わないの」

「貴方には百億の夜に相当する長い苦しみを」

絞り出す声で告げるラヴィに、サリエリが口角をつり上げて冷笑する。

「完璧。その狂気こそが、私の撒いた最も美しい陰種」

「黙れ」

「君はこう思ったでしょう？ いつか 沢山の人を殺すんじゃないかって」

「黙れっ！ 黙…れ…っ」

「簡単じゃないか。君はその力を使っていいと認められた、唯一のグリモワールなのだから」

「ラヴィ様っ、違うっ…ラヴィ様は違うのっ、違うんだから…っ  
！」

背中にしがみ付くカジカのぬくもりが、震えが伝わる。

「ラヴィ様はっ…ラヴィはラヴィだよっ、貴方であって誰にも侵されたりなんかしてないっ」

「カジ、カ」

「誰にも決めることなんて出来ないんだよっ、負けないでよっラヴイ様…っ！」

「人は、殺さない……何があっても、例えそれが貴方でもです。サリエリっ……貴方でもだっ」

「サリエリ・ルイズリイ……もうこれ以上この人を苦しめないでっ」

この哀願が、サリエリに届くとは思えない。けれどもカジカは願わずにはいられなかった。七年前のあの場に居た当事者の一人としても。

「ルイズリイ、だって？」

それまで、ただ黙認を続けてきたロイズが口を挟んだ。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「ルイズリイ…ルイズリイ・ビショップ、そう呼ばれていた者なのか？ お前は」

「ええ…そう呼ばれていたこともありましたがねえ」

靴音を鳴らし、数歩歩みながらサリエリが人事の様に答えた。

「ロイズ…？」

「七年前、アモネアジールで大量虐殺を犯した、あのルイズリイ・ビショップなんだな？」

ロイズのその言葉に、各々の心中がざわつく。

「ロイズ、貴方はアレ…を？」

「知っている。だから軍に残ったんだ 仲間の仇を討つ為にな」

剣を抜き放つロイズは、恐れることなく歩み寄る。

「たった一人の命を奪う為に、何人殺めた」

「そんなこと、覚えていませんよいちいち。それより、穏やかではありませんが、奇縁ですかねえ…あの日の関係者が一堂に会すとは」

向けられる刃に動じる素振りも見せず、サリエリは余興でも愉しむ様に笑みを漏らしてラヴィに視線を戻す。

「ねえ？ ラヴィくん、君は何人死んだか覚えてますか」

変わらぬバリトンヴォイスと言葉遣い。感情をわざと逆撫でする科白だと、頭では理解しているのに、上手くあしらえずに奥歯を噛みしめる。

「君のことだから、きっと自分を責めたのでしょよね。ああ、泣いている君は」

「サリエリ…っ」

それは睨め付けると言うより、眼光を鋭く人を射すくめるに近い表情。それを見てサリエリは満足気に伸びた前髪を掻き上げる。

「クラフト、なんのマネだ。邪魔をするな」

かざす剣を斜に構えるロイズの前、遮る様に立ち塞がるラヴィに苦言を呈する。

「ロイズさん　貴方ではこの人を討てません」

「俺はどうなっても構わない」

「犬死でも、ですか」

「ラヴィ…様」

彼らしからぬ言葉に、カジカは何も言えず口を嚙む。

「その一人を護る為に、何十人も屈強な兵士達がこの人に殺され  
たんです。躊躇も手加減も無く 貴方の嫌う呪術で」

「分かってる」

「顔も知らない、命を差し出すに値するのかも…名前すら一つ  
知らないっ、そんな人間の為に理由も分からず死んでいったんだ」

「クラフト」

「僕は…嫌だ、これ以上誰かが死ぬのは」

「それは、お前のせいで俺が死ぬってことか？ 自分が辛いから  
？ 耐えられないからやめて欲しいって、そう言うことなのか」

「……そう、です。僕は狡くて情弱な人間なんだっ、これ以上誰か  
が僕のせいで死ぬのは忝えられないっ」

「はっ。何様なんだ、お前は」

「全くだっ。なあーんでお前はそんな言い方しか出来ん？  
おいっ、そのロン毛っ！ ちよっとコイツ押えてる」

「わ、私ですかっ？」

押さえ込むシエラを尻目に、クレイドがエドガーに声を上げ、ロン  
毛と言われたらこの場合カジカでなく自分のことだろう、取り急ぎ  
小走りで駆け付けてシエラを身体ごとで押え付けた。

「クラフト、俺はお前の為に死んでやる気もないし、結果がお前を

どう思わせようと知ったことじゃ無い。ただこいつが許せない、それだけだ」

「まあ待て。ロイズ、コイツはこれで筋金入りの頑固者だ。ぶった切っても退かん」

肩を慣らしながら、クレイドはラヴィとロイズに介して口を挟む。サリエリはやれやれといった素振り、眼鏡を外して胸ポケットに納めた。

「クレイド殿はがさつで喧しくて困る。目的は全て果たせましたし、ラヴィくんとのお話を楽しんでいたのですが、そろそろ嫌われ者は失せますよ」

「はあ！？ 誰が逃がすかインテリメガネっ、取っ捕まえて国王の前に引き摺り出してやるっての」

「貴方の様な横紙破りが上官では、苦労しますねえ部下たちは……ねえ、ラヴィくん」

「 結界を解きます。ここから出て下さい、サリエリ」

俯いたまま話すラヴィの腕を掴み、ロイズが強引に押し遣る。

「逃がさんぞっ！ ルイズリィっ」

「ロイズっ！ おいつ何のつもりだ馬鹿弟子っ」

「今は駄目だっ、二人とも手を出さないでっ！ 師匠っロイズさん止めてっ」

「賢明です。流石はラヴィくん、私の仕掛けた術にちゃんと気付いてくれましたか」

「術…だつて！？ ああつつつ、やっぱりコイツ嫌いっ」

我鳴るクレイドがロイズの襟首を掴み取るが、払い除けて剣をかざし勢いよく踏み込んだ。

「置き土産もあちこちに添えておきましたから、ラヴィくんは解除呪文に忙しくてとても手が回らない　ただの人間はじつとしての方がいいですよ」

「ロイズやめろっ！　動くな…っ」

もう一度手を伸ばすクレイドの目前、出し抜けに灰色の翼が視界を掠める。

「シエラっ…お前！？」

「途中から正気だったよ…あのね」

羽音、薄墨色が一面を覆い羽毛が空に散在する。

「クレイド…僕、あの人と行くね。ばいばい」

「ちょ…っ、おいつ　！！　ああっクソがっ」

シエラに阻まれて、制止の機会を逃したクレイドの前方、サリエリに剣を振るうロイズが見える。その瞬間、凍て付く様な冷気が足許

を攫い、ラヴィは詠唱を途切らせた。

「サリエリやめて…っ　！　！」

「私相手に敵討ちねえ…。でしたらプレゼントをもう一つ、オルフ  
エイスの矢を差し上げましょう」

「　　ジンっ盾焰　！」

無算の氷矢が討ち込まれる。ジンは紅翼を広げそれが阻害する盾  
となり、瞬息で矢を昇華し消し去った。

「ロイズっ」

「残念、この人だけは少し間に合いませんでしたね。まあ、ラヴィ  
くんなら何とかしてくれるんじゃないですか？　　では。」

「ロイズ…っ　！　おいつ」

崩れる様に膝を折るが、剣を支えにそれでもまだシエラと飛び去っ  
て行く姿を目で追い、ロイズは神殿中に響く怒号をサリエリに向け  
ぶつける。

「ロイズ…ロイズっ　！」

「カジカまだ動かないでっ、エドガーさんも　！」

駆け出すラヴィは、ロイズの叫びに悲痛な面持ちを浮かべ、吐き棄  
てる様に残余の解呪を詠み上げる。

「外に仕掛けてあるのは俺が何とかする、お前はロイズを」

「師匠……分かりました。二人ともっ、動いて構いませんよっ」

ラヴィの言葉に、カジカとエドガーも駆け寄る。床に寝かせ、衣服を剥ぎ取るカジカの指が震え、ラヴィは一度強く彼女の手を掴んでから離れた。

「大丈夫。カジカはロイズさんに声をかけてあげて？」

声にならず頷くカジカに、僅かに笑みを送る。

今は何も考えない、ただ目前の彼を救うことに集中するが、癒しの精霊を持たない中でのこの状況は如何ともし難い。

(しっかりしろっ、自分っ)

腹に三本もの矢を受け、意識を朦朧とさせるロイズの顔を目に収め、ラヴィは己に喝を入れる。

「術式は白魔術、ラリエルの呪譜…印章を現せ」

指で六本の線分を次第に交差させ、蒼光となって完成する六芒星が横たわるロイズの地表に広がる。

「今癒しの精霊が使いません。この術は傷以上の痛みを伴いますから、エドガーさんしっかりロイズさんを押さえて下さい」

「分かった…ラヴィくん」

「はい」

「……いや、何時でも構いません」

「 始めます」

n  
e  
x  
t

蒼翼の欠片（後書き）

じいん《……………ふん。オレ様は空気が読める精霊なんだ、終止無言  
っ石の様にダンマリだっ！》

らう「い「や…それ多分違っ」

じいん《ナニ！？オレ様はKY違っぞっ！男は黙って無  
言っ……………黙って無言？ナンかヘンだけどもあいい》

らう「い「出番少なくて怒ってんの？」

じいん《怒っ取るかいっ！》

うさこ「いやあ、ごめんねえ…これ以上誰かがくっちやべったら、  
誰が何言ってんのか、それでなくてももうすでにかなり怪しいのよ  
ねえ…ジインはクレイドと口調がぶるしさあ……………あははははっ」

らう「い（火に油だよおーっっ）

じいん《……………燃やす。》

えどが「それよりナンで私、押さえる役しか回ってこないんでし  
よーっっ」

## 蒼翼の欠片

「ええつとラヴィくんっ、これってホントもの凄く痛いんじゃない…」

術を施行して数分、ロイズは喘ぎ時に呻き声を漏らしていたが、経つにつれ耳を塞ぎたくなる程の叫喚と狂乱に近い状態に、エドガ―は堪りかねてラヴィに話し掛けるが返答は無い。

その横顔は疲労と言うより苦悩の色を濃く、薄っすらと滲む汗に聞き返すことは出来なかった。

「ロイズ頑張つて、大丈夫…大丈夫だから」

懸命に暴れる彼を押さえつけ、カジカもありきたりだが声を掛け続ける。

「エドガーっ、しっかり押さえててよっ」

「やってますよ…っ、それでも彼は力強いんですからっ」

幾度にも身体を撓らせて激痛に耐えていたロイズが、不意に動きを止めて静かに呼吸を繰り返し出した。

「ロイズっ！？」

「体組織の再生が終わりました。あと少し…もう押さえてなくて大丈夫です」

「本当…傷が塞がってる」

「治療の術…しかしこういうのは始めて見ましたよ」

まじまじとラヴィの顔を見るエドガーに、苦笑で返した。

「オルフェイスの矢は受けると瞬時に筋肉を凍らせるんです、だから一度体組織を壊してから再び構成し直すので痛みが　　ロイズさんまだ動いちゃ…」

「な、に…して、る」

肘を付き上半身を起こすロイズをカジカが差し止める。

「ロイズ矢を受けたの覚えてるでしょ　　？　　だから今ラヴィ様が治して　　」

「やめ、ろ…っ　　！　　余計な…こと、を」

「ロイズ落ち着くんだっ」

カジカの手を振り解き、起き上がろうとするロイズをエドガーも止めに入るが聞こうともせず、まだ痛みの残る腹を押さえて半身を起した。

「ロイズさん完治まであと少しなんです、だから…」

「煩いっ」

脇に腰を下ろすラヴィを、ロイズが強引に押し遣って立ち上がるうとする。

「ロイズさん駄目ですっ…まだ元の筋肉との均衡が取れてないからっ」

上手く足を使えずよろめくロイズを、ラヴィが抱え込む。

「離せっ！俺に触れるな　化け物っ」

払い除ける、彼の全身の拒絶にその腕を解いたあと身動き出来なかった。

「ちょ…っ、ロイズ言い過ぎだよっ、ラヴィ様は貴方をつ」

「そうですよっ、言っに事欠いてそれはあんまりだ」

「ラヴィ様に謝って！　ロイズっ」

「…カジカ、いいから」

「よくないですっ、あんな言い方は酷過ぎますっ」

「いいからっ…いいんだ、本当に」

その表情は泣くとも笑うとも言えない、何かを耐え兼ねる艱苦と切なさを露呈する。

誰もが緘口して語らない僅かな時を、重く感じ取られる頃ラヴィが口を開いた。

「ロイズさん、エドガーさん　すみませんっ…僕嘘付いてました」

深々と頭を下げ、謝罪するラヴィの姿にカジカは微かに視線を逸らす。

「僕はアモネアジール……元老院の一名です。クレイド・ラガーフエルドは師の一人、サリエリ・ルイズリイ・ビシヨブは…僕の一番近くに居た人物でした」

「それで？」

ロイズの語調は突き刺さる程に容赦なく厳しい。だからこそ、それを正面から受け止めなければならない。真っ直ぐに、ラヴィは彼に眼差しを向ける。

「あの夜、亡くなられた国軍兵士たちが護っていたのは…僕です」

「それが何だ！？ 今更そんなこと聞かされたってしよーがないっ、アイツ等は任務を遂行しただけだ。その結果死んだ、他に何がある？」

「いいえ、何も」

「だったらこんな話は無駄だ」

吐き捨てて言うロイズに込み上げるのは憤激そのもの。しかし彼も実際、その憤りをラヴィにぶつけてしまうことに疑問が無い訳ではない。それでも、今はやりどころの無い怒りを鎮めることが出来なかった。

「責務を完うしたんです、だからロイズさんが仇を討つのは彼等の意に悖る」

「 気に入らない、言葉を卑くせば納得するでもっ !  
? どれだけお前が偉い身分だとしても、それを決める資格はない」

「はい…ですが…ですがどうかサリエリのこと、僕に任せてもらえませんかっ」

もう一度頭を下げるラヴィを見ることもなく、ロイズはおぼつかない足取りで歩き出す。

「ロイズさん…っ」

その背中にこれ以上は何も言えず、ただ名を呼ぶことしか出来ない彼の側に、カジカが歩み寄る。掛ける言葉を見つけれず、ただエドガーに支えられる様にして神殿を後にするロイズを目で追った。

「 カジカ、僕は何も分かってなかったんだ」

不意に、その声はか細く、独語を漏らす様にカジカの耳に届く。

「亡くなった人に心から謝罪すればそれでいいなんて…仕方ないなんて、都合良過ぎなことっ…僕なんで…っ その人達には大切に想う家族や友人だって居たはずなのにっ」

「ラヴィ様」

「そんなことも分からないで誰にも僕の為に死んで欲しくないとか…っ、あんなこと…僕は…っ…」

「誰だって無理ですっ、ラヴィ様じゃなくなっただって全部を受け止める

ことなんて、例え分かっていたとしても…出来ない事だっただけですっ」

居た堪れずに、伸ばした両腕が彼を抱き締めていた。強く、痛いくらいにその腕はラヴィの背中を抱擁する。

「上手く言えないけど、ラヴィ様はもう十分に苦しんだじゃないっ……だからもう、そんなふうに分かたがう自分を責めないで……っ」

「カジカ……違う、僕は自分のことしか……何で僕ばかり辛いんだとか、たくさん人が死んだのに、それでもまだ生きてる自分の存在意義に答えが見つからなかった、それだけなんだ」

「いいじゃないっ！それが本当だとして、何がいけないの？貴方は万能なんかじゃない、そうでしょ！？人間だものっ恥じることなんてないわっ」

「カジカ」

「それでもね、貴方はありのままに優しい人なの……私に言わせれば愚直過ぎるくらい、もっとズルくてもいいのに　だか  
ら…貴方がそんなだから……私は…っ」

言葉を途切らせて、しがみつく様に抱き締めるカジカを、ラヴィの指がそつと髪を撫でる。

「カジカ」

優しいのは君の方。

彼女の人生を狂わせてしまったのも、僕なのに　。

「……………ごめんね……………カジカ……………ごめん」

広がる闇に、足を攫われない呪文の様に。

『ごめんなさい』を何度も、そう心で呟いた。

n e x t

## 蒼翼の欠片

### 二、記憶に馳せる雨音。

夕暮れから雲行きが怪しくなり、風が強く吹き出す。星もこの時期には一際オレンジ色に煌めくアークトゥルスも厚い雲に覆われ見ることが出来ない。

月明かりのない夜。

それでもキルトの街は喧騒の賑わい、大通りを脇に一本逸れた路地には、酒と香水の匂いが纏い付く程に溢れていた。

《 マスター、この店です》

「なるほど妥当。やっぱり飲んでんのか」

吐息を漏らし、ドアノブを手に灯りの奥へと進む。

ざわざわと落ち着きの無い店内は、酒を片手に立って小躍りする人や怒鳴っている人、男女の会話を楽しむ人と多種多様な大人たちでごった返していた。

「こりやヤラレタ。ドコいったんだ？俺のコイン」

「瞬きせんで見えてたが…なかなか、ワカランものだな」

首を傾げて客の男二人が唸るのを見て、ニヤリとほくそ笑む男がグラスに酒をなみなみと注ぐ。

「最初の約束忘れんじゃねえぞ。オヤジども、見破れなかつたら俺の酒代払えよ」

「あーまてまてっ、最初右手にあつて」

「そのあとポケットの中だった…よな？　それで、」

考え込む男の背中を、ぼんつと軽く叩く手の感触に振り返る。

「おじさんの帽子の中ですよ、コイン」

無粋に物言い。そこに立つ少年が顔を上げると、言葉とは不似合いな程にニッコリと笑う。

「……帽子？」

言われて、帽子を手に持ち上げると、チリンと床にコインが落ちる。

「こりやまた。凄いな……けど、なんでこんな酒場に子供が？」

「キレイな顔してんなあ、天使様みたいだな」

客のその言葉に、眉尻が僅かに引きつる。今の彼にとっては止め句の一つ、笑顔が薄ら笑いに変わった。

「全く。天使並みの性格の悪さ。バラしてんじゃねえよクソガキ」

グラスの酒を水を飲む勢いで空にして、大袈裟に息を吐く。

「えー。違いますよ、天使は清らかで美しいモノなんですから。お

じさんもその意味で言ってくれたんですよね？」

まるで棒読み。感情の感じられない言葉ともう一度見せるその笑顔のギャップに、少年とはいえ心置きしてしまうのは、この場所にあまりに不釣り合いな麗しさのせいだろう。

「あ、ああ……」

「ありがとうございます。それですみませんが、僕この人に用事があるんでいいですか？」

何だろう、このただならぬ空気。酔っ払いにでも充分にそれを感じられる、物言わさぬ雰囲気はただ頷いて席を立っていった。

「僕、今日と言う今日は……師匠、本当に何考えてるんですか？ 神殿でもさっさと消えちゃってるし、大体何で逃げてんですっ！？」

「……おい」

「僕の話聞いてますっ！？」

「お前……その足許にジャレ付いてるの、ナンだ？」

「何って クレイド・グレイですけど」

「はあ？？？」

「クレイド・グレイだよっ、聞こえましたっ？」

これでもかかってくらい声高にラヴィイが話すと、ゴチンとげんこつが飛んできた。

「怒鳴るなっ、耳が痛いわっ」

「痛いのはこっちだよっ、どつかないでよっ馬鹿師匠っ」

「馬鹿だとーっ？ しかもっ、俺様のやった剣がナンでこんなちっこい猫に成り下がってんだっ！？」

「白虎ですっっ！　！　それに全然うらぶれてませんしっ」

「あーん？　ナンだっ？　周りがウルサくてナンも聞こえんな」

「……うーんっもっっ、そんな話じゃなくて、僕が訊きたいのは……」

「ロイズ、無事か？」

「え、ええ……まあ」

「あの高飛車なサラも、お前の前じゃ子猫ちゃんか」

と言いつつ、クレイド・グレイにあきれた目を向けるので、ラヴィイが抱っこして頭を撫でた。

「　　サラは、もう居ません」

「は？　　居な、いって……お前」

「僕の身代わりになって消滅しました」

クレイドが面持ちをがらりと変え、眼光を鋭くラヴィに向ける。

「おいおい。それはどう言った料簡だ？ お前、何をした」

「何って…師匠、僕の話をしに来たんじゃない。質問に答えてよ」

「喧しいっ！ 精霊の消滅はつまり、死にかけたんだな？」

「話したくありません」

「クソガキっ！ 生意気な口きいてんじゃねえっ、死に至る程の何をしたのかと聞いているっ」

威勢を振るい椅子から立ち上がるクレイドの足下で落ちたグラスが割れた。

「馬鹿がっ、何やってんだ！？ 一人で旅をしたいからと、お前は自分が大嫌いだって言う権力を最大に使って爺どもを言い包めたんだ。ならお前は最低限のルールくらい守れっ」

「んだ、よ…そんな時だけ」

「なんだっ！？」

歯切れ悪く、視線を逸らすラヴィの胸倉を掴み、クレイドは無下に壁へ押し遣る。

「話せ」

「……お世話になった人が相続絡みで人質にされて、それが許せなくて 無理だよっ、ここじゃ話しきれない。結果的に印を刺されたんです、だから……だから何なんだよっ！？ 不注意だつて言いたいのか？ そんなことは分かってるしっ、そもそも僕が怪我したら…死にかけたら、そんなにいけませんかっ？」

「ああそつだ。もしまだ新たに精霊を支配していないなら、早々にやれ」

「っ…なん、だよ…っ！ 師匠だつて……師匠も同じなんだ。心配なのは僕じゃないっ、僕の中にあるこの力なんだっ」

「ラヴィっ」

「国の財産だとか稀有だとか尊いとか…っ、人を腫れ物みたいに扱っておいて……違うんだ、僕馬鹿じゃないですっ、ちゃんと分かっている！ だからいちいち釘刺すみたいに言わないでよ…っ」

「何が分かってるって？ 捻くれ者がっ」

「嫌、だよ…もうやめてよ…っ、やめてよっ！！」

悲痛な叫びに呼応した様に、ほんの一瞬箍が外れ溢れ出す魔力が店の壁に大きな爪痕を掻き、ガラスというガラスが粉々に砕ける。

「ラヴィ！！」

この異変に、まだ驚愕する客らの悲鳴も聞こえない僅か、師の呼ぶ

声に正気づき力を鎮めさせ、それと同時に叫喚がラヴィの耳に届いた。

「……………あ……………」

その所業に硬く目を閉じ、カタカタと震える指で頭を抱えズルズルと滑る様に床に座り込む。

「ラヴィ…お前」

割れた窓から、いつとなく降り出した雨粒が入り込む。  
春荒れが雨に勢いを持たせて、窄んだ背を濡らした。

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

だからクレイド・グレイは手強い

「なんでっ、こんなに可愛いのにね？ クレイド・グレイ」

「カワイイとかほざいてる時点でオカシイだろーがっ、剣だぞ！

？ 武器なんだぞっ」

「……………まあ、しょーがないよ。師匠ってファンシーなんて言葉から一番遠い人だし」

「があっつつっ！ ！ ムカツクツ！ ！ ！」

「クレイド・グレイ、もうこんなオツチャンと話してもムダだし、行こっか」

「待てやコラッ！ ！ おいつ、元俺様の剣っ、しょーじきお前はどー思ってたんだっ！？」

《……………は？》

ぶちっ。

「ナメとんのかーっつ！ ！ ブサイク猫っ」  
ぶち。

《元、主のアナタに言われたくありませんね。だいたい アナタときたら、マスターラヴィの足許にも及ばないくらいにセンスありませんでしたから》

「な…っなんだとーっつ！ ！」

「えっ、なになに？ 師匠がダサイって？」

《はい》 きっぱり。

「こらーっつ」

「だよねえ…服とか趣味悪いし、女装させられてた時に選んでた服なんてさ、ヒドイもんだよ。って言うかアレ師匠の理想？ ヘソで茶が沸くんだけど」

「オツ…オドレらっ！ ！ 絶対許さんっつ」

《……見ます？クレイド・グレイの前の姿》

「見た〜いつっ」

《どうぞ。コレまた元主の描いた、ビックリするくらいヘタクソな絵ですが》

「どれどれ……」。

「オ・マ・エ・らっ！　！　覚悟できてんだろーな？　……つてコラっ、話聞けえっっ」

《のた打ち回る程、面白いそうです。良かったですね、アル意味才能ですよ》

「……………」

「敢え無く、怒り消沈。」

## 蒼翼の欠片

簡単じゃないか。

君はその力を使っていいと認められた、唯一のグリモワールなのだから。

「まあ、なんだ。……これは止みそうにねえな、お前と久し振りに会つと降るよなあ……雨」

先を争う様に酒場に居た客たちが外に飛び出し、暫し混乱状態になったが、ようやく落ち着きだした頃に無理矢理尻を引つ叩く格好でクレイドがラヴィと表に出る。

軒先で雨宿りするが強風が吹く中、あまり凌げているともいえないが、壁に背を預けてクレイドが頭を掻いた。

「あのな。俺はお前の事情諸々を汲んでだなあ……ああっクソッ、何でその話になると過敏に反応すんだよお前はっ、脆過ぎるっ」

気の利いた事が言える訳でもなく、どちらかと言えば憎まれ口しかたたけない自分が、こんな時ばかりは少々齒痒い。

「ラヴィ」

女と代わり映えのしない細い肩が滅入る姿に、本当に女だったら楽勝で宥められるのにと、有りもしない馬鹿な事を考えて、更にもどかしさを募らせる。

こんな自分は性に合わない。ともかく、あれだけ店の物を破壊しておいて、怪我人が一人も出なかつたことは幸い、口にするといよいよ塞ぎこんでしまうので言わないが、粉碎したガラスの状態から元弟子の魔力には今更ながら目を眩る。

粉碎と言うより、元の金属化合物に戻つたが適切だろう。デタラメに感情のまま解放してそれなのだから、確かにその苦惱は計り知れないのも分からなくは無い。

しかし。

「だああっつ ! ! …とにかくあれだつ、俺の言い方が悪かつた、この通り認めるから頼むんでもう落ち込むなっ」

クレイドの前に丸まってしゃがむラヴィは、軒から落ちてくる雨水で頭半分水を被つた様に濡らしている。

「もうちょっと下がれ、風邪ひくぞ」

「…………… 師匠は、悪くない」

「へ？ あ、いやっ、いいからっ ! やっぱ悪者がいないと落ち込む格好もつかんだろっ」

「師匠の言ってることは正しいよ。僕は自分で勝手に思い込んで首絞めてるだけだし、それに多分師匠に対してあんな言い方しちゃつたのって、僕の師匠だったのに墮天使なんかに取りられちゃつたっていう嫉妬からだから」

「し…嫉… ? なっ、何を女みたいな事言つてんだっ、気色悪い

わっ

俄かに饒舌。しかも素っ頓狂な話に、クレイドは些かたじろぐ。

「もちろんその意味じゃないよ。でも盗られちゃったって、僕も今日初めて覚えた感覚なんだけど、そう言うの…嫉妬って言うんでしょ？ だって僕 師匠のこと好きだから」

おぼつかない様子で立ち上がり、ラヴィがクレイドに振り返る。

クレイドはこの非常事態の対処法を持ち合わせているはずもなく、あたふたと意味不明な言動で誤魔化そうとするが、何でコイツはこんなにも気持ちが悪ストレートなんだと思ったら、真面目に答えてやるべきだと思い直した。

「ラヴィっ」

肩を掴んで正面に向き直らせると、ラヴィが面を上げる。髪を伝う雫が、ポタポタと落ちる。

「お前、俺のドコがそんなにいいんだ？」

至極大真面目に投げ掛け、しっかりとクレイドはラヴィを捉えた。

「……師匠、気持ち悪いです。そんな訊き方、変態っばい」

無表情で返すラヴィに、一瞬頭が真っ白になった。それからこの居心地の悪さと胸のむしゃくしゃをどうしてくれようかと、ここはとりあえず一つ。

ボカッ。

「あ、阿呆かつつ　！　！」

と、いつも通りに殴ってみたいしたが、いつも通りの反応が無い。全く展開が読めずクレイドは焦れるが、次こそ思いもよらないラヴィの行動に目を丸くした。

「ラ…ヴィ…？」

出逢ってから数十年、一度もこんなことは無かった。どんなに致し難い事であっても、コイツは半べそをかいてでも一人で立ってそれらを越えてきたのに。

「……お前、そんなじゃ……話せんだろーが。お前の質問の返答は間違いなく追い討ちだからな」

服を掴み、しがみつく手の震えが伝わる。クレイドの胸元に顔を埋める様に抱きつくラヴィが、声を殺して泣いていた。

「そこまで追い詰めるのか……アイツはお前を」

それ程に、サリエリの存在はラヴィにとっての絶大で、背を向けられる度に過重を強いる。

「　　難儀だな」

降りしきる雨に目を顰め、クレイドが呟く。

思い起こせば、サリエリが大罪を犯したあの日も、こんな雨。

謀略を知り、駆け付けた時には全てが果てた後だった。

あの時あの場所に自分が居れば、状況は変わっていただろうか？

(阿呆か、俺は…)

自らを嘲て、瞼を閉じる。

「……………師匠」

ややあって、袖でゴシゴシと目元を拭くラヴィが顔を上げた。

「それでも僕、聞かなくちゃいけないから」

「……だな。話してやるよ、ラヴィ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

着ていた上着を脱いでラヴィの頭に被せると、クレイドが走り出した。

「来いつ、場所変えるぞ」

通りに出て右手に見える橋梁のたもとまで来た所で、二メートル程の高さがある柵の前で立ち止まる。

「橋の下なら充分雨を凌げるな。おい、手貸してやるから…」

差し出した手の前を通り過ぎるラヴィは、柵に足を掛けてひょいと軽快な身のこなしでそれを飛び越える。

「大丈夫ですよ？ これくらい」

「……さっすがガリガリ」

「身軽だつて言つて下さいっ」

柵を越えるクレイドをしりめに、雨の音に負けなくらいの大声で言い返す。

「やれやれ、ちょっとはマシになったか」

すたすたと橋の下に入っていくラヴィに、肩を竦めて苦笑する。

「なあ、寒くはないか？」

貸した上着をバサバサとはたいて水滴を払うラヴィに、今何本かへし折ってきたのだろう、太めの枝で橋の壁をコンコンと叩く。

「…………平気です。これ有り難うございました、着て下さい」

「濡れてんじゃねーか。余計風邪ひくわっ」

「出逢って何十年にもなりますけど、師匠が風邪ひいたなんて一度も聞き覚えはない」

「…………なあんだ？ さっきはピーピー泣いてたお前を…………」

「わあああっつ、わっ分かったよっ！ 喚びますっ ジーンっ」

もう絶対師匠の前では泣くまいと誓うラヴィだったが、すでに遅い気もする。

《ナンダっ！ 呼び方が投げやりなんだよっ、馬鹿ラヴィっ》

「ごめん、あの…さ」

《あん？》

「よお。すけすけモノ言うブツサイクなジン。コレに着火」

枝をジインの前に突き出してニンマリ笑うクレイドに、じんわりと視線を上げて睨み合わせる。

《大ボケクレイド。誰がブサイクだって？ ずばずばモノ言って

んのはそつちだろーがつ、ダレがそんな湿気た木に火なんぞ付ける  
かっ》

「どつちも明け透けだと思っけど……」

「 《 なんだとーっ ！ ！ 》 」

「あ、つい。ごめんごめん つ…くしゅんっ」

「おっ ? お前のだいじーっなご主人様が風邪ひくぞ ? ほれ  
っ火だ火っ どわっっ ！ ！ 」

前触れもなくいきなり火が付く。枝の大きさに対して有り得ない火  
力で燃え盛り、クレイドの髪が焦げた。

「アホかつ、出し抜けに卑怯だろっブサイクっ」

《フンっ、出し抜け ? 付けろって言ったのはオマエだろっ》

「まあまあ…火も付いたんだし、そろそろ話を…」

「黙れ馬鹿弟子っ、もとはと言えばソイツを放し飼い同然にしてる  
お前が悪いっ」

《ナンだとーっっ ! オレ様をペットみたいに言うなっ》

「普通は主が命令してからだろーがつ、勝手にばんばんっ炎を出す  
なっ」

《勝手じゃねえっ、オレ様の場合口にしなくてもコイツが思ってた

ら使えんだっ》

「オモシロイ仕組みじゃねーかつ、とどのつまり……」

「《お前が悪いっ！！》」

「なんで僕っ！？…もあやだ、このペア」

「《ペアじゃねえっつ！！》」

こんなに口調合ってるし充分一揃いだとラヴィは思うが、口にする  
と恐ろしいので黙っておく。

まだナンダカナンダと言いついて合っているクレイドとジインを無視して、  
火を焼べる。濡れた枝でも精霊の火なら燃えるのかと、一人関心し  
てその綺麗なオレンジの炎を眺めながら、髪や服を乾かす。

「……ホント子供だよ、二人とも。何であんなに言う事あるんだろ  
…不思議」

《ナンダ！？ ナンか言ったか》

ぶつぶつ独り言を言っていると、ひょこつとジインが顔を出す。ど  
うやら悶着は終わったらしい。

「え、えっと…ジインの火ってあつたかくてきれいだなあつて」

微笑むラヴィにむず痒くなって、ジインは焚き木の中に潜る。

「ジイン何してんの？」

《…ベツに。風邪ひくなよ、馬鹿ラヴィ》

「うん、ありがと」

「よっしっ、かなりスッキリした。お前はどうか？ 楽しいだろ、こーゆのも」

火を挟んで正面に腰を下ろすクレイドが訊ねるが、楽しいの意味が分からない。

「お前の訊きたい話の主旨は、今俺の持っている　コレだろう？」

上着の中から取り出した、片手に収まる程の碧い石をぞんざいにラヴィに放り投げた。

「カラク・ラリス…師匠」

視線をクレイドに移し変え、ラヴィは翼の形に酷似したカラク・ラリスを握り締める。

「ホンモノだろ？ 正真正銘、アモネアジールの聖光碧石だ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「ホンモノだろ？ 正真正銘、アモネアジールの聖光碧石だ」  
頷いて、もう一度石に目を向ける。

「師匠が盗んだの？」

「いいや」

「でも、じゃ何で師匠がこれを」

「盗まれたのはソイツじゃない。スウエズール王国の石だ」

二つで一对、双翼の片方を所持しているのは確かにスウエズールの国ではあるが。

「……あの、僕頭がこんがらがってんですけど」

「だらうな」

「何納得してんですかつ、ちゃんと説明して下さいっ」

「お前はアモネアジールに保管されいているソレが盗まれた、そう聞いているんだろ」

「そうですねっ、だから僕は……」

「その話は嘘。わざと間違った情報を流した」

「何の為に？ 錯綜を招くだけじゃ…国軍が動いてるし、カジカたちは極秘で師匠を追って…それが本当は嘘なんて」

「嘘だと知っていることをバラす奴を焙り出す為だ」

「……内通者…？」

「そう言うこと が、背信者は付録、ちなみにソイツはもう捕ま  
つて洗い浚い吐かせた。俺が狙ってんのは、」

一度話を切り、クレイドは一呼吸を入れて再び開いた口と被さる様  
に、その先をラヴィが続けた。

「スウエズールのカラク・ラリスを盗んだ……サリエリ・ルイズリ  
イ・ビシヨップ」

「……ああ、失敗したけどな。ケドあのインテリ眼鏡、まさか本  
当に俺様が持つてるとまでは知らなかったようだな」

皮肉って笑うクレイドに、ラヴィは何も言えず黙して、まだ幾つか  
ある疑問を整理する。

まず、手中のカラク・ラリスは間違いなく真物。師がこれを奪つて  
ないと言うのなら、それを証明出来るのは只一つの言葉しかなか  
つた。

「真にして志操を貫く者の名は、『ザイ』 唯一、石を管理す  
る鍵の番人の名だ。どーだ納得？」

胸の内を読まれた様なタイミングでクレイドが話すので、三度程ま

ばたきしてからラヴィは頷く。

「充分です。師匠…僕の目、そんなに疑いのまなこでした？」

「ぜんっぜん？でも考えてることは何となくな」

「そうですね。それと、カジカたちと別行動をとっているのは？逃げる必要はないんじゃない？」

「裏切り者は一人と限らん」

「……え」

極当たり前に言われたことで、余計胸に響く様だった。

「お前は、どうしてこの街に来た？」

「どうしてって、それは…待ってよ師匠僕は……」

「お前は導かれくしてここへ来た。そう考えるのが自然だろ、このタイミングでは」

見るでもなく焚き木の火に目をやり、ラヴィは考え込む。石の様に固まって動かない彼の濡れた髪を、ジーンがツンツン引っ張る。

「サリエリが女神を叩き起こして、正直何がしたいのかは分からんが、目的の為にはお前が必要だ…考えるならこっちだろう？アイツを熟知するのはお前だし、どんな方法で来るかを一番予想出来るのもお前だ」

「……そんなの、分かんないよ。力が…随分違っていたし、師匠だつてそれで油断してたんでしょ？ あんな魔力はでたらめだよ、誰とどんな契約交わしたのかって想像するだけでもゾツとする」

「相手はお前。手は抜かなくてことだろ」

「それ、 僕を殺したいってこと？」

「だから知らんてっ」

《ナカナカに不毛な会話だな、オマエら》

「喧しいっ、茶々入れんならブサイクも何か考えろっ」

「師匠はあの三人の中に裏切ってる人がいるって、そう言ってるんでしょ？」

「だああっつ！ だからっ、それはひとまず置いとけてっ」

髪をくしゃくしゃに搔いて、クレイドは大きな溜息を付く。

「俺ならそうするってこと。備えにもなる、お前の不意を突くには第三者が一番効く」

「はは。師匠の言い草だと限定されるよね、それが誰か。冗談でしょ、そんなの…そんなことある訳……」

思いかけず、途中で話を切るラヴィにクレイドがじっと見る。隠し事の苦手な馬鹿正直が、視線を逸らした。

「なんだ？ そのあからさまに思わせ振りの態度は」

「何でもないです」

「言え。」

「やだ」

眉間にシワを寄せるクレイドにも、珍しく怯まない姿勢でラヴィは首を振る。

「まだそうと決まった訳じゃないから、今は待って下さい」

「しっかも頑固者。そんなクリツクリの目で見んなつ、虐めてるみてーじゃねえか」

《語弊だろー、虐めてんじゃん？》

「だからお前はっ、横からウルサイんだよっ　！」

「　それに、」

再燃して反目するクレイドとジインに、構わずラヴィが続ける。

「もしそれが事実だとしたら…もう遅い。次の出方を待った方がいい  
い」

「ああ　？　俺も大概だが、間に合うのかそんな悠長なことだ」

膝を抱えて丸くうづくまるラヴィを、ジインが頭の上に乗っかって

げしげしと蹴る。

《コラッ　！　しっかりしろっ、馬鹿ラヴィっ》

「しっかり…したいけど、もうごちゃごちゃ…気持が悪くなってきた」

くぐもった声、また泣くんじやないかと、クレイドが腰を上げてラヴィを覗き込み、らしくないラヴィの弱音にジーンも続く言葉がみづからず黙り込む。

「師匠」

呼ばれて、クレイドは何とはなしに後退りしてから返事を返す。

「僕……サリエリ殺しちゃうかも知れないや、ははは」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「僕……サリエリ殺しちゃうかも知れないや、ははは」

「ははは…ってな」

どう返していいか困っていると、彼の方が切り直して話を持ち出す。

「……カラク・ラリス、師匠が持つてること知ってる人ってあとは誰ですか？」

「国王と最高審議長だけだ」

「他の人はまだ表向き盗まれたけど、本当はアモネアジュールにあるって思ってるんですよね」

「だな」

「あの天使も？」

「勿論知らん。アイツはな、審議長が俺に付けたんだ。同時にスウエズールのを捜査する為にな」

「いいですよ、そんな補足は」

素で無然となのか、やきもちを焼いたと言うからシエラとは特別繋がり無いことを、わざわざ言っただけなのに、あっさりと返されて逆にこっちが気恥ずかしくなるとはコレ如何に。

「お前：女だったら相当な小悪魔だな」

《ナントナク分かるゾ。コイツは無意識で人間…特に女をヤキモキさせる奴だ》

「性質悪いよな」

《だろ。》

「……珍しく、話が合うな」

本当に珍しく、クレイドとジインが頷き合うが、ラヴィはそれを陰鬱とした目で見る。

「師匠、僕の話聞いて下さい」

「聞いているわっ、お前みたいにド真面目じゃねえんだ。もうちよっところジョークを織り交ぜながら話せんのかっ、固過ぎるっ」

「……さっきから、楽しいワケないのに楽しいか？ とか…それ、もしかして僕に気を使ってくれてるんですか？」

「聞くなっ、そーゆーことをイチイチ！！」

「ごめんなさい、分かっています…全然ゆとりないこと」

「知ってるよ。話はちゃんと聞いているから続ける」

殊勝に首を縦に振るのを見てみると、本当に子供の様な幼さが窺える。

自分も然りであるが、人の一生分以上を生きていても、まだこんな表情で悩んだり悲しんだり出来ることは幸せなのか不幸せなのか、彼を見ていると分からなくなる。

「えっと…こうやって考えると、わざと偽の情報を流したのは正解かも。サリエリのことだから、次に盗もうと思っていたカラク・ラリスが先に盗まれたなんて話を間に受けるとは思えないし、上手く攪乱させて真意を欺くにはサリエリの上をいかなくちやだけど、戸惑わせるには充分だと思います」

「…で？」

「師匠はアルトニア遺跡でサリエリと取引しようとしていたんでしょ？ お互い面識がないフリでカラク・ラリスの売買を装って捕らえる為に」

「そうそう。確認の為、石を持参が約束だったんだが持って来ねえし、あのメガネ…まあ、俺も持つて行かなかったがな」

苦笑して、思い出したのか不様な自分とサリエリに舌打ちする。

「サリエリは恐らくアルトニアで相手が師匠だと知った。捕まえるのが目的と思っただから、持つてるのは本当に知らないね。知っていたらどうあっても奪っっていただろうし」

「なら、やっぱり次はアモネアジル襲撃か」

「いいえ」

きっぱりと否定し、その視線をクレイドに真っ直ぐ向ける。

子供だと思っていた顔付きが、彼の身分に相応する表情に変わっていた。

「サリエリは僕の所へ来る」

「何故、そう思う？」

「最初から、僕も目的の一つだから」

その言葉は、ちゃんと自分と向き合えて口に行っているのか、面持ちを見ているだけでは分からない。だから、何の為に？ とクレイドは訊けずにいた。いい答えな筈がないことは分かっている。

「……師匠」

「なんだ」

ゆっくりと立ち上がり、ラヴィはクレイドに深く頭を下げる。

「ありがとうございます。僕、やっぱり師匠が居ないとダメダメでした……だけど、まだ何とか立って歩けるのは師匠のお陰だから」

そう言つて面をクレイドに向ける彼は、一生懸命が見え見えの笑みを湛える。

「……馬鹿が」

お前のそれは安心には全く繋がらない、危つい時にこそ見せるものだ、そろそろ自分でも気付けよ。と思う。

「一人で全部やるって思ってたんなら、ブン殴るだけじゃ済まないからな」

「分かってます……だから、これは師匠が持ってた」

手渡したカラク・ラリスを、クレイドは一度真上に放り投げてキャッチする。

「いいだろう。信じたからな、ラヴィ」

「はい」

「よっしっ、じゃ今夜は解散っ！ とつとつ火を消せっ帰って寝るぞっ」

「あっ！！」

今日一番の大声なんじゃないかってくらいの声に、クレイドとジインが振り返る。

「なんだっ、言い忘れか？」

「さっき僕が壊しちゃった酒場の修理代……どうしよう！？」

《貧乏のクセに、オマエっていつつも金の掛かることやってるよな》

「なんだそんな事か……はあっ。気にすんな、頭いっぱいばいの馬鹿が」

「えっ、師匠が肩代わりしてくれるんですか」

「いやっ、軍にツケるっ」

「ツケる…って、師匠それはいくらなんでも……」

「ええいつつ喧しいっ！ 必要経費だっ。お前もそんな細かいこととにまで気使ってたらハゲるぞ、そのうち」

「い、いいのかなあ…」

「イイに決まってるだろっ！ 俺の居場所は…あのネコに聞けば分かるか。さっさと帰って湯にでも浸かって寝ろっ、いいなっ」

《オレ様も雨はカンベン、じゃあなラヴィ》

返事をする間もなく、クレイドもジンもあっさり居なくなる。ぼんやりと見送るでもなく外を見ていたが、焚き火を消火したあと少し勢いの収まった雨の中を歩き出した。

ぼつぼつと所々に灯りの見える大通りに入って、駆け足で宿へと向かう。

途中、雨で見通しの悪い道の真ん中に、人影らしいものが見えてラヴィは目を凝らした。

「……お話は済みましたか」

そこに立つ人物が誰であるかを確認し、ラヴィは思考を巡らす。

「お待ちしておりました。ご安心を、盗み聞きなどはしておりませ

んよ…ラヴェイ・クラフト様

n e x t

## 蒼翼の欠片

春の末の小夜嵐。冷たい雨が身体の熱を奪う様に、また何か失われていく気がして、俯き濡れる足許を見詰める。

「申し訳ありません。雨の中、お引き止めして」

近付いて正面に立つ彼に、微かに唇を開き声を絞り出す。

「……つけて、たんですか」

「すみません、その…上から」

雨空を指してから、羽織っていた外衣をラヴィに掛け、そっと手を取ると頭上にかかげ儀礼に払い黙礼した。

「ちゃんとご挨拶するのが遅くなってしまいました」

「それは、僕が誰であるかを以前からご存知だと、そう言うこと？  
エドガーさん」

「……貴方も、私を存じていらっしやいますよ」

エドガーの言葉に、面を上げて彼を見据える。

「エドガルド・ヴィンセント・スウエズールです……この名前、思い出して頂けましたか？」

微笑むエドガーに、ラヴィは僅かに視線を落として小さな息を漏ら

す。

「僕が、付けた名ですから……狡いです、貴方はまだ生まれただばかりの赤子でした」

「ええ、こんなに大きくなってしまいました。見た目には貴方より大人ですね」

何だか気まづくなって声作り、上目遣いでエドガーを見る。

「大切な話があります。聖光碧石の一件、これに携われれば貴方に近付けると思ひまして、身分を偽りエルトフェニアの軍に」

「……大胆。バレたらご免じゃ済まないよ、スウエズール国の王子なのに」

「不肖の、です。勘当同然ですし、継承権も四番目ともなるとそんなものですよ？」

「どんなもんですか、それ」

周りはそうは思っていないだろう、と付け足してやると、エドガーが噴出して笑った。

「貴方にそれを言われるとは思ひもよらないですよ？ クラフィスト最高審議官」

「う……失言でした」

頬を染めて謝るラヴィに、エドガーはいよいよ可笑しくなって笑い

が収まらず、暫し本人を前に爆笑する。

「エドガーさんっ、お互い様なんだからそんなに笑わなくてもっ」

「す…すみません、いえ…姉君から聞いていた通りの方だと、いやそれ以上ですか。つくづくそう思うと可笑しくて」

「僕、笑い種に？　なんでーっ？　？」

「違います、これは私が個人的に。姉君はそれはもう惚れ惚れでしたから、当時は娶って欲しいと思っていたそうですよ」

「めと…」

「まあ、今じゃすっかり年だし、腹の出た大臣と結婚して子供もいますが」

「はあ…」

一頻り笑って一人納得する様に何度か頷くエドガーに、少々怪訝な顔でラヴィイが話を切り出す。

「それで、僕に大切な話って何ですか？」

「そうですね、やっとこの時が来たのですから真摯にお伝えしなければ」

「ホントに大事な話なの？　怪しいなあ」

「本当に本当ですよ　クレア様についての密事ですから」

徐ろに変わっていく表情は複雑に、間違はなく彼の何かを露呈しているのに真意が掴めない。

言葉にもならないその何かを、続ける言葉で探り当てたいと思わせしてしまう程に、その面持ちは深く寂として妙を湛える。

「生きて、らっしやいますよ。貴方に相等しく若く瑞々しい美しさのままで」

「……………生きて…た、クレアが」

それでもまだはつきりしない相好に、エドガーが訊ねる。

「嬉しくないんですか？」

「…え？　うれしい……………嬉しいですよそれはっ、ただあまりに突然だったから…すみません」

何故か謝って瞳に長い睫毛が翳りを作る。

「クレアは今何処に…？」

「アースカルドです。貴方をお連れすると約束致しました」

「でも…どうしてエドガーさんが、クレアはスウエズールの…貴方の兄上と……………」

「言ったでしょう？　私は勘当された放蕩息子、父上の意向には付いていけない虚け者のレットルを貼られていますから」

可笑しげに肩を竦めて手をひらひらとさせる。

「 参りませんか ? このまま、今すぐにもクレア様のもとへ」

差し出す手が、思慕の情を思わせる。逢いたくて逢いたくて、探し続けた君 馳せる想いは逢瀬の砌。

でも、今は

「今は、行けない……ごめんなさい、エドガーさん」

「いいえ。実はそう仰るとは思っていました。ただ、喜悦を感じられないのが少し不思議で……微力ですが、私もお手伝いさせていただきますよ聖光碧石の件」

「ごめんなさ……ぼ、く……違っただ、そうじゃ……エドガーさんごめ……」

「その 何と言うか、本当に妙な方ですよ……貴方という人は、考えずとも自分より年を重ねたラヴィの頭をよしよしするなんて、こんな滑稽な事をさせてしまう彼に苦笑する。」

「すみません、でも何か触れていないと壊れてしまいそうだ」

「……ごめん、なさい……エドガーさん」

「謝らないで下さい。ココがチクチクします、どうしてか」

追従笑いして胸を指す。ラヴィは相槌でそれに返すことしか出来なかった。

「では、先に宿へお戻り下さい。私は少し経ってから帰りますので」

「エドガーさん」

「はい」

また少し強くなる雨、名を呼んでしまったことをそれで誤魔化す様に。

「いえ、ありがとうございます…戻ります」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

だんだん謎が深まっていく……ラヴィ、お前は一体何歳なんだ！

？（笑）

でもでもっ、教えない……主人公のイメージ上の都合、秘密なのだっ。  
はっはっは。

あの…読んで下さってる方ごめんなさか…

このペースの更新で大丈夫でしょうか？

## 蒼翼の欠片

窓を打つ雨の音がうるさくて、耳を塞ぐ。

濡れそぼつ髪も服も、何もかもが煩わしくて双眸を堅く閉じ、世界と自分を切り離す様に身体を丸める。

こんなことをしていても、何の用もなさない、殊更に自分を追い詰めてしまうだけなのに。

分かっているけど、どうしていいのかが分からない。

焦燥ばかりが出来ない頭を掻き乱す。

助けて、誰か

声に出来ないのは、願い…望み。

苦しくて、壊れてしまいそう。

だれ、か

「……ラヴィ…さま…」

闇の中に届く零細な声、なのに深く心に寄せる。

「カジ、カ」

様を見られたくない、まごつきながらも立ち上がりドアへ、彼女に向かう。

「まだ休んで…それとも僕の足音がうるさ…」

「やっぱり」

「え」

バサリ、頭からタオルを掛けられて一瞬固まってしまった。

「濡れて帰って来るんじゃないかって」

足許に置いたランプを手に、カジカがそれを胸元辺りで照らす。

「何処へ行ってたのとは訊きませんが、服のまま泳いで来たの？ って言いたいくらいびしょ濡れじゃないですかっ、髪拭いて着替えないと」

「ああ、うん…そうする」

「呑気なっ、座って下さい拭いて差し上げますからっ」

そう言っつて、強引に座らせると自分で被せたタオルでわしわしとラヴィの髪を拭く。

「カジカいいよっ、自分で拭くから」

「……ラヴィ様っ」

「はい？」

手を止めて、彼女が正面に回ると腰を屈めて視線を合わせた。

「もうすぐお誕生日ですねっ」

「と、突然。でも、そう言えば…うん」

本人がすっかり忘れていたのに、よく覚えててくれたものだと少し驚く。

「そうでした。そろそろ十六でもいいかな？　って、何だろうちの微妙な年勘定は」

苦笑してカジカを見る。普通の人、年齢を重ねる度に成長するすっかり大人びた姿が彼には羨ましく思える。

「私は…ラヴィ様ずっとこのままがいいな。永遠の十五歳で通しましょっ」

「カジカは、僕みたいに長生きなのが側にいて嫌じゃないの？」

その問いに、カジカの表情が曇るのを見て、訊くんじゃなかったと後悔する。

「ごっごめんっ、変な事訊いて…忘れて？」

「ああっ、いえっ偏見は無いですよ？　そうじゃなくて…もし好きな人のどちらかが老いないのは辛いかかって。仕方ないことだけど、どうすることも出来ないもの…どうにもならないんです」

空笑いして外した視線を窓に向ける。止みそうにない雨、彼女は小さな吐息を漏らした。

「初めてお会いした時、私は十歳でした。それから三年、カ

ジカはラヴィ様の側で十三歳のあの日まで……一緒にいた時間は短かったけど、でも」

途切らせる言葉の間に、居心地が悪くて息をするので精一杯だった。

「でも私は……ラヴィ様はご存知だったのでしょう？ 私が貴方の側に居た本当の理由……」

「カジカ……やめよう、そんな話」

「違うのっ、そうじゃない……ラヴィ様は分かかってない……あんなのは優しさじゃない、だけど幸せだったの……それも嘘じゃない、違うんです　私はただ欲張りなだけなの」

「カジカ……」

「もうあの時の子供じゃない。狡いよ、ラヴィ様……貴方はずっと知っていたくせにっ」

真っ直ぐに向けられる瞳が、一生懸命に語る彼女が過去に重複する。

彼女は、自分に充てがわれた慰み者であったこと。

知っていて自分は逃げていた、彼女の口にはしない本音からも。

「だとしてもあんなことは間違ってる。君はカジカ・クライスと言う一人の人間　人形じゃない」

背を向けて、これ以上何も考えられない頭を抱える様に俯く。どうしてこんなにも、何もかもが一度にやってくるのだろう。

胸の内、叫び出してしまいそうになる歪に尖った感情を、能う限り

で抑える。

「ラヴィ様」

衣擦れの音、衣服を脱ぎ捨て肩に触れる指先、彼女の生身が濡れたシャツから肌に伝わる。

「人形でもいい、どうせ成就なんてしないもの……だから、お願い」

「カジカ…やめよう、僕頭の中ぐちゃぐちゃなんだ… 君は、

どうして…っ」

「やだっ、私を見てよ…もうちゃんと大人の女なんだよ」

「なんでっ、僕なんか…っ」

爪が食い込む程に強く掴まれる肩と、その背中に顔を埋めて哀願する彼女に身を竦める。

「見てよ…っ、恥かかせないで……私はずっと貴方が」

突き動かすのは憐憫、それとも。

きつく閉じた瞼、その一瞬おざなりに震えるこぶしを開き彼女の肌で押さえ留める様に、素気無く床へ横たえる。

そうじゃない、これは横溢する感情の濁流。自分の弱さ。

「ラ…ヴィ…」

そのまま唇を塞ぐ様に重ねる。これ以上なにも語らせない有無を言わせぬ荒々しいくちづけに、カジカは行き場を失ってしまった指先を這わせ、床に爪を立てる。

望んだのは自分、怖くなんてない。

なのに意思に背いて強張る身体が許せなくて強く目を閉じる。

「……………んんっ」

途切れ、彼女は唇を震わせて吐息を漏らすと、微かに開いた両の目に映る彼の深翠の瞳が首筋に沈む。

「ラヴィさ……」

間近に感じる息遣い、次第に優しくなる愛撫は柔らかい女の部分に手が触れる。貪る様に、カジカは彼の乾ききらない髪を弄ぶ。

「ラヴィ様…あん…っ」

「様は、いらない」

耳元をなぞる唇が囁き、舌先が耳朶に触れカジカは背を撓らせる。

ずっと貴方が好きだった。

笑った顔も、毎夜物語を読んでくれるその声も好きだった。

大好きだった、のに……。

いつから私は、こんなにも欲に溢れてしまったの？  
肉欲をせがむ淫靡な女に。

「……………どうして、涙…なんか」

不意に絞り出す声に、定まらない焦点を揺るがす。

「なんで…っ、泣くんだよ……………カジカ」

「泣く……………わた、し…？」

思いがけず、目尻に伝う涙に唾然としているのは彼女の方だった。

「ちが…違うのっ、」

困惑した表情でカジカはラヴィを見る。本当に心の收拾が付かずど  
うしていいか分からないしていると、その視線を彼の方から逸らす。

「僕は、君が望むのなら……………カジカがそれを望むならっ、何  
だって受け入れたのに…っ」

「ラヴィ…さま」

「なのにこんなやり方っ…何でなんだよ…っ」

「ラヴィ様、待って」

「カジカ　そんなに僕が…憎いの？」

「…え」

愕然とした。自分は、この人を憎んでいる？

「どうして、そんなことあるはずっ…」

差し出したカジカの手を拒絶する様に、ラヴィは身体を背けて床にこぶしを叩き付ける。

「だったら…だったら何故っ…サリエリと手を組んだりしたのっ！？」  
「カジ、カ…っ」

next

## 蒼翼の欠片

天井を瞬きもせず見詰める。

本当はごく数秒だったのかも知れない。長く身に纏い付く様なしじまに、ただ暗い空から落ちる雨音だけが耳に伝わる。

自分のしたことが露見したことに驚きはなかった。

想像よりも悲しかったのは、この人を傷付けてしまった事実。

「流石です、ね」

分かっていたはずなのに。

こんなにも罪悪感と言うものが、重くて痛いなんて。

「いつ…気付いたんですか」

「理解、出来ない。カジカ…どうして」

「嘘。理解出来ないなんて、ラヴィ様分かっているじゃない」

冷たく突き放した言葉。何故だか、笑みまでもが漏れて自分がどうしたいのか、在り方を喪失してしまっただ様な奇妙な感覚だった。

「そうですね、昼間抜いた貴方の髪…渡したわサリエリに」

横たわる身体を起し、闐然とした空間に取り残された彼を認める。

この人は、見た目通りの子供じゃない。

その横顔も、繊弱に見える肩も目に映るだけのカタチに過ぎない。本当の彼は魔物すらも脅かす、恐ろしい呪術師。

これは、見せかけ、なのだ。

「サリエリね　　貴方を、造るんだって」

見せかけ、だから。

「もちろんご存知なんですよね。私が通謀者だと見抜かれたくらいですから」

「……ヒト、キマイラ」

「ええ。アモネアジルに居た頃、科学者だったサリエリは人として侵してはならない実験を軍から依頼されてたとか」

「カジカ…どうしてなのっ　！　？」

「一固体内に、別の固体情報を移植する…戦に勝つ為のベルセルクを造った」

「カジカ…っ」

「もう一人の貴方が、女神を揺り起こすの」

「僕の質問に答えてっ　！　サリエリのこと…っ、許せないはずの君が何故加担なんか」

「……許せないわ。でもそれ以上に、私は貴方を憎んでいるの

ラヴィ様が言ったんじゃないっ、知らない振りなんて…私の口から聞けて満足ですかっ　！　？」

壊れてしまったナニか。

もう戻らない、彼の全てを否定した瞬間、有為転変なこの世界でのたった一つ、儂いナニかを自らの手で損じた。

「……そつ、か……」

「か…ばかみたいっ！　裏切られたのにどうしてそんな顔するのっ！　？　なんで…っなんで悲しい顔で微笑うのよっ、やめてよっ詰ればいいじゃないっ、それだけの事を私は」

肩に触れる優しい手。そつと脱ぎ捨てた服をかけてくれるこの人を悲しませた罪業を、取り消すことはもう出来ない。

「カジカは悪くない、全部僕の所為だから…だから泣かないで」

「違う…違うよ…っ、私はあの夜のこと…違うの、あれは私が自分の意思でやったことっ、だからラヴィ様は……」

「カジカ、言っつて？　僕はどうすればいい？」

しんと深く、差し向けられたそれは突き刺さる程の莞然。

「ラヴィ、さま」

「君の、思う様に。ただどここまでね　ごめん、僕は負けられないんだ」

何度も首を振り、苦しくて込み上げた哀咽は床に染みを落とす。

「……カジカ」

包み込んでくれる彼の両腕が

彼の方が震えているのに。

「お願いだから…泣かないでよ」

私はいつから、いつからこんなにも残酷に傷付けられる様になったのだろう。

ぎこちなく、もどかしさに焦れる彼女の指が衣服に忍ばせていた物を取り出す。

「それを、飲めばいいの？」

頷くカジカの片手に握られた小さな錠剤に、ラヴィが手を伸ばす。

「……眠る薬です。大丈夫、自分で試してみたから」

「うん」

「待って」

薬を摘まむ指を、カジカがぎゅっと握り締める。

「私が」

まだ震える手でそれを口に含み、彼の唇に重ね口移す。忘れない、涙の味がして声を殺して泣いた。

「カジカ、ありがとう」

「ごめん、ね」

崩れゆく、世界の淵源。

キミは多分、誰よりも神に愛され、誰よりも神に憎まれるべき存在。

どうあればいいか。

それを真に知る者は、悉くそれを放擲した。

「神とは、人より独り決めな振る舞いが上手いね」

棄てられた児の今を、

その眼に触れた時、神は何を想う？

彼は、どれを択一するのか。

「ほづら。生まれるよ……神の愛し子が、もう一人ここに」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

次回から回想に入ります。

## 蒼翼の欠片

まだ二つの国が、緩慢に戦いの中へと燻り始めた頃。  
七歳の僕はその人と出会った。

サリエリ・ルイズリィ・ビショップ

一言で言えば才気に溢れた人。  
約束された将来を捨てて、その人は僕の前に：僕の為に生きる人となった。

学ぶ事は沢山あったはず。  
なのに彼は、僕に特別何かを教えるわけではなく、ただいつも側に居てくれた。  
どんな時も、優しい微笑みで僕を包み込んでくれる。

世話焼きで心配性の彼。そんな彼が時に厳しく叱ってくれることすらも、僕には心地良かった。  
彼の存在は当たり前前であって、自分でも気付かないうちに依存し全てを委ねて。

僕は、本当にサリエリが大好きだった。

それから幾歳が過ぎ、七歳だった僕は人とは違う時の流れを経過し  
十四歳。

そう、

僕の身の定めがその日常から逸脱したのは、元老院での地位を最高

審議官に置いたこの頃からだった。

### 三、夜陰に覚める業。

「間もなく着きます……本当に、宜しかったのでしょうか」

箱馬車に揺られて一昼夜、目的の街まであと少しに迫った頃、心配性の彼がこれでもう何度目かの同じ台詞を投げ掛ける。

「大丈夫だって。さっきからそればかり」

「ですが、実戦の経験は皆無なのでしょう？ 幾ら相手が人でないとはいえ、君はその力を……」

「サリエリ」

窓から入る風が髪をさらう。腰まである長いその髪を、鬱陶しそうに片手で掴んだ。

「人がたくさん亡くなったんだ。国軍は今十分に手が回らない、だったら次は僕……順当でしょ」

「そうですね……私には都合よく」

「それでもいいよ。人助けが出来るのなら」

零す微笑みは慈しみに溢れ麗しく、宝石の様に煌めき魅了される。

「……王の命とはいえ、やはり心配です」

「使える呪術師って言ったら僕くらいでしょ？ アモネアジールからここまで距離あるし、皆さん御高齢だもの。長時間の馬車は腰が…僕だって痛いのに」

「ああっ、どうしましょうっ！？ もう街が見えて…ラヴィくんっ本当に…」

「サリエリ。…もうっ、僕が信じられないのっ？」

「信じてますっ信じてますよっ、だから心配なんじゃないですかっ」

「クスッ」

気が気でないサリエリに、エメラルドグリーンの瞳が目前に映える。

「僕は心配なんかないよ？ サリエリが居るし…師匠仕込の裏技だっであるしねっ」

「裏…クレイド殿は一体君に何を教えてるんですかっ」

「い、色々？」

「色々って、しかも今詰まりましたねっ？ ラヴィくんっ？」

サリエリの苦悩を余所に、馬車は轍に沿って街へと入る。戦場に赴く兵士たちの中から、致し方なく措置すべく派兵された兵科の旅団が、彼等を出迎える手筈になっていた。

敵は人に非ず。

一人の術師の召喚した魔物に、街が壊され幾人もの死者が出た。つまり、不相応な独り善がりが発端の騒動。

血と肉を喰らい、味を占めた魔獣が街に跋扈し、無数の種を産み付け蔓延しているのが現状。軍ではとても手に負えず、呪術師の派遣をアモネアジールに依頼することとなった。

「……なあ、知ってるか？ エクトニア王がここに呼び寄せた方のこと」

程なく到着するアモネアジールよりの貴使に、兵士等は安堵と同時に畏怖の念を抱いていた。

「最高審議官が来られるのだろうか？ この為に、殊更に元帥が出迎えるそうじゃないか」

「…あのみ。その最高審議官で、どんくらい偉いの？」

兵士の一人があんぐりとして、それから口を開きなおす。

「この国で三番目くらいに偉いんだよ！ 知つとけ阿呆っ」

「三番っ！？ そんなにっ…どんな人か見たことあるのか？」

「ある訳ないだろう、そもそも滅多な事じゃ聖域から出て来られんらしいし。だが俺が推測するに…かなりのご老翁だろうな」

そんな当たり前な推測は要らない…と言いたげな目で見ていたら、召集がかかり一同が整列する。

黒塗りの馬車が街の表門に止まり、両脇に並ぶ兵士の間を元帥が足を運ぶ。

元帥を間近にするだけでもこの緊張感。それ以上にこれからここを通るのは、この国の王に近い身分を有する　アモネアジール於いて元老院の最高審議官。

到着の刻限に一ぶんの狂いも無い事を告げる様に、御者が扉を開いたと同時に時計塔の鐘の音が響く。街の中心にある美的な景観を持つそれは、活気を失いひっそりとした中に轟いた。

「御手を」

手を引かれて馬車から降り立つ。全身を黒のローブで覆い、フードを深く被り容姿などを拝見することは皆無といった姿で、兵士が並ぶ中を厳かに進んでいた、が。

「ひえっ」

ひえっ　？　？　？

どうやら裾を踏んでつんのめってしまったらしい…が、まるで子供の様なその声に兵士達の頭の中は妄想でグルグルになる。

「お待ちしておりました。長時間休息もなくお疲れでしょう」

「いいえ。死者が出たことに心を痛められ、早急な解決を望んでおられます故、気遣いは無用とのことですよ」

話したのは後ろにつく若い男の方だった。でも何故か、黒いフードがコクコクと何度も頷いている様に見えて、側の兵士等は傾げたい首をぐつと押さえる。

「心強いですが、では早速状況をお話しても……」

「ローズ元帥」

やっと聞き取れるくらいのか細い声が元帥を呼んだ。

「はい」

腰を屈めて耳を傾ける元帥に、小声で何か話しているらしい。正直  
凄く気になる。

「あの…っ、僕ずつとこの格好なんでしょうか？」

「と、仰いますと」

「無理ですっ、こんなの着て術なんて…しかも暑いです」

「ラヴィくん…っ、またそんなワガママをっ」

「私どもは一向に…それはアモネアジールの法衣でしょうから」

「そっなのっ？　なんだ。じゃ脱ぐね」

「レヴィくんっ まったく。」

恐らく、彼だけがその麗姿を見て仰天させてしまうことを気付いていないのだろう。

「サリエリ はい」

脱いだローブを粗略に投げ渡して髪をかき上げ、改めて元帥を見据える。

「……その容姿、幾久しくございます。クラフィスト様」

「ローズ元帥お久し振りです。では詳細を聞かせて下さい」

男とも女ともつかない…いや、それ以上に自分の目を疑ってしまいたくなる姿に、兵士は思わず声が漏れる。

「…ごぶ、も…？」

next

## 蒼翼の欠片

魔獣とその種子を殲滅。

街のほぼ中心にある時計塔を根城に、種の方はそこから約六百メートル四方に飛散。数の多さから全ての把握には至っていないらしいが、大よそで百は越えると聞いた。

「百…かあ」

独り言を漏らして、ラヴィは数百メートル先に見える時計塔に目をやり、そこから近景に視線を落とす。

人の居ない街並みは、寂寞として物悲しさを帯びていた。レンガで建てられた商店や家屋、そのどれにも人達の生活する歴史が刻まれ、これを自分が灰にしてしまうのかと考えると胸のつまる想いがする。

「やれますか？」と、率直に訊ねられた元帥に頷いてみせたのは、数十分前。

種子を根絶やしにするには火属の精霊が放つ紅焰が最善とされる。そこに問題は無い。あるのはそれによって甚大になる二次災害だった。

「止むを得ないでしょう、このままだと被害はこの街に止まりません」

元帥の言う通りである。

了承して、一人街中に入ったのだけれど。

「ジインの紅焰は半端じゃないんだよ」

塔の下部に設置されている教会が見えてきたところで、瘴気に淀む重い空気を肌感じて足を止め、キレイに結わった髪に触れ吐息する。

『髪、束ねて』

間に交わしたサリエリとの会話を思い起こして苦笑いを浮かべる。

『……結界で閉じ込めるつもりなんですね』

彼はいつもの様にラヴィの髪を梳きながら、確信をもってそう述べた。

『え、えと……うん。出来ることはやっておきたいですよ。いたたたつ、サリエリ痛いよっ』

髪を結わい、リボンを縛る手にサリエリがぎゅぐゅと力を入れる。流石はサリエリ、鋭い……と言つか見透かされてると言つか。

『相当な距離ですよ！？ 止めて下さいっ、負担だっって大きい』  
『なんとか最小限にしたいんだよっ、僕なら大丈夫だっって』

『根拠はあるんですか？』

『こん……えっと、なっなんとなく！！』

『それは理由にはなりませんっ、私も参りますからっ』

『……ホント、心配性なんだから』

やっこのことで、何とか一人でやれる様取り付けたが、こっそり後をつけて来そうで途中何度か振り返ってみたり。

「幾らなんでも、あれだけ言っておけば来ない、か」

腰を屈めて方膝と両手を地面に付ける。心配してくれるのは有り難いが、それだけ自分が頼りなく信用に欠けている様にも思えて、少し意地にもなっていた。

目を閉じ深く空気を吸い込んで、意識を集中させる。通常の結界には有り得ない広域結界を一人で完成させるのは至難と体力の成せる業。

「結縛、地に這わせるはふたつ…昇閃　障纏」

ぽとり、額に流れる汗が落ちる。彼を一点に放射状に伸びる蒼光、数秒後には種子を生みつけた街部分を筒状にすっぽりと覆った。

「ぜ…全力疾走したみたい」

呼吸を落ち着かせて数歩足を運ぶ。大丈夫、まだまだ余力はあると判断して、ラヴィは時計塔の下にある教会の重厚な扉を徐ろに開く。

「っ」

踏み入れる一步、まるで異界に来てしまった様ならずしりと重い空気が毒気、それにむせぶ程の人の血の臭いがして、思わず袖で鼻と口を覆う。

目をそむけたくなる惨状が聖堂にあった。

筆舌に尽くし難い惨憺たる光景　その中に、ケモノは悠然と現前する。

《喰われに来たのか？　小僧》

言語の理解、つまりレベルE（エクストラ）　人を喰い続けるこ

とでその力を持続出来ることを了得する知能を身に付けたモノ。

姿は黒く短い体毛、体に比例しない巨大な足を持つ黒妖犬の類。大きく裂けた口と尖鋭な爪牙には鮮血が滴る程に付着していた。

「いいえ。キミを壊しに来ました」

《へえ？ 呪術師なら、喰いごたえありそうだな》

見せる表情までもが、人の感情のそれに酷似していて心悪い。

「そのつもりはないよ、これ以上話をするつもりも、ね」

《なら精々、術師らしくまじないでも唱えるんだな…っ！！》

前足を蹴り上げ喰らい付く形相の目前、微動だにしないラヴィが素気無く呟く。

「それも、必要無い」

《！？》

体を捻じ曲げられた様な激痛がしたと感じたのと同時に、鈍角に飛び床に激しく叩き付けられた。

《……き、さま…っ！！》

首を擡げ前肢に力をこめるが、次には途轍もない過重が横たわる体に申し掛かり、その重力に周りの床がへこんで碎ける。黒妖犬は身動きが出来ずにその姿にらしい咆哮で鳴いた。

《人間…如き、に…っ》

「最後通牒です。冥府に還りますか」

《断…るっ》

「なら、塵芥となつて　！　？　誰か居るのっ　？」

前方から僅かに物音がして目を凝らす。祭壇の横にあるパイプオルガンの後ろから伸びた小さな手が、ラヴィの呼び掛けに応える様に動いた。

「生存者がっ　！　？」

黒妖犬にかけた術はそのまま、駆けて椅子を飛び越える。小さな手の正体は子供、女の子が震えの止まらない身体を丸めて目だけをラヴィに向けた。

「…………よく生きてっ…もう大丈夫だよ」

そつと両手を伸ばし、包み込む様に抱き締める。四、五歳だろうか、こんな小さな子供がこの陰惨とした中で生きていたのは奇跡だった。

「…………おにい…ちゃん」

奇跡　　本当に、キセキ　？

面を上げるラヴィに、女の子は笑みを零した。ひんやりと、吊り上げる口角と妖光放つ両眼。

「  
…っ  
！  
！」

咄嗟に庇う左腕を割れたガラスで切り付ける。

「ダメよ、逃げちゃ…」

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

おまけ。

クレイドばーさすサリエリ

「師匠、おはようございまーすっ」

「馬鹿弟子……なんだ、そのぴらっぴらっの服はっっ」

「私が用意したんですよ。正直、クレイド殿の趣味には嫌気が差す」

「サリエリ、金魚のフンかお前はっ……っか、体術の訓練にナニ着せ  
とんじゃーっっ」

「伺ってません」

「いちいちお前に了承を得にやならんのかっっ　！！　阿呆臭い、  
ラヴィっコレにさっさと着替えろっ」

「……クレイド殿、それは？」

「体術っついたらコレしかないだろうっっ」

「サリエリ……着替えていい？」

「致し方ありません、ね」

（着替え中（笑））

「師匠っ、この服破れてるよ」

「……それはそーゆー服だ」

「ラヴィくん。それはね、スリットって言うんですよ」

「スリット……」

「因みに、その服はチャイナドレスと言います」

「……さっきのがまだ良かったよ、足許スーサーする」

「髪、結って差し上げますね」

「どーだ眼鏡っ、ぐうの音も出んだらっっ？」

「師匠っ、体術だったらいつもの格好でいいんじゃない…」

「駄目だ！！（です）」

……と、まあこんな感じで遊ばれていたとか、いないとか…（笑）

「遊ばれてませんっつ！！」　ラヴイ。

## 蒼翼の欠片

「ダメよ、逃げちゃ…」

傷付けた腕を掴む力は、子供のものではなかった。

この子は、ニンゲンじゃない。

頭の中では解っているのに、逡巡させるのは思考ではなく想念。解って、いるのに。

《クツクツ…母親の腹の中にいた胎児だよ。種を植え付けてやったから立派に成長しただろう？》

声にならず、血の付いたガラスを舌先で舐める女の子の拳動に視線を逸らす。

《ソイツは母親の腹を食い破って生を勝ち取ったんだ》

「……おにいちゃん…もつと、血をちよーだい」

ガラスを持つ手を構える女の子の腕を掴み、ラヴィは一度首を振る。

「駄目なんだ…僕の血はあげられない」

「ちえっ、おにいちゃんのケチ」

「君には、毒なんだ　　なん、でっ　　！　　こんな酷いこと…っ」

じわり、次第に緩くなる抑止に黒妖犬は上手くやりおおせると笑みを漏らす。

《かわいいだろう？ ニンゲンの子供と何も変わらない、同じ様に笑うよ？》

「黙れ…っ！！」

「どおしたの？　なんで、怒ってるの？　おにいちゃん」

「人間じゃ、ない…君は、き…みは…もう…」

「おにいちゃん、あたしね…とってもお腹がすいてるの。だから、ちよーだい」

「く…っ」

傷口に噛み付き、肉を引き千切ろうと犬歯をたてる。その姿はケモノに等しく、ラヴィは顔を顰めてて振り払う。

もう元に返すことは叶わないことも、どうすればいいのかも…それを身体は知っているのに。

たった一言、終わりを告げるその言葉が咽喉元で重く痞える。

「　　出来ない、よ…きみは、それでも人なんだ…っ」

《愚かな術師だ　　！！》

気付いた時には術を解いた黒妖犬が攻め寄せ、前肢の鋭い爪甲が獲物を捕らえ様としていた。

ああ　　本当に……

「何ぼさつとしてるんですかっ　　！　　！」

目前の黒は魔獣ではなく見知った背中。閃くサーベルが黒妖犬の爪を食い止め、叱責する声が耳に届く。

「……サリ、エリ」

「サリエリじゃないでしょうっ　　！　　！　　…その子は　　？」

答えられずに黙するが、彼にそんなものは全く通用しない。

「駄目ですよ。君のそれは情ではありません、可哀想だと思つのなら……分かってますよね」

「僕は…っ」

「僕とか言ってるんじゃないっ、私は君に甘んじて死を受け入れる様育てた覚えはありませんっ」

本当に何も言えなくて奥歯を噛み締め、まだ掴み取つたままのその手に力をこめる。

「ラヴィくんっ、君はこの街を救いに来た呪術師　　しっかりなさいっ　　！」

伝わる体温の温かさに切齒して、ラヴィは苦い沈黙を破る。

「はい」

頷き、女の子を引き寄せて強く抱き締める。

《邪魔しおってっ…オマエも、喰われに来たのか》

「私はラヴィくんのお人好しじゃありませんから」

《…だから？》

「ですがまあ、彼がキミと対峙出来るまでの繋ぎ、ですよ。お手合  
わせます」

理解に苦しむ笑みを湛えて、サリエリが剣を構えた。

「おにいちゃん…」

ペロリと舌舐めずりした後、ラヴィの首筋に牙を宛てがう。

「……ごめん、ね」

その言葉は女の子には届かない。ただ彼の白い首に透けて見える頰  
動脈に牙を立て、溢れる鮮血を体内におさめる。

「助けてあげられなくて…ごめん」

刹那、女の子は動きを止める。無に還る瞬間、全身を石膏の様に固  
めてそれは包まれる粒子に帯びて霧散した。

「……………サリエリ」

やおら立ち上がって、戦いに投じる彼を呼ぶ。翻し、その声に応える様にサリエリは腰を屈めた。

「もう手加減しないから」

「…まったく、」

広げた両腕、睨め付ける彼の両眼が閉じるほんの一瞬。

「世話のやける子だ」

断末魔の叫びを上げる間も許さず、魔獣は存在を完全に消失した。

「サリエリ、ありがと…その、来てくれて」

「行きますよ、何処だって…君が、」

「サリエリ…？」

異変を感じ、慌てて駆け寄ると腹部を負傷したのか、シャツに血が滲んでいた。

「 見せて」

「平気ですよ、君こそ早く止血なさい」

「僕はいい…ボタンが上手く…千切るからっ」

「セクハラですっ、ラヴィくんっ」

「冗談言ってる場合じゃ　　深いよ、大怪我だよっ…すぐ術で」

シャツを掴む手に、サリエリの指先がそっと触れる。

「駄目なんです、私の身体に治療の術は効きません」

「……どういうこと？」

「私は君と時を同じくする為に、あれこれ…弄っちゃってまして。ですが治りは人よりずっと早いのでご心配なく」

「し…しんぱいっ、心配するに決まってるだろ…っ　！　僕何も…サリエリ…っ」

ぼろぼろと大粒の涙を零して、ラヴィがサリエリにしがみ付く。

「泣く必要なんて…この身体が君を護るのに役立つたのだから、私は満足ですよ　？　…ラヴィくん、私の全ては君に捧げたものだから、ね」

「サ…サリ、サリ…ふえ」

「どうせなら、泣くか名前呼ぶかどっちかにしましょうっね」

「ごめんなさい…っごめんなさい…サリエリっ」

「いや、ですから謝る必要も…ラヴィくん、早くここを出て仕上げを。君ときたら要領が悪い、早々に結界を生じて…本当に意地っ張りなんですから」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片（後書き）

補足です。

この頃のラヴィイはまだサラを支配してません。ジインとルウちゃんだけです。

## 蒼翼の欠片

鷹揚にその姿を風に乗せ、火属の精霊は吐き出す紅い焰で街を灼灼として焼き尽くす。

見るでもなく、丸めた背中では膝を抱えて虚ろに、石畳に座す彼の背後から声がした。

「壮観ですね」

頬笑み、彼はラヴィイの横に立って下顎に触れながら、その先の光景に目を向ける。

「元帥…ジインのこと、見えるんですか」

「可視までですがね。ジインて名ですか」

「はい……あの、もうすぐ終わりますから」

膝を立ててしゃがみ込んだまま、ぼんやりと街の有様を見る彼の横に並んで座り込む。

「怪我、させてしまいましたね」

首を振って、包帯を巻いた左腕に触れる。

「いいえ、僕の過失ですから」

「傷、癒されないんですか？」

「いいんです、痛みを知るいい機会だから」

「痛い？」

その問いに側向いて元帥を一瞥し、微かに頷いたあとラヴィイは顔を膝に埋める。

「……知らなかったんです、僕何も…同じ様に長命だって聞かされて、そんなの間に受けて。馬鹿だよ僕」

「人はそれぞれに役割を担うんです、彼はその道を選んだのでしょう？ それをどう思うかは本人にしか分からない事です」

彼の言葉に答えられないでいると、一際に一面を朱に染め、高く伸び発光するそれに感嘆の声を元帥が漏らす。  
精霊を見ることが出来ないそれぞれも、映える輝きに目を細めて街を見入る。

やがて残照の様に空が焼け次第に光りが翳る頃、大鳥は垂直に突き出して結界を抜け大空を翔ける。威風堂々たる風貌で羽翼をひるがえし、風であそぶ様にしてラヴィイの前にふわりと降り立った。

《終わったぞ、ラヴィイ。》

「…うん」

《灰燼。ナンもねーぞ》

「うん」

《馬鹿ラヴィイ》

「うん」

僅かな間を置いて、俯いたままのラヴィの頭にのっしりと重み加わる。

「……………ジン、重い」

《ボケらっとしてるお前が悪いっ》

「わざと重くしてるでしょ……………もうっ」

躯体を手の平に乗る大きさに変えたジンが、ラヴィの髪をワシワシ掻き筆る。

「驚いた。具現の変容は始めて見ますよ」

まじまじと覗き込む元帥を、ジンが訝しげに見る。

《……………なんだ？ このオッサン》

「ローズ元帥。おじさんは失礼だよ」

「何と言うか……………趣のある精霊ですね」

「すみません、口が悪くて」

やっと面を上げたラヴィが、掴み取ったジンの鼻先を小突いた。

「よっしっ」

《イタイなっ、しかもいきなりナンだ！？》

「いつまでもウジウジしてたらサリエリに怒られちゃう。結界解かなきゃ、ジーンご苦労様」

《…いいケド。面白かったし》

「クラフィスト様」

立ち上がるラヴィに元帥が改まって名を呼び、強引に握手を交わす。

「ありがとうございます。私はこれより戦地に赴かねばなりません故失礼させて頂きますが、兵士は後処理の為にここに残していきます」

「そう…ですか」

「サリエリ殿の怪我のこともあります、アモネアジルへは数日置いてからの方が良いでしょう。就きましては、ここより数キロ程の所にネイス卿の屋敷が御座います、話は通しておりますのでそちらでご静養を」

十全の流れ。彼の計算通りだった。

「ありがとうございます、元帥」

この時、僕はただその言葉に頷いて、サリエリと共に屋敷へと向かった。

知る筈も無い、誰一人その思惑に気付く者も居ない。

全てが策略だと知ったのは、ずっと先  
何もかもが終わってしまっただった。

巧妙に書かれたシナリオは、終盤へと向かう。  
彼の描く、縷々として続く物語。

その最後のキャストが  
彼女だった。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「 ようこそいらっしやいました」

屋敷の主人自らが出迎え、彼はひと目で僕が翼有種であると見抜き、自ずと最高審議官であることを得心する。

「クラフィスト様、ネイスに御座います。我が家だと思い、どうぞおくつろぎ下さいませ」

地方長官で伯爵の称号を持つ彼にしては、これまでに招かれた荘厳としたお屋敷に比べると質素ではあるが、とても落ち着きのある佇まいに好感がもてる。

「ネイス卿」

礼儀に払い、腰を屈める彼に少々首を傾げていると、訳合いを彼が話し出す。

「事情により今は里に戻っておりますが、我が妻は翼有種：アースカルドの民なのです」

「なるほど…ネイス卿、あのお互い無遠慮で宜しいですか？」

「わたくしは一向に…ですが」

「良かったあ、僕堅苦しいのとか苦手で」

あまりに無防備なラヴィの笑顔に、ネイスは困惑してしまう程だっ

た。

「奥様が翼有だとしても、よくひと目で分かりましたね、僕も同じだって」

「それはもうっ。何故なら、」

「 叔父様、お客人が…？」

高く澄んだ、鈴の音のような声がラヴィたちの居るエントランスに響いた。

「ええ、今し方ご到着されましたよ」

「申し訳ありませんっ、私ったらまた夢中で…」

パタパタと駆け寄るその姿に、ラヴィは目を瞠る。

「本当に申し訳ござい…ま、せ……」

面を上げた彼女もまた、その瞬間から啞然たる面持ちでラヴィを見詰める。

双方ともに、得も言われぬ何かを。

「クラフィスト様、この方はお預かりさせて頂いている…クラフィスト様？」

不可解な感覚、この情感を言い表す言葉を見つけられない。鳩が豆鉄砲を食らった様な二人にネイスは気付いて頷く。

「そうですね、純粹の翼有種は今では稀だと聞きますから」

その瞳も肌も髪の色も、純血たる証。

でもそれ以上の何か、無理矢理に言うなら懐古の念に思慕する様な  
……違う、そんなに難しいことではない、きっとこれは。

「……驚きました。ラヴィくんが二人居るのかと」

兵士に肩を借り、遅れて入って来たサリエリが冗談めかして言う。

「お世話になりますネイス伯爵、サリエリ・ルイズリイです。ご挨拶はもうお済みですか？」

「ええ先程。サリエリ殿、ごゆっくり静養なさって下さい」

「ありがとうございます……ラヴィくん、目がどんぐりみたいですよ？」

「サリエリ……そうだった、すぐベッドにつ」

あたふたと彼に近づくラヴィに、サリエリが極上の笑みで返す。

「私の事は気にせず、皆様とお茶でも頂いて下さい」

「僕も一緒に部屋まで……」

「少し眠りたいので、すみませんが一人に」

「でもっ……うん……分かった」

「では、召使に案内させます。クラフィスト様はわたくしどもと居間へ」

ネイスに招かれて歩き出す。目前の彼女に、ラヴィは視線を投げ掛けてようやく口を開いた。

「お世話になります、僕のことはラヴィ、と」

「こちらこそっ……クレアに御座います、ラヴィ様」

白い肌、朱に差す頬がこんなに可愛らしいと思ったのは初めてだった。

「呼び捨てでいいです、僕もクレアって呼ぶから……迷惑ですか？」

必要以上に首を振ってクレアが応える。ふんわりと、甘いお菓子の匂いがした。

「あれ、髪に何か……」

伸ばした手が彼女の前髪に触れ、そこでやっと何て大胆な事を自分はやっているのだろうと気付く。

「な、なんだろ……白いのが」

「あ……小麦粉です。お菓子を、お出ししようと作っていたので。甘いものは大丈夫ですか？」

「はい。大好きです、手作りなんて感激です」

「いけないっ、オープン見てこなくちゃ…居間でお待ち下さいねっ」  
来た時と同じ様に、パタパタと駆ける彼女に笑みを漏らす。  
同じ深い翠の瞳が、あんなにも綺麗なんだと、鏡に映す自分を見て  
も思いもしなかったのに。

「ど、どうしよう…僕、変だ」

誤魔化す様に呟くが、所詮自らを偽る事は出来ない。

「へん…じゃない…好きなんだ、すごく」

うろたえて窮する。好意を持たれたことはあっても、自分からこんな気持ちになったのは初めてのことで、どうしていいのか分からない。

「落ち着け、自分っ」

考えを口に出してしまっている時点で、自若からすでに程遠い。傍目があれば、確実に挙動不審だろう、深呼吸して胸を何度も撫でる。

彼女が、同じ翼有だからかも知れない。

多分年齢も近いだろうし、共通点が多いから余計気になるのだと。

「……クラフィスト様？」

居間に姿を見せないラヴィに、戻って来たネイスが声を掛ける。

「はっはいっ、今行きますっ」

この出逢いに、後悔はしていない。  
それだけは、今でも君を見て言えるから。

クレア…君は僕にとって、かけがえの無い大切な、たった一人の。  
。

n e x t

## 蒼翼の欠片

彼女はお菓子作りが天才的に上手かった。

綺麗な指先は淡い桜の色をして、長く艶めく髪を掻き上げる度、その仕草にドキドキする。

話す、言葉。彼女の全部に一喜一憂する。

僕の名前を呼ぶ唇から零れる笑顔に愛おしさが込み上げる。

出逢ってからほんの束の間。

彼女は強烈に僕の心を奪い去ったんだ。

「…………ラヴィくん？」

分厚い本を閉じ、吐息交じりでサリエリが呼び掛ける。

ネイス卿の屋敷に来て二日目の昼下がり、ページの進まない本を膝に窓の外を眺める。

「書庫、充実しているようですね。悪いんですが何か他に見繕ってきて貰えませんか？」

「あ、花びら」

風に乗って白い小さな花びらが一枚、窓から入り込む。

ひらひらと、広げたままの小難しい物理学書の文面とは不似合いにそこに舞い落ちる。

「サリエリ、花びらだよ。ほら」

「そう、ですね。ラヴィくん休憩にしましょう、私も少し休みます」

「えっ、もう？ 僕全然進んでない」

「今日はもう構いませんよ。後で書庫から適当に何冊か持って来て貰えますか？」

「それは、いいけど…傷が痛むの？」

「いいえ」

「お茶でも…僕淹れようか」

「それも結構です」

本を閉じると、ラヴィは椅子から立ち上がってベッドに両手をつき、前のめりにサリエリを見据える。

「僕何か出来る事ある？ サリエリ」

「そうですね……お散歩でも、して来て下さい」

「散歩って、そうじゃなくて…」

本の上に乗せた花びらに視線を移して、サリエリがふっと笑う。

「じゃ、その花の名前を調べて聞かせてくれますか」

「サリエリ」

まるで子供扱いにラヴィの頭をぽんぽんと叩いて、長い髪に触れる。

「君の不器用は私の所為でしょうか。リボンが縦になってます、直しますから後ろ向いて下さい」

言われるままにベッドに腰を下ろして、また外の景色に目をやる。そよ風が、やんわりと木々の枝を揺らし、目映い光りがキラキラと輝く。

「出来ましたよ。ラヴィくんいつてらっしゃい」

「うん…あのね、あの花摘んでよかったら貰ってくるねっ」

扉を開けて、閉じる寸前に顔を覗かせて手を振り、そっと扉を閉める。

半円を描く緩やかな階段を下りる途中、大きなカゴを抱えたクレアが見え、弾んだ声で名前を呼ぶ。

「クレアっ」

「ラヴィ、お勉強はもういいの？」

「うんっ。ねっ、そのカゴ…オレンジ？」

残りの階段を一気に下りると、カゴに手を掛けながら覗き込んでラヴィが抱える。

「ありがと。収穫し過ぎちゃって…ラヴィはオレンジのタルト好き？」

「大好きっ」

「じゃ、沢山使って作るね。今からだったら丁度お茶の時間には間に合うかな」

「…ねっクリア、僕お願いがあるんだけど…」

「ラヴィ、それはちょっと分厚いかなあ…」

「しっ、失敗っ！？」

「大丈夫っ、ナイフ貸して…出来上がりをね、イメージしながら作ると美味しく作れるのよ」

「なるほど…クリア凄いよっ、オレンジをこんなに薄く切れるなんてっ」

「そ、そんな凄いことは無いと思うよ？ えっと…じゃラヴィはその小麦粉をふるいにかけてくれる？」

「うんっ、イメージだねっイメージ！…何か手まで震えるなあ、緊張する」

「頑張つて…そつとね」

ふるいを手に奮闘する姿が可笑しくてクレアが苦笑する。

一緒にお菓子を作りたいなんて言い出したのには驚いたが、本人はいたって本気な様で、レースがピラピラと付いたエプロンを躊躇い無く付けて腕まくりに意気込んでいた。

「何か、お料理つて錬金術みたいだよ。分量とか工程とか」

「そうね…レシピを並べただけで料理が出来上がらないか…錬金術の起源はそこからって話もあるくらいだし」

「へえ……今度は完璧つ、どう？　クレア」

「うんっ　！　ラヴィ、お料理楽しい？」

「楽しいよっ、でもクレアと一緒にだからかな」

屈託無い顔で笑い掛けるラヴィに彼女の方が赤面する。

「…卵、割ってくれる？」

「任せてっ、卵は結構得意……わあっつ、潰れちゃった」

「くすっ……私もね、今日はずっともより楽しいわ」

「何か言った？　卵、中身は何とか無事でしたー」

「うんっ、じゃあそれを溶いてね」

「サリエリの所為じゃなくて僕が不器用なんだよ、術を使うより難しいや」

擦った揉んだしているラヴィの横で、クレアが手際よくオレンジの沢山入ったクリームを作り上げた頃、何とか生地が焼き上がり仕上げに入る。

「忘れてた、ミントを摘んで来なきゃ」

「それ僕がつ、何かドジばかりで全然役に立ってなかったし」

「そんなことないよっ、本当に…でも、だったら一緒に、ね？」

彼のエプロンのレースをそっと掴むクレアの指を、包む様に手を重ねて繋ぎ合わせる。

「うん」

微笑む表情が急に大人びていて、彼女は「ズルイよ」と心の中で声にした。

n e x t

## 蒼翼の欠片

中庭はたくさんの木々や草花で彩られて、優しい香りが時折風にそよいで渡る。

柔らかい陽射しを浴び、その中で一際に咲き誇る花の、落ちた一輪を拾い上げてラヴィが訊ねた。

「ねえクレア、この白い花の名前何て言うの？」

「シエリル…今が一番の見頃ね」

「シエリルかあ、小さな花がいっぱい散ると雪みたい」

窓から見る景色とはまた違って、見上げると青い空に溶け込む花弁が風に揺れ、はらりと散る様子が儂くも美しい。

「本当ね……花言葉は永久の誓い、真実の愛…あれ？ 島にはいっぱい咲いてるのに」

「ああ、えつと僕生まれてすぐエルトフェニアに来たから、アースカルドのことは全然知らないんだ」

「生まれてすぐ…て、ラヴィ」

「精霊の祝福を受けて間も無く。両親も居るらしいんだけど逢った事なくて…あつ、でも別に淋しいとかそんなのは…っ、サリエリが側に居てくれるし、だから……」

「うん…そっかあ、尚更にラヴィはサリエリさんが大好きなのね」

「どちらかと言うとお母さん…？　みたいな、サリエリって」

「お父さんじゃないんだ」

「うん。すっごい世話焼きで心配性だから」

「ふふっ、きつと今頃はクシャミしてるわね…丁度いいかも。その彼に頼まれてただけ、でも私からも…聞いてくれる？」

「なに？」

「腕の傷、治しておくようにって」

「あ……うん」

「ここに座って。私に治させて？」

「い…っいいよっ、後で自分でやるから」

何だか気恥ずかしくて、腕を後ろに回すラヴィにクレアが笑った。

「聞いていた通りね、ラヴィくんはあれで中々の頑固者だから強引にやって下さいって」

「うう」

「私がサリエリさんに叱られちゃうんだけどな？」

俯いて、クレアの前にしゃがみ込むと申し訳なさそうに腕を出す。

「……お願い、します」

「はい。癒しは私のおはこなのよ」

包帯を解くクレアの指先からゆっくりと視線を上げ、長い睫毛が瞳に被さる彼女の美しい容貌に見蕩れていたが、ふと思いつ。

「精霊は支配していないの？」

「癒しはね、魔力の方がいいみたい。私はシルフを一体だけ」

「そうなん…なっ？ クレアっつ！？」

彼女の唇がそつと傷口に触れる。あたたくて柔らかいその感触に間違いなく耳まで真っ赤だろう、こんな癒しを受けたことは今までだつて、多分これからだつて絶対に無い。

心臓の音が彼女に聞こえはしないかと、そう考えると更にドキドキが増した様で恥ずかしくて目を閉じるが、何だか勿体無い気がしてじんわりと瞼を開いて彼女に見入る。

言葉にならないくらい綺麗で、まるで彼女自身が癒しの精霊と見紛う程だつた。

「……クレア」

「ん？ 治つたよ、全然痛くなかつたでしょ」

「その…いつも、こんな風に？」

「え…えつと…今日はえつと、つい…ラヴィが」

頬を染め恥らう仕草に、まだ彼女に触れられたままの腕をゆっくりと持ち上げて、細い首筋に指先を伸ばした。

「僕だけ、特別？」

小さく頷くクリアに、好き以外には何も浮かばなくて、愛しさが、感情が込み上げる。

「キス、していい？」

何も答えず、瞳を閉じる彼女に引き寄せられる様に顔を近付ける。甘いお菓子と、花の香りにふんわりと包み込まれる様な、そこはそんな優しい在り処。

『バウッ！！』

(……ば、う……?)

『ワンッワンッ』

「…へ？ わあああつつつ！！」

突如として大きな白い物体が横殴りに飛び掛りラヴィに覆い被さる。

「なにになにつつ！？…犬っ？デ、デカっ…重いよーつつ」

「キャンディっ」

「きゃんでい…名前？こらっ、重いしっタイミング悪いっお前」

恨めしの目で見ると、名前に不似合いな黒い大きな鼻がラヴィの口許に押し付ける。

「いやーっつ！　！　ナンで鼻っ　！　？　違っ、絶対違っしっつ」

「ラヴィ大丈夫　？　キャンディ、重いから飛び掛っちゃダメって言ってるでしょっ」

「ここで飼ってるのっ　？　…っ、しょっぱい味が」

「うん…気に入られちゃったね。キャンディ女の子だし」

「メスでこんなに大きいの…キャンディお座りしてっ」

「あ、凄い。言う事きいた」

いつもは命令を聞かなさそうなクリアの口振りから多分そうなのだろう。寝そべったままのラヴィの傍らにきちんとお座りしている姿からは想像出来ないが。

「好き…みたい、ラヴィのこと」

起き上がって、改めて頭など撫でてやる。黒いまん丸の両目もつとやれ、と言っている様だった。

「…僕も、嫌いじゃないと思うよ。時と場所を選んでくれたら…っつて、無理か」

未遂に終わり、ガツクリ肩を落とすラヴィの頬をペロリと舐めるキヤンデイが、何だかしてやったり顔に見えるのは僕だけ？ と吐息した。

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

……ふ。

そんな簡単にチューさせてやらないっ（笑）

まずっ、好きってちゃんと言えーっっ。そっからだ。

……すみません、恋愛話は特別苦手です。

## 蒼翼の欠片

君はね。

私が育て上げた大切な二つと無い作品。

真綿で首を絞めると言う言葉がある様に、緩慢でありながらも確実に進む時と同じ、少しずつ君を殺していくそれは快楽を貪るよりも欣快とするところ。

だから、誰よりも君を愛しているし、我命よりも宝器に値する。

白磁の玉肌と深翠の眼睛

忘れることはない、聞き継ぐそれは人に在らざるモノの姿を映す。

いま

「君は、幸福？」

寢息に耳を傾けて微笑んだ。

こんな時間に眠気を催すなんて、ここはそれ程に心地良い場所だと分かる。

「美味しそうですよ、本当に」

クッションのきいた長椅子に横たわる彼の睫毛にかかる前髪を掻き分けて、足許にそつと腰掛ける。

オレンジのタルトと白い花が活けられたテーブルに目をやり、もう一度みせる笑みは艶めかしくありながら、何かを隠見としていて異様に捉える。

「君の何かを知らないと言ったら、印しの箇所だけだね。訊いたら…話すのかな？ ラヴィくんは」

返答の無い問い掛けに、満足して足を組み頬杖をつく。

「ご馳走はとっておかないとね」

カーテンを揺らす風が青々とした若葉の匂いを運ぶ。

君が血を受け継ぎ生を享けたのもこの季節。

美しい緑と碧い海に囲まれたあの島で、許多の精霊から祝福と加護を当たり前に享有した。

「それがどんなに素晴らしいことか、君は知らなくて当然か」

あれを福音だと存じたのは如何ばかりの人であったか。

「でもね、もうすぐですよ」

君は思い知るだろう、幸福も絶望も。

リボンを解き、髪をすくい上げる。はらはらと指から落ちる毛筋に目を細める。

「その日が来たら、どんな表情で私を見るのでしょうか…ラヴィ」

「…ん…サリエリ…」

「あらら。起しちゃいましたね」

目元を擦ってのそのそと上体を起すと首を振る。

「うんん…僕寝ちゃってたんだ。今何時かなあ、外はもう暗いね」

「……時間なんて、気にしなくていいんですよ。今はね」

ラヴィの乱れた襟元を正しながら、サリエリはたわやかに微笑む。

「あっ、その花ねっシエリルって言うんだって」

「そうですか」

「タルトも…食べてね。お砂糖控え目にして貰ったから」

「ええ。後で頂きますよ」

「サリエリ…」

「何でしょう」

「僕…何処か変？ 何でずっと笑ってるの？」

髪を指で梳かしながら、ゴソゴソとラヴィが座りなおす。

「それは、君が可愛いからです」

「え」

「とっつても。」

ニッコリと更に笑みを重ねて、サリエリは目をまん丸にして対処に

困った顔のラヴィを愉しむ。

「もっ、もっっ　！　からかわないでよねっ」

「私は至極真面目ですよ？」

みるみる顔を真っ赤にするラヴィが可笑しくて、ついに声に出して笑った。

「サリエリの意地悪っ」

顔を正面に戻し、膨れ面のまま身体を斜めに倒してサリエリの肩に頭をくっ付ける。

「……傷、痛くないの？」

「ええ、大分よくなりましたよ」

「サリエリ見せてくれないから……僕だって一応医師の資格持つてんのに」

「その一応、ってところが引っ掛かるので」

「……まあ。それは……そうかも、だけど」

「言い返さないんですか？　珍しい」

眼鏡を外して、額にかかる髪を掻き上げる。

「ラヴィ君に診て貰うなんて恐れ多いです」

「サリエリは口も達者だよ」

持て余す様に両足をパタパタと上下させてラヴィが笑う。

「あの、さ…サリエリはいつも僕とアモネアジールの為に尽くしてくれてるけど、他に…誰か、大切な人とか物ってないの？」

「無いですねえ」

「ホントに？ …好きな…その、人とか」

「そもそも私、女性には興味ありませんから」

「ふうーん…？ ええっ！？」

落ち着きなく動かしていた足を一段とバタつかせてから、預けていた身体を起してサリエリを凝視する。

「ラヴィくん。引っ掛かった」

「サリエリっ！ もうっ」

「私の事は前置きなんでしょ？ …そうですか。恋しちゃいましたかラヴィ君」

口をパクパクさせてから、面映いとばかりに視線を逸らして赤面する。

「ラヴィくん、好き？ …クレアさんのこと」

石の様に固まっていたが、ややあってコクリと頷く。

「それは、おめでとう」

好きっただけで何でおめでとうなんだ、と返してやりたかったが恥ずかしくて面を上げられない。

「おめでとう……ラヴィくん」

だから、どんな表情でサリエリがそう言ったのか、知るところではない。

君はね、  
私の大切な作品。全ては思いのままに育て上げた、二つとない君だから。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「……増えてる」

中庭に出るなり、足許にじゃれ付く白いふわふわが二つ。何故だか好かれているらしい、しゃがんで同時に撫でてやる。

ネイス卿の屋敷に滞在して一週間。

その一日一日があつという間に過ぎてしまつ様に感じるくらい、ここでの時間は一時でも無駄にしたいくらい大切に思える。

「ちっこいなあ…でも顔がキャンディとそっくりってことは」

クンクンと鳴く子犬を微笑ましく見ていると、後ろからクレアの声がして振り返った。

「ラヴィここに居たの」

「クレア、この子犬ってキャンディの？」

「ええ。先月産まれたの、可愛いでしょ」

「うんっ、名前は？」

「名前はね、まだ付いてないの」

隣に並んで座ると、クレアが一匹を抱き上げる。

「名無しか。あ、クレア何か僕に？」

「そうそうっ、ネイスさんの奥さんが帰ってらっしゃるのっ」

「奥さん…確かマリイさん」

「うんっ、あのね…赤ちゃんと一緒になんだよっ」

嬉しそうに微笑むクレアにつられて、ラヴィも笑顔で話しかける。

「そっかあ、出産でアースカルドに戻ってたんだ。じゃ、僕も赤ちやんに会えるかな」

「もちろんよっ、マリイも混血なんだけど、もしかしたら祝福貰えるかもって島にね」

「精霊のキスね…クレアは聞いている？ 自分がどんなふうに祝福受けたか」

「うん、翼有にとっては盛事なものね。ラヴィは何体から貰ったの？」

「僕は…えっと、あのっクレアは？」

「私は三体…ふふっ、結構凄いでしょ」

「う、うんっ…あのねクレア」

「ラヴィいいの。ごめんね、話したくないなら訊かないから」

彼女なりに気を使ったのだろう。笑顔のまま、人差し指を口許に優

しい口調で語る。

「クレア」

「私も…話せないこと、あるから。ラヴィはアモネアジールからの賓客、言えない事があるの分かるから。だから…ね」

「違うんだっ、そうじゃなくて…クレアあの、ね」

子犬で顔を半分隠す様に、ラヴィがぼそぼそと続けた。

「僕、グリモワールなんです」

そう言うと、必ず数秒の間が存在する。例に漏れず、クレアも大きく目を見開いてラヴィを凝視した。

「クレア、えっと…」

だから、本当は口にするのが嫌で、いつも苦い思いが残る。

「ラヴィ、ほ…ホントに」

言わなければ、あのまま黙っておけば良かったと、分かっている後悔を繰り返す。

殊更に嫌われたくない彼女の、曇るだろう表情が怖くて視線を外した。

「……うん」

「す、」

(…す？)

「素晴らしいわっ！　貴方がっ、ラヴィがグリモワールなんて夢みたいっ！　！」

「わあっっ…っ……クレアっ」

不意を付かれた上に彼女らしからぬ大胆さで飛び付かれ、びっくりして尻餅を付き仰け反る。

「奇跡を見ているみたいっ、ラヴィが…ラヴィ素敵っ」

手放して喜ぶクレアに、今度はラヴィが目を丸くしていたが、やがてそれは微笑みに変わる。

「何て言うか…初めてです、グリモワールって話して素敵とか言われたの」

それだけじゃない。彼女には一驚を喫することばかりで、ラヴィは心急ぎ高く打つ鼓動を隠すので精一杯だった。

「ラヴィ…だってグリモワールは私たち翼有の至宝じゃないっ。そっかあ、それでアモネアジュールに」

瞳を輝かせて、まるで自分のことのように歓喜する彼女が眩くて目を細める。

「数多の精霊が貴方に祈りを。　祝福は一晩中続くんでしょっ

？　想像しただけでドキドキしちゃう」

どうしてこんなにも笑顔が眩しく見えるのだろう。

好きが、止まらない。  
止められない。

「ラヴィ、貴方を尊敬します」

「クレア……」

「その力が、素晴らしいことばかりでは無い事も……貴方にしか解り得ない刻苦があることも」

他の誰でも無く、目睫の間に彼女が居ることを幸いに想う。

「それでも、今ここに居る貴方が……貴方がラヴィで良かった」

心からの希求。

「それは、僕も同じ……」

たとえ刹那でも、

「君がクレアで」

続かない、途絶えた道であったとしても。

「目の前に居る君がクレアで良かった」

「……ラヴィ……」

今頃になって彼に詰め寄り過ぎていたことに気付いて、頬を染め身を引こうとした彼女の手に触れる。

「待つて」

この気持ちを伝えずにはいられない。

ただ、ありのままに……。

「好きです。クレア」

君を想う。

「クレアが好き……」

その言葉を口にした瞬間、満ち足りた心が熱く昂る。

溢れ出すのは愛おしさ。

どうしようもない感情の顕れ。

欲張りなくらい、君が欲しいと思った。

n e x t

## 蒼翼の欠片

貴方に初めて逢ったとき、慕わしさを胸襟が締め付けられた。

私の中で翳りを落とし、滲み出す悲しみを払拭し墮ちる光りの様に、薄曇りはじかれる。

触れる瞬間、くれる笑顔と言葉、どうしてこんなにも温かいの？

風光る

強ければ強いほど、影はその色を濃くすることを、

貴方を、その全部を、私がそれを理解したとき、失ってしまっただけは望み。

貴方への贖罪に、私はすべてを受け入れる。

どうにもならない。引き返せない、心が千切れてしまっても、

憎まれても。

ほら、

また風が渡る。

白い花が揺れて、恥らう

光りが差す。

何度も口付けを交わして、貴方の身体に寄せた頬が熱い。

「すき」

ここはこんなに、温かい。

貴方の瞳に映る私に、満ち足りたこの時を止めてしまいたかった。

「ずっと…時間、止まればいいのに」

「ふふ、今私も同じこと考えてた」

「うん…」

「ラヴィ」

「ん？」

「私ね、アースカルド大公の娘なの」

「……なんだろう。なんとなく、そんな気がしてた」

「そう？ この国では明かしちゃいけないって言われてるのに、ラヴィには意味なかったね」

「でも、秘密…話してくれて僕は嬉しいけど」

白い肌に指を滑らせて、両手にすっぽりと収まる彼女の顔に近付ける。

「じゃあ、お姫様にキスしても？」

「……もっつ。受けて立つわ、ラヴィ・クラフィスト」

粧して微笑むクレアに笑みを返す。

「果敢だね、貰っちゃうよ…全部」

任せ委ねることの喜びを、全身で感じる。

ただ、こうして心の思うままに、彼のことだけを見ていればいい今が幸福。

人を好きになる、心の至福。

「僕、クレアの匂いが好きなんだ。あまくて甘美…最初逢った時、ドキドキしちゃた」

「お菓子、みたい」

「ぴったりだよ、それ。しかも美味」

「……そんな顔して、ラヴィって案外言うのね」

「クレアが言わせるんだ」

恥じらいをごまかす様にラヴィに縋り付く。

「私だって、負けなくらい好きよ…ラヴィ」

この気持ちなら、負けないわ。

ああ、本当に。

「時間が止まればいいのに、ね」

愛おしさが募る。

切なさが強くなる。

だから、未来は口にしない。

ゆっくりと、訪れる足音に耳を塞いで。

今だけを感じていたいから。

n e x t

## 蒼翼の欠片

淡い光で包む月と、  
空に満ちる星たちが降り注ぐ。

ピロードの星月夜を全景に臨む屹然としたそこに、精霊は降り立ち  
祝福を捧げる。

それは素晴らしい光景なのだ、興奮気味に母になったばかりの女性  
性が語った。

「今宵は新月で印は見れないけれど、  
翼有種であることを誉  
れに。本当に素敵だったわ」

生まれてひと月のみどり児を愛おしむ眼差しは慈愛に溢れ、母性は  
彼女に護る強さを授ける。

「クレア様、娘を抱いてやって下さいませ」

「宜しいのですかっ…どうしよう、緊張しちゃっっ」

「クレア様に抱いて頂けるなんて、娘は果報者です…ね、あなた」

隣で目尻が下がったままのネイスが何度も頷く。

「宜しければ…ラヴィ様にも娘を抱いて頂きたい」

クレアと顔を見合わせて、ラヴィも緊張がうつったのか意味も無く  
姿勢を正したりしてみる。

「柔らかい…あ、目を開いた」

「僕達と同じ翠の瞳なんですね、なんだろう…何か嬉しいな」

クレアに抱っこされる赤ちゃんのぷくぷくとした小さな手に触れて、微笑むラヴィに母親のマリイが笑みを漏らした。

「ラヴィ様とクレア様、そうしてらっしゃるとご夫婦の様ですよ」

「え…ごっ…ごっ…夫婦、ですか」

再び顔を合わせて、同じ様に赤面する二人にネイスもまた口許を緩ませて何度も頷いている。

「ラ、ラヴィっ…そっとね」

「うんっ」

「本当に娘は幸せ者ですっ、クレア様だけでなくラヴィ様にまで抱いて頂けるなんて」

「ネイスさん大袈裟な…僕達の方こそ嬉しいのに」

「そうですね…叔父様、マリイ、家族が増えたお祝いに何かプレゼントさせて下さいね」

「でっ、でしたらっ…なあマリイ？」

「ええ、是非お二人から頂きたい物がございます」

夫婦揃ってラヴィとクレアに詰め寄る。

「な、なんでしょう」

「申し上げ難いのですが…これも娘の為っ、無礼を承知でお願い致します」

「いえ、僕達に出来ることでしたらなんなりと仰って下さい」

一層迫り寄るネイスが、ゴクリと咽喉を鳴らす。

「その、名を。娘に名前を頂戴出来ますでしょうか？」

僅かに間を置いて、ラヴィが口を開く。

「び、びっくりしたあ、ネイスさん緊迫した顔で言うんだもん」

「私も少し…でも、いいんでしょうか私達が名親で」

「恐悦至極に存じますっ」

まだ腕に抱いたままの赤子を愛でながら、ラヴィは思惟を巡らす。

「……君の、名前」

「ラヴィ、あのね…私」

「クレア…うんっ、僕も多分同じ」

三度顔を見合わせて、お互いに笑顔で声を揃える。

「 シェリル ! 」

息までぴったりの二人に、ネイスもマリイも目を丸くしていたが、  
たった今決まった娘の名に大喜びする。

「シェリル…白い花の季節に生を受けた彼女にぴったりだ。ラヴィ  
様クレア様、素晴らしい名を心から感謝致します」

「可愛かったね、赤ちゃん…じゃないシェリル。ふふ…私達名付  
け親になっちゃったね」

「うん。幸せいっぱい…今日は最高の一日だった」

シェリルが咲き匂う中庭に面したテラスに立ち、そっとクレアの髪  
に触れる。

「月の無い夜は星が綺麗ね」

「うん…」

「ラヴィったら、見てないでしょ空」

「クレアのがいい…クレアを見ていたい」

引き寄せる肩、手を回して彼女を抱き締める。

「……ラヴィ、知ってる？ 翼有は自殺出来ないんだって」

「物騒な話。どーしたの？ 急に」

微かに首を振りながら、ラヴィが訊ね返す。

「ごめんなさい、印の話で思い出しちゃって…あのね、永い時を生きるかわりに、その生を自ら絶つことは出来ないんだって」

「何か、代償みたいに聞こえる」

「 そうなのかも。でもね、だからこそずっと幸せでいる努力をするの」

「それは、とても難しいね」

「 途方も無いこと…だよね」

ぎゅっと、ラヴィの背に添う指に力を込め、クレアが胸元に埋もれる。

「クレア…僕、」

「ラヴィ」

閉ざす様に彼の口を塞ぐ彼女の唇が触れる。真意が掴めない、そう思ったのは一瞬で彼自身気付けないふりをしていただけだと、ゆっくりと瞼を伏せる。

「好きよ、ラヴィ。嘘はつかないって…今だけは」

切なくて、ただ強く抱き返すことしか出来ない。

「クレア」

例え、空言だとしても偽りは無いその言葉を、

「……うん」

無理矢理に、呑み込んだ。

n e x t

## 蒼翼の欠片

その日、夜更けに使者が訪れた。

それは、必ずやってくる 終わりを告げる来訪者。

時は止まりはしない。

静かに、やがて地平線に横たわる旭日が強く光りを放つ。

「ラヴィくん、宜しいですか？」

「ふあふいふえふい…んー」

「…入りますよ」

歩み寄り、ラヴィの背後に立って腰を屈める。

「リボンは嘸まない。何言ってるか分かりません」

鏡に映る彼に向かって言うと、サリエリが銜えたりボンを抜き取った。

「結って差し上げますよ」

櫛も通さないまま束ねるつもりだったのか、寝癖の付いた髪に指でなぞる。

「サリエリ、何か話？」

「ええ…夜中に特使が着きまして、明後日エクトニア王がアモネアジールにご入館されます」

俯き、鏡に映らない彼の表情がいと簡単に想像出来た。

「戻らねばなりません」

「……そつ、か」

「ラヴィくん……」

背中を丸め、膝を抱える彼の肩に触れる。

「……サリエリ……いいよ、話続けて」

「恐らくは諮問機関であるアモネアジールに譲歩を求めに……いえ、実質的な合議制の統治機関としての権限を与えてやる……と、つまり王制を打倒される前に手を打つつもりなのでしょう」

「戦況…厳しいの？」

「そう言う訳でもない様です。ただ体制に逆らう者が多く、戦に乗じてあれこれ画策する者が増え、敵だけでなく味方からも命を狙われる現状に、内幕だけでも鎮静化に持って行きたいんでしょうね」

「国家の意思決定機関に……って、然程変わりない。こっちの最上部だって王なんだし」

「そつでしようか」

綺麗にまとまったラヴィの髪に、サリエリはもう一度指を滑らせる。

「こちらには、貴方が居るのですよ」

「……言い過ぎ」

「謙遜し過ぎです。王はきっと、貴方に機嫌とってくるでしょうね」

「それ…気味悪い」

「中々の問題発言ですが、お馬鹿ですなえラヴィくん」

馬鹿と言われて、ようやく面を上げる。鏡越しのサリエリが悠々たる面持ちで微笑んでいた。

「利用されるつもりで利用しなさい。この戦争に異議を唱えることも、アモネアジールの規律を変えることも絵空事ではないのですよ」

「サリエリ…本気？」

「私はいつだって真面目ですよ？ やるんです、ラヴィくんの想う国の在り方…出来ますよ、大切な人たちや愛する者の為ならばね」

「……意外。お前がそんなこと言うなんて、もっと現実主義なんだと思ってた」

訝しげに見るラヴィに、方膝を付きそつと手を取り目を合わせる。

「私はね、君の為だったら何でもしますよ？ 喜ぶ顔をたくさん見たいからね」

「努力は…無駄じゃない？」

「幸せになる努力に、無駄なことなどありますか？」

それはとても難しいことだと、昨夜彼女を前に口にした。例え少しでも、人々が幸せを感じられる。その努力に無意味なことなど

「無い、よね」

眩きにも似たその声に、サリエリが手の甲に口付けた。

「何時なりともただ貴方の側に付き従います。精進されませ、ラヴイ・クラフィスト」

n e x t

## 蒼翼の欠片

訪れる終わり。

声にならなかつた想いを、

僕は君に告げる。

永らえることに、初めて感謝した。

僕達は、どんなに離れていても時を同じくする者。  
人とは違う未来を望み、求められるのだと。

本当にそう思つたんだ。

陽射しに透ける髪から、ほのかに甘い香りがした。

深く記憶に刻み、忘れることはないだろうと、ぼんやり考える。

「ラヴィ」

彼女は昨日と同じ、柔らかい眼差しで名を呼ぶ。

「片方だけリボン？」

白い二匹の子犬が、擦り寄ってクンクンと鼻を利かせる。

「…うん、この子ね今日貰われるの」

首に結んだ青いリボンを形よく結び直してから、クレアが頭を撫で

た。

「離れ離れになっちゃうのか」

「淋しいだろうけどね…雄と雌を一緒には飼えないから」

「どうして…あ」

訳に気付いて、ラヴィが口を嚙む。

「仕方、ないよね…」

「それで名前が無かったんだ。

お前たちも別れちゃうんだね」

「ラヴィ」

二匹ともを抱き上げて、埋もれる様に頭を垂れる。見えない横顔にクレアが呼び掛けた。

「明日…朝早く、ここを発ちます」

「……ラヴィ」

もう一度、名前を呼んだ。

「…そう」

小さく頷く彼に、クレアは肩が触れるくらいの距離に身体を近付ける。

「顔が見れないわ…ラヴィ、私を見て？」

そっと彼の襟元に触れ、後れ毛を掻き上げる指先を手にとって、ラヴィは面を上げる。

「…くすぐつたいよ、クレア」

「ごめん、でも瞳に私が映ってる」

息遣いですらも聞こえそうな距離に、こんなに近くにお互いを感じられるのに。

君が、

貴方が遠くなる。

「どれくらい時間が必要か分からないけど…でも僕頑張るからっ、頑張っつていつか…」

翠緑の両眼に納める相互を愛おしむ。

「いつか、クレアを迎えに行つていい？」

抱き締めたのは彼女の方だった。

か細い腕がしがみつく様に彼を抱きとめる。

「はい…いつまでも待つてます、ラヴィ」

「約束するよ。クレア…君を愛してる」

言霊に、震える唇を重ねる。

大切な君を想えば、どんな困難も運命ですらも抗える。

言葉は感懐を反復し絶大な力になることを、君の存在がそれを教えてくれた。

だから、

どんなに離れていても、心は一つなのだ。

僕達はそれを知る。

人を愛する幸せは　　。

「　　もう一つ、知っていますか　　？　ラヴィくん」

偶さかでない、詭計の成り行きを双眸に認めて嗤う。

「恋は、盲目」

理性を欠くものであることを。

「宣言です、ラヴィ」

長いゲームの、王手を君にのたまう。

チェックシート。

n  
e  
x  
t

蒼翼の欠片（後書き）

>おまけ<

「師匠、クレイド・グレイって便利ですね」

「何が」

「さっき、クレイドが教えてくれたんですっ、剣から炎が出るんだって」

「だから？」

「便利じゃないですかー、ほらっ見てて下さいよ」

「…キャベツ？」

「ちよっと刃が大きいのが難点ですが、スパツと切れるしオマケに

……」

「キャベツ切って…っかつ、キャベツなんぞ切るなっ」

「簡単に炒め物が出るんですよっ^^ ……はいっ、食べてみて？」

「……………お前。」

「いやあ、料理のレパートリーが増えちゃったな」

「どーせなら、肉も入れろやっ！」

《……………いや。突っ込みどころが違うし》 クレイド・グレイ。

読んで下さってる方、いつもありがとうございますっ^^ ^^  
感想など一言でも頂けるともの凄く喜びます（笑）



## 蒼翼の欠片

東雲の頃、ほのかに明るいしじまに知らせる合図が扉を軽く叩いた。

「お迎えがご到着されました」

「はい、今行きます」

サイドテーブルに飲みかけのグラスを置いて立ち上がる。

「僕、変じゃない？身だしなみちゃんとしてないとサリエリが煩いんだ」

シャツにウェストコートを着用しながらクレアに話し掛ける。

「タイが少し歪んでる、私が…あ、ボタンの一番下は外すのが正式よラヴィ」

彼に上着を手渡すと、結び目に指を伸ばした。

「リボンもいいけど、ネクタイは大人っぽくて素敵ね」

「うーん、よく分かんないけど…この距離はいいよね、クレア」

おでこに軽いキスして、頬を両手で包み込んだ。

「顔上げて？」

暁の終わり、東の空が漸として白み出す。

再会の契り、最後の口付けを交わして、言葉の変わりに微笑み合わせる。

「一睡もしてないけど、大丈夫？」

「平気。クレアこそ、少し休んでね」

「ラヴィ…無理はしないでね、私……」

「クレア、心配いらないよ　　ありがとう、行くね」

「うん、お見送りさせて…ラヴィ」

緩やかなカーブを描く階段、下りたそこにサリエリが待ち構えていた。

「参りましたようか、ラヴィくん」

「待って、ネイスさんにご挨拶が　　え。」

正面に見える玄関の脇、背を預けて立つ見知った姿を認めて、ラヴィは三秒程固まった。

「な、なんでっ　　!？」

「露骨に嫌な顔すんな。馬鹿弟子」

「経緯は不明ですが、寄こした迎えが何故かあの方で……ですね、馬車は別にしましょう。と言うか、彼は御者の横で」

「阿呆かつ！　メガネっ、俺様はとんぼ返りでケツが腫れそうなんだ」

「知りませんよ」

「何だとーっ、くたばり損ないがっ」

「貴方に言われたくないですね。そのセリフだけは」

「まっ、まあっ…そのっ、サリエリも師匠も喧嘩はやめましょ？」

「うっさいっ！　わざわざ迎えに来てやったんだ。礼を言え」

ずんずんと歩み寄るクレイドがサリエリを睨みながら言う。何て朝っぱらからテンションの高い人なんだと思いつつも、怖いので言うとおりにする。

「あ、ありがとっございます…師匠」

「気持ちが悪もって…ん？　後ろのご婦人は？」

「えっ」

咄嗟に両腕を後ろ手に回して、クレアを真後ろに立たせる。

「あん？　何で隠す、馬鹿弟子」

「っ、っい…？　条件反射、みたいなの。はははっ」

「へえ？」

ぞんざいにラヴィを押しやると、彼女の姿にクレイドがニヤリと笑う。

「噛み付かないで下さいよっ！？ 師匠っ」

「阿呆か。犬扱いしよって……こりやまた麗しい、お前には勿体無いな」

「初めまして、クレア・シンシアリーと申します」

「コイツの師をしております、クレイド・ラガーフェルド　ク  
レイド、と」

「師匠行きましようっ、ねっ？ 急がないと、ほらっ」

チラリとラヴィを一瞥して、鬱陶しいサリエリの視線に無視を決め込む。

「まあいいだろう。話はゆっくり聞けるワケだし？　なあ馬鹿弟子よ」

車中は針のむしろだろう。若干肩を落とし気味で、玄関に向かって歩き出すラヴィにクレアが声を掛ける。

「素敵な先生ね、クレイドさん」

「そう？　はあ。……僕、ネイス卿にご挨拶して来ます」

「ああ、屋敷の主なら、さっきから表で待ってるぞ」

「ええーっ、それ早く言っして下さいよっっ」

慌てて外に駆け出すラヴィを見ながら、クレイドが呟く様に話す。

「ここは相当居心地が良かったとみえる……礼を言います、クレア嬢」

「いえ、私の方こそ…本当に幸せな時間でした」

「また逢える。とか、ほざいてました？ アイツは」

「……はい」

「だったら待つてて損は無い。為遂げるでしょう、ラヴィなら」

まるで自分のことのように不敵な笑みを見せるクレイドに、クレアが確りと頷いた。

「ネイスさんっ、本当に本当にお世話になりました。なんのお礼も出来なくて心苦しいです」

「お前なあ、曲り形にも最高審議官がそんなに低姿勢じゃ逆にしんどいわっ！ とっとな乗れっ」

「分かってますよっ、先に乗っけて下さい」

「……たく、急げつつたのお前だろーが」

ぶつぶつ言いながら馬車に乗り込んで、前に座るサリエリに即座に大きな溜息を漏らした。

「クレアっ」

彼女の両手を取って、ラヴィが引き寄せる様に頬を寄せ、耳元に囁く。

「ラヴィ…？」

「真正なるままに。憶えていて、この名を」

「……………え」

「クレア、僕の真名に誓います。必ず…だから待っていて」

するりと解ける手。走り出す彼の最後に見せた表情も、見開いた彼女の両目は何も映し出されなかった。

「……………ラ、ヴィ……………う、そ」

その名に、身を震わせ血の気が失せる。  
失意と喪失に 闇に、狩られる。

アーシェラルド・ラヴィ・クラフィスト・ファルース  その  
名を継げる者は。

「嫌っ…嘘でしょっっ！？…ラヴェイっ…ラヴェイ  
「！」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

エクトフェニア王との引見から数ヶ月。

接見はその後も度々行われ、君主制から合議制に制度を改めることとなった。

それまで諮問機関に止まっていたアムネアジルに於ける元老院を、正式に統治機関として設置し、政策と運営についての審議が幾度となく行われる。

忍び寄る影に気付くことも無く。

僕はその元老院の中枢で奔走に明け暮れる日々を送っていた。

「戻りましたあ…カジカ、僕もう寝ちゃっていい？」

「お疲れ様でした。はいっ、ベッドのご用意出来てますよ……でもっ、」

自室のドアを開けるなり、のそのそと寝室へ向かうラヴィの袖をカジカが引っ張った。

「寝衣に着替えて下さいませっ、ラヴィ様」

「えー、もういいじゃん…僕今日はもうクタクタで」

「だーめーですっ、サリエリ様に叱られますよっ」

「……バレないよお。カジカさえ黙っててくれれば、サリエリはこ

の部屋に入れないもん」

一日働き詰め、空いた時間は勉強で、ようやく解放されてベッドに辿り着いたラヴィを、カジカのブラウンレッドの瞳がびしっと捉える。

「でしたらっ、カジカが着替えて差し上げますっ」

「う……。……いいです、自分で着替えます」

溜息を漏らしながらボタンに手をかける彼の後ろに回って、カジカは束ねた髪のリボンを解く。

「……何だが、この所護衛も警備も嚴重ですよね」

「ああ、うん……その何てゆーか色々あって、スウエズールの謀議が知れてここを狙ってるとか。……って、簡単には侵入出来ないけど念の為にね」

「ラヴィ様が狙われてるんですか？」

「うん」

あっさり頷くラヴィの髪をぎゅーっと引っ張った。

「カジカ首がっ……大丈夫だよ、過去に侵入した人居ないもん。陥落なんて有り得ない」

「ラヴィ様……政治の事は分かりませんし、口出しなんておこがましいですけど、どうか無理はなさらないで下さい」

「　　ありがとう。カジカ」

「ほつ本当にですよつ、ラヴィ様すぐ無茶するから」

「信用ないなあ…。僕だつてあれこれ手は打ってるよ、癒しの精霊も支配したし、結界だつて三賢者に輪をかけて強堅にしてあるから」  
寝間着に袖を通しながら答えるラヴィを、それでもまだ心配そうにカジカが見詰める。

「……カジカ。物語の続き、読んであげようか」

「いいですつ、今日はお疲れなのに…お休み下さい」

「ちょっと眠気がおさまったから。また眠くなるまで付き合つて？」

「ラヴィ様…」

ここは唯一優しい時間が流れる場所。

入室は彼女のみ許され、サリエリですら入ることは禁じられていた。十歳だったカジカがここへ来て三年、毎夜のほんの一時を二人で過ごす。

「しかも小腹が空いてきた。何かある？」

「サリエリ様が多分ラヴィ様がそう言うだろうつて、お菓子を預かってますよ」

「流石サリエリ。カジカ、僕お茶も飲みたーいっ」

「ご用意しますね」

まだ幼かった彼女をどう扱えばいいのか戸惑いもしたが、子供ながら懸命に尽くしてくれるカジカに少しずつ打ち解け、お互いに笑顔がふえ様々な話をするまでになっていた。

だから彼女がここに居る本当の理由を、僕はそれに蓋をした。

「ラヴィ様お待たせ……」

暖かいこの時間を、僕が壊したくなかったから。

「優しいね、ラヴィ様は」

ベッドに座ったまま眠りに落ちる彼に微笑みかけて、そっと横たわらせる。

静かな初更。

迫る時機に、今は穏やかに月の光が照り入る。

それから何日かが過ぎ、影は僕を捕まえる。

その前夜、不意に思いがけない言葉を僕は耳にすることになる。

「……冗談でしょ？」

どう考えたって信じられるものではなかった。

いつもの様に僕の慌てふためく姿を見たいが為に、騙しているんだ  
と思った。

殊に師匠であれば、だ。

けれど。

「冗談ではありませんよ。ですから、ラヴィくん……」

あるはずのない取り合わせ。クレイドとサリエリが並んでこちらを  
見ている。

「ラヴィ、お前何とか時間作って護衛も撒いて来い」

「撒くと大事になります、なので私が何とか致します」

「嘘……じゃないの？」

口にしながら、僕は胸がじわじわと熱くなるのを感じる。

「お前なあつ、誰が好き好んでこのメガネと一緒にになって嘘付かな  
きゃならんっ？」

「そうですね。ラヴィくんの為でなければこんな野暮な方と密事を  
進めることなど」

すでに一触即発そうなこの二人に苦笑するが、心ここに有らず。  
落ち着かなくて逸る気持ちでいっぱいになっていた。

「中夜に一度警備交替があります。クレイド殿が上手くやってくれるそうなので、その時にお戻り下さい」

「場所はいつも使ってるあの小屋だ。すまんが聖域には入れんからな、あそこで待たせてある。お前は術行使して何が何でもバレンよーにしる…いいな？」

「はい…師匠、サリエリありがとうございます」

それはまさに降って湧いた話。  
僕は再び。

「クレアに、逢えるんだ…っ」

彼女と再会することになった。

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

はしょって、はしょって書き過ぎかな？

ダラダラと過去の話が続くのも…と書いてただけ。

どー考えても可笑しいっ…って時はご遠慮なくバシバシ言って下さいませ。

## 蒼翼の欠片

女神に愛された子羊は、犯した禁忌の重さにその身を震わせる。  
やがて無知は愚かさを露呈する。

君は誰よりも神に愛され、誰よりも神に嫌われる存在でなければならぬ。

このゲームの最後の一振り、その采配を振るうのは、  
誰でも無く、キミ。

彷徨える子羊は、森を駆け抜けてただ光りの向こうを目指す。  
その光りの先に待つモノを。

「  
クレア」

彼女の名を呼んだきり、言葉を見付けられずただ手を伸ばして、触れる皮膚の感触にもどかしさを払う様に強く抱き締めた。

「クレア…っ」

数ヶ月振りに触れる君。

何一つ変わらない、彼女の身体…優しい匂い。

「クレアどうして……でも、君は僕の腕の中に……ここにいる」  
懐におさまる彼女が幻ではないことを確認する様に、もう一度ぎゅ  
っと両腕に力を込める。

「……ラ、ヴィ」

声が、  
震える。

「心配したよ……クレアがここに来れること、容易い事じゃない」  
心が悲鳴を上げる。

「あれからアースカルドに戻ったんでしょ……中立国の姫君がエルト  
フェニアの王都に入るなんて無茶は……でも、」

ワタシを、止めて。

「本当はそんなことっ、君に逢えるまでは……うん、今だって僕は  
ただ嬉しくて……駄目なのに、嬉しくて」

貴方の声が耳朶に届く。

口にははいけないその言葉を、

「ラヴィ……っ」

助けて トメラレナイ。

「貴方に、逢いたかった」

光りの先は、広がる闇でも。

「僕だって、ずっと……ずっと逢いたかったよ……クレア」

口付けをせがむ様に顔を擡げる。頬に触れる彼のあたたかい手に、あだめく指先を絡めた。

途中、漏れる息遣いに身体の芯が熱くなる。こんなにも、私が女であることを知らされる。

「キスだけじゃ足りない……クレアの全部に触れたい……クレアが、欲しい」

解っていたこと。

貴方にもう一度逢いたいと、決めた時から。

言葉の代わりに口付けで返す。

ああ、

どづか。

「……ラヴ、イ」

神よどうか、

罰は私だけにお与え下さい。

「愛してる…大好きよ、ラヴィ」

身勝手なこの罪を、私は後悔しない。

「クレアの印し…ここにあっただ」

ランタンの灯火と月明かりが僅かに窓から差し込む。  
潤しい素肌を知るには充分な灯り。

「お屋敷に居た時は、丁度朔と重なっていて見えなかったから」

白い肌膚、膨らみのすぐ下に指先を滑らせてそれをなぞる。

「ラヴィ、そこは…んんっ」

「なに？」

「そこはとても敏感だって言いたかっただけ。もう遅いけど」

「なるほど…じゃ、もっと」

「や…っ、もうっ…ラヴィったら 仕返ししちゃうからっ」

「出来ないよー、だってクレアは僕の…ふ、ふぎや…っ」

彼女の唇が印しに触り、背を撓らせて固まる彼にクレアが微笑む。

「知ってるわ。貴方の印しが何処か」

そっと、彼の背中に頬を寄せて目を閉じる。

「ど、どーして分かったの？ さっき見えた、のかな」

「…そう、ね」

「クレア」

胸元に回した細い腕をラヴィが握り締める。

「何年かかっても、迎えに行くから」

「ラヴィ…」

今、彼にこの表情が見られないことを幸いに思う。

「って、お姫様を貰うのって、それも大変だよね…ど、どうしよう  
！？ 何処の馬の骨とも知れない奴にはやらんっ！ とか、  
言われるよね絶対」

「今からそんな心配？ ふふ、でも大丈夫よ…貴方は馬の骨じゃないから」

伝う涙を、見られずに済むことを。

「貴方は充分過ぎる程立派よ。アムネアジールの最高審議官にして  
アイスカルドの誇りであるグリモワール…ラヴィ、そんな人他には  
居ないわ」

その地には、継承者に語り継がれる女神の哀話がある。  
神たちを欺き、人を騙った 哀れな女神の逸話。

ディアーナ

貴方なら、貴方になら

私が、解るだろうか。

その愛の意味を。

n e x t

## 蒼翼の欠片

翌夜　　。

その日は、午後から雨が降り始めた。

鬱陶しいくらいどんよりとして、低くて重い灰色の空。

やがて強さを増す降雨

短い夏の一夜。

その日を決して忘れることはない、暗夜に目覚めた陰惨たる所業を。

「ラヴィさまあ、明日の正装どちらにします？」

「んー？ …カジカ、ナニそのぴらぴらした服はっ」

「だって、宮殿での調印と式典。これでもかかってくらい着飾って参りましょっ」

「本気で着るの、ソレ」

「着ますよーっ、絶対似合いますよどちらもっ。それにピラピラした服は着慣れてらっしやるじゃないですかーっ」

女装のことを指しているのか。悲しいかな何も言えず苦笑して、彼女に任せる趣意を伝える。

「お茶にします？ ラヴィ様」

「うん、そーだね」

書冊を閉じて窓の向こうに視線を移す。

今夜は、明日の準備で早く部屋に戻された。当事者はあれこれと配置やその下準備には邪魔ならしい。

「雨…かあ」

独り言を漏らして、昨夜のこの時間を思い返す。

彼女と過ごした、たまさかの逢瀬を。

「……ふーん。絵になりますねえ、アンニユイなラヴィ様。いいですねえ、どんな顔してても綺麗な人は」

何だかよく分からないが若干言葉が刺刺しい。

「ごめんっ、ぼーっとしてて」

「構いませんよ。だってラヴィ様のお部屋ですから…お菓子、今日も頂いたのでどうぞ」

「カジカも、一緒に食べよ？」

「私はっ……はい。…紅茶、お砂糖どうされます？」

「今日はいいよ。えっと、カジカは三杯？ だっけ。甘党だよなえ…」

山盛りで三杯を紅茶に入れて、ラヴィが掻き混ぜる。

「てんこ盛り、でしたね」

「えっ、甘過ぎっ？ 淹れ直すよ」

「いいです…いただきます」

「う、うん…」

鋭い女の第六感など、知る由も無く。上目遣いでカジカを窺いつつ、お菓子に手を伸ばした。

「可愛い焼き菓子ですね、美味しいですか？」

ぱくり、と一口含んだら、ぱっちり目が合ったので頷いてみせると、カジカも一つ手に取った。

「……っ？？」

「ラヴィ様ったら、ノド詰ま」

「カジカっ！ 駄目っ食べちゃ…っ」

手に持つお菓子をラヴィが払い除け、咳き込んで吐き出す。

「え…ラヴィ様っ！？」

ガシャンと、テーブルに淹れたばかりのティーカップが音を立てて倒れ、零れたお茶が床を濡らした。

「ま、ずった…これ毒 ……っ」

滑る様に椅子から落ち、蹲って胸元を掴む。

「ラヴィ様っ ……！」

即効性の毒。口にしたのは極僅かなのに、息苦しさで身体が思う様に動かず這い蹲って浅い呼吸を繰り返す。

「だ…だれ、か…ラヴィ様っ薬師呼んで……」

小刻みに震える両足で、何とか踵を返してカジカが扉へと向かう。

「ま…まっ、て」

違う。

何か、もっと。嫌な予感に限った的中する。

「カジ、カ…出ちゃだ、め…」

ぎりりと奥歯を噛み締めて、鈍重な身体に無理矢理意思を伝達しようとして、指を曲げ有り丈で握り締める。

魔力を解放し、結界でここを切り離したいと、頭の中では何度もそれを繰り返しているのに。

「カ…ジカ…っ」

もう遅い。影はずっと前から、その四肢を縛り上げていたのだから。

彼女のつんざく様な悲鳴も、深い闇の前に吞まれる。  
その正体を、僕はただ理解していなかったただけだ。

「 やあ。」

眼前に立つお前を見ても、僕は本当の何一つも受け入れなかった。  
だってこれは 意外外、でしょ。

「 こんばんは、ラヴィくん」

止まない夜雨。

僕と彼との、最後の一幕が始まる。

「 君は食べなかったのか、カジカさん」

後ろ手に両腕を掴んだカジカを引き摺る様にして歩き、側のテープ  
ルに目をやる。

「 ラヴィくんより先に食べちゃったら困るなあって思ってたので、  
まあ成功ですか」

カジカに視線を移して、いとも容易く術で捕縛した後、ナフキンを

手に胸元をゴシゴシと拭き出す。  
手や顔、衣服にも付着したのは警護していた兵士らの、多量な返り血。

「染みになっちゃいましたね。…仕様がなにか」

ポイと投げ捨てて、方膝を立ててそこへしゃがむ。

「　　苦しい？」

その時僕は、どんな表情で彼を見ていたのだろう。

「……ですよねえ。呼吸器系と神経系にいつちやう毒ですから、例え微量の摂取でも放っておけば死にます」

笑って、あっさり言って退ける。

「ああ、翼有種はどうなんでしょう？　ですが……寝室は向こうですね」

返事を聞くでもなく、独り言の様に話しながら床に伏せるラヴィの胸倉を掴み取る。

「立って、ラヴィくん。まだ少しは動けるでしょ」

「……サリ…エ、リ」

強引に立たせて、肩げると奥の寝室へと足を運ぶ。

「意外と質素なんですな、君の部屋…ラヴィくんの趣味かな」

扉を開け、素気無くベッドにラヴィを横たえ、馬乗りになって顔を近付ける。

「毒は術を使わせない為です。話しも聞いて頂かないといけませんし、ですから除いて差し上げますよ」

「…なん、で…」

「こんなモノで、死んで貰っては困る」

「サリ、エ　　んん…っ」

髪を鷲掴んで擡げると、彼の唇が触れる。口移しで無理無体に解毒剤を口に含ませた。

「　　呑み込んで。」

咽喉の奥に、異物が入った様な違和感がした。

金槌で殴られてるみたいなの頭痛で思考が定まらない。だから本当は何も考えたくないのに。

「そつちはね、即効とはいきませんがじきに呼吸も楽になりますよ。頭痛も治まる」

なら、この吐き気もそうだと言うのか。毒の所為でこんなにも気持ちが悪いのか。

どうしてこんなに、胸が締め付けられる痛みがあるというの？

「とは言え、相手は君。これは保険ね」

「 …… あああっ …… !! 」

片腕を頭上に持ち上げて、手の平にナイフを突き立ててベッドに繋ぎ止める。

「今なら安直な術でも、効くでしょ」

「どっ、して…どっして…っ」

「そうですね、君にはそれを訊く権利がある。ですがその前に…知りたくないですか？ 君自身の秘密。話してあげるから、いい子にね…ラヴィくん」

n e x t

## 蒼翼の欠片

何処か遠くから、自分を見ている様な感じがした。

受け止められない現実を目の当たりにした時、これが間違いである理由を必死になって探し出そうとする。

人は理に適わない場面に遭遇したら、否定を無理にでも拵える。

でも、

そんなものは何の意味も持たない　と。

再び踏み躪られたときに、やっとようやくそれを認めるのかも知れない。

これは、事実だと。

ぱちん、と軽く頬を叩かれて、引き戻された今に。表情の無い顔に  
もう一度指が触れた。

「……聞こえてるの？　ラヴィくん」

息の掛かる距離に、サリエリがいた。

居るはずの無いこの場所で、お前は僕の髪を撫でる。

「ちゃんと聞いて？」

「……っ、やめ……っ」

首筋に爪を立て、加減を知らない猫の様に搔く。

「アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファルース……この名の持つ意味、君は知りもしないで使ってますよね」

柔らかな口調とは別に、冷淡な目が僕を捉える。

「アーシエラルドはね、過ぎ去った古い時代に使われていたアースカルドの古称。まだ神々が天と地を行き来していた頃のことです」

咽喉元に手を当てたまま話す彼の言葉を、ただ聞いているだけで精一杯だった。

「君がどうしてその名を持つ者なのか。それはね、……ラヴィくんが始祖の血を最も濃く受け継いだ血統の人間だからなんだよ」

抗う理由すら、見つけられない。

「分かる？ そのことにね、スウエズールの王が気付いちゃった……って、つい最近私が教えて差し上げたんですがね」

冷笑を浮かべる彼に、無表情の僕はどう映っているのだろう。

僕は、どんな風にお前を見ればいい？

「君を殺せと言われました。同時にこれはスウエズール国に対してのアースカルドの裏切り、そりゃ怒りますよね……エルトフェニアに始祖の子の、しかもグリモワールを隠し持っているなんて不公平」

「……で、も……それは僕の……」

「君の意志じゃない。ですがそんなことは通用しないんですよ、分かるでしょう？　かくて矛先は中立を謳うアースカルドにも向けられた　君に見合うモノを差し出せと、ね」

「ま…待って、そんな話僕は…っ」

「水面下での密議です。この国は何も知らない、当然王の耳にも入っていない」

不意に、頸部を掴まえていた手をサリエリが外し、またがっていた身体を戻して座りなおす。

「アースカルド大公は、苦渋の末要求を呑んだ。　君の命を護ることを条件に」

「なん、で…僕なんか…」

「恐らく何に換えてもあの人は君を護るよ　アースガルド大公国、アージェラルド・グラデュース・リンネは、君の父親だから」

「……なに、を」

「まだ分からない？　君はアースカルドの王子なんだよ、正真正銘のね。それとも頭が混乱してるだけ？」

ただ見下ろすサリエリの顔を、瞬きすら出来ずに凝視した。

込み上げるこれが、慟哭なのか、嫌悪なのか。

ぎゅっと、胸が潰されてしまった様な息苦しさを覚えて、不規則に肩で呼吸する。

「 そう、ここから本当に楽しい話の始まり」

苦痛の叫喚、  
本当の、悪夢。

「 大公が差し出したモノ、訊きたいでしょ？」

声に、ならない。

「 凄いよね、流石は一国の姫君だ。スウエズールに売られたことすら話さなかったんだから、君の姉上は」

「 や、」

「 ですが、考えてみれば中々のお人です。だってそうでしょう？  
弟だと知って、昨夜は君に抱かれたのですよね？ クレアさん」

「 やめ、ろ…っ」

「 それって、畜生ですよねえ」

「 サリエリ　っ　！！」

手に刺さったままのナイフを、強引にベッドから引き抜いて上体を起こし、彼の胸倉を掴み取った。

「 あらあら。感情に任せてとは言え、やっぱり侮れないね」

「黙れっ…！！」

「ごめんね、黙らない」

不似合いな程に微笑んで、サリエリが手からナイフを引き抜いた。

「お前は…っ…サリエリ、なん…でっ」

掴む手が震える。溢れ出す血が、彼の衣服を重ねて紅に染めた。

「それはね。これが私と君の関係だからですよ……ラヴィくん」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

き、気付いてました？？？

姉ちゃんだって気付いてた人ーっ！！

（ああ、何かみんなが「はーいっ！」って言うてる気がするっ）

サリエリのいぢめは、まだまだ続く（笑）

## 蒼翼の欠片

私という人間は、君の為にあるのだからね。

彼はよくそう言って、微笑みかけた。

生も

死も、

全ては僕の為。

ねえ、サリエリ。

今でも分らないんだ。

お前が本当に望むモノを。

心から強く願う

切望が。

ねえ、

お前は僕に、本当はどうして欲しかったの？

「君の素性はね、本当に極僅かの者だけしか知り得ない。クレアさんも君から真名を聞くまでは全く気付いていませんでしたし」

伝う血が、肘のところでしたたり落ちる血液の粒になって、ポタポタとシーツに染みを作る。

貫かれた手が火の様に熱く、ドクドクと脈を打つ痛みが思考の邪魔

をする。

それでも、この手は彼を掴むことをやめない。

「知られてはいけない事情があつたんです、生まれたばかりの君を手放してまでも」

「……い、い　　そんな話はどうだつていいつ、全部知つてたお前が……つ……サリエリ、何故僕とクレアをつ………なんでだよ　　！  
？」

朱に染まる手を、サリエリが握る。抑制する様に抑え付けた。

「　　せつかち。ちゃんと話してあげますよ　　？」

「僕の話なんか……つ、聞き糺したいのはそんなことじゃないつ、いつか……ら………いつからお前は　　」

視界が揺らぎ、じつとりと汗がにじみ出る。そのまま前のめりになつた身体を、彼の肩が支える。

「いきり立つのは分かりますが、まだ毒も抜けていないのに」

「づる……さい………質問に、答え………答えてよ………つサリエリ」

「君の質問　　？　　では一つだけ。いつからと言われたら、君が生まれるずっと前からです」

「……は………つ、なんだよ………それ、そんなの答えに………もう………お前のせいで、吐きぞ」

「構いませんよ。どうせ血まみれだし、ラヴィくんの吐物なら引き受けますよ」

「ばっか、じゃない…そういうところが、気持ち悪いんだ…お前は」  
堅く目を閉じ、唇を噛み締める。委ねた肩の感触は、何も変わりはないのに。

「あのを、話とか…そんなの」

だけでもう、次に瞼を開いたら、全てが変わってしまったことを認めよう。

「もうお終い」

それでも。  
きつとどうしたって、

「終わる？」

僕はお前を  
心からは憎めはしないから。

だから。

「殺していいよ」

「ぶっ。」

噴出して肩を上下させてまで笑い出すサリエリに、頭が真っ白にな

った。

「な…っ、なんで笑うのっ！？」

覚悟を決めた者の前で、あまりにも失礼千万な振る舞いに羞恥すら覚えさせられるとは。

「可笑しくて。以外にないでしょう？ ラヴィくん、そんなにあっさり殺したんじゃ、私の今までが水の泡なんですけど」

「お前の事情まで…何で殺される僕が汲まなきゃなんないんだ、よ…っ！？」

「それはそうですが、いつも我儘をきいて差し上げてたんですから、一度くらい私のもきいて貰えないでしょうか」

「…頭が、おかしくなりそう」

「恐らく、もう麻痺してますよ。死に際の人間の口調とは思えませんが、ダメージは相当なんでしょうね。ただ足りないのは、死への恐怖だけ」

どうしてそんなに楽しそうに、述べられるのだろうこの人は。じんわりと、また汗が額からにじむ。

頭痛も吐き気も治まらないし、熱が上がって悪寒はひどいし、息だつてし辛いし、激痛がする手の血だつて止まらない。

お前だつて、先程のまま冷たい目で僕を見ているのに。

「死ぬのは、怖くない。ですが私を知ることの恐怖は如何ば

かり、か？」

「……サリ、エ……っ」

「手に取る程に。理解出来るんです、君の苦しみがね　だから  
もっと、苦しんで貰わないと」

「はは……は、僕はさっぱりだよ……なんにも解んないや」

「ですから話してあげると言っているのに。君ときたら、随分と話  
が逸れて　やれやれ、また逸れるのか」

サリエリの溜息の理由がそこに立ち、真っ直ぐな眼差しを向けて、  
両手には短刀をしっかりと握り締めていた。

「ただの娘だと思っていましたよ。どうやって束縛を？」

「　ラヴィ様を放して」

「……カ、ジカ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「私はこの方に仕える者、子供だと思つて見縊らないでっ」

「成程。ラヴィくんの足を引っ張らないよう、影ながら努力していたと」

「サリエリ様：貴方は、人鬼よ」

彼女の赤茶色の瞳は、揺るぎなくサリエリをきつく見据える。

「一応私も、持っているんですよ？ ナイフ」

カジカの感情を逆撫でする様に、楽しげに血の付いたナイフを見せ付ける。

「だからなに？ 刺し違えても、ラヴィ様はお守りするわ」

「へえ。では、刺せばいい」

「ばか…っ、カジカっ駄目だ、逃げて」

「嫌です」

「カジカ駄目だ」

こんなことで、関係の無い彼女までも命を捨てる必要はない。ここへ行き着くまでに、どれだけの人をサリエリは手に掛けたか。思う様に動かない身体を、血に塗れたその手を伸ばした。

「い…っ」

「魔力は使わせないと言ったでしょう」

なおざりに掴み取る手を、強く締め付ける。

「サリエ、リ…カジカ…は…お願いだから」

「そんな顔でお願いするなんて、ラヴィくんらしくない」

莞然として、失望を告げる彼に打ち拉ぐ心が、どうしようもない諦めを自分に然らしめる。

「やめて…やめてよ…っ、これ以上ラヴィ様を苦しめないでっ…  
!…!」

「カ、ジ…カ……や…め」

ココロが、潰される。

それでもまだ、見ていなければいけないの？

視界の中の彼女が、本当にこんな時だけははっきりと映し出される。それはすぐさま目前で、突き刺した剣を手にしたまま震えていた。

「流石は落ちぶれても貴族の娘。……ですがカジカさん、」

「…あ…あ」

「人を刺す時は、ちゃんと最後まで見て刺さないと。とても致命傷などと与えられませんよ」

素面のままそう言つと、自分の腕に刺さつた短剣をカジカの両手を解いて抜き取る。

「実演してあげるから、見てなさい」

「サ、リエ……」

「君たちつて、痛みに対する観念はよく似ているみたいだからね」

「な、に……を……ラヴィさま……っ」

「自分の所為で誰かが傷付くことが、その身を裂くより辛い……そうでしょう？ ラヴィくん」

長い髪を引つ掴んで距離を取る、抵抗も出来ない彼の身体の右胸に、短剣を突き立てた。

「いやああああっつっ……！！！」

擘く様な悲鳴の前で、再び抱き寄せ剣を抜く。それからラヴィの背を、ぼんぼんとあやす様に叩いた。

「は……あ……っ、」

一刹那、詰まる呼吸。吐く息が咽せ返り、血と一緒に吐き出す。胸郭を掴む様に押さえ込み、横溢する鮮血が崩れる身体から広がる。

「カジカさん、君は特別に最後まで見ていくといい。でもまた何かしたら、ラヴィくん今度は左の肺が潰れちゃうからね」

「…ラ……ヴィ、さ…ラヴィさま…っ」

べったりと、その場にへたり込む彼女を見ながら、乱した髪に触れるサリエリの手を、どうしても払い除けたくて気力でやってのける。

「お、ま…え……ほん、と…サイア…ク」

何か、彼女に言ってあげたいけれど、言葉がみつからない。

声はしわがれて、上手く出せない。これで大丈夫なんて、嘘っぽすぎる。

「なに、話…したい、か……言つとくけ、ど…もうなに聞いたつ…て、お前の期待する反応とか…ないか、ら」

「中々にイレギュラーで、私も少し戸惑ってます。初めてですよラヴィくん、君が」

「ざけ、んな…っ」

「本当ですよ？　こんなこと想定外、自分の行動に歯止めがきかないなんて……君はやっぱり彼女に似過ぎなんです」

また髪に指を伸ばす。つくづくこの髪が好きならしいと、今になってそんなどうでもいいことを考えた。

「その瞳も髪の色も……勿体無い。折角毎日綺麗にしていたのに、

血がべつとりと付いてしまった」

「……あ……そ」

「ラヴィくん……そろそろこの事態に気付き、人がやって来るでしょう。本当に何も聞かなくていいの？」

「死ぬの、に……聞いたっ、てしょーが……あの、さ」

「はい」

「お願い、ひとつ……クリアには、なににも……僕の死も、伝えない……で何も話さなければ、少なくとも彼女は僕が弟だと知らないままでいると思つて貰える。せめて、少しでも彼女がこれ以上傷付かない様に。」

「ラヴィくん　残念ですが、それは聞き届けられない。君には死んでも苦しんで貰いたいから」

「　　は……」

これまでで、一番の大打撃だよ、サリエリ。

お前は、なんて。

「真つ暗。……よっぽど、僕が　　なん、で……そこま、で憎いんだ、か」

涙が、零れた。

止め処も無く溢れる、温かい透明の液体。

「いいえ。私は貴方が好きですよ……この世界で一番君を愛しています、何よりも一番に君を……ラヴィくん、」

「もう、やめよ」

その時の、サリエリの表情を見なかったことを。ずっと後になって、僕は後悔した。

n e x t

## 蒼翼の欠片

狂わされたのは、誰？

わたし、あなた……それとも……。

全てはここに存在することから始まる。

ここ、に。あるから

それが始まりで

それが終わり。

「印しの在り処を。その高位と敬意に払い無礼無く弑致します

アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファルス」

「……背中、左の……。それと、今の……語意不明、だし」

「泣いたお顔も好きでしたよ」

「はああ……ほんと、解せないまま……死ねて、納得」

認めてやる。

僕はお前の全部を知ることが、死ぬことより怖いんだって。

「貴方のそれも不明瞭ですが、理解は出来ますよ」

「……だろう、ね……痛っ……最後くらい、やさしく」

だから、出来ることなら、ほんの少し前のお前で終わりたい。

サリエリには嘘だったとしても、

僕には間違いなく

本物だったから。

「私は少し　　いいえ、とても残念です。貴方が掉尾を飾ってくれると……何処かで信じていたのかも知れない」

横たえる身体を伏せて、シャツを破く。血に汚れた白い肌に、印しに指が触れる。

「……ラヴィ、さ……ま」

か細い声で名を口にする彼女に、笑えていたかどうか、それでも精一杯微笑んでみせる。

「カジカ……ごめん、ね……君は……どうか、」

生きて　　。

それ以上はもう、瞼を閉じてしまったから。

君にさせてしまった、辛い思いを……愚痴も聞けないでごめんね。

「　　やはり、腑に落ちません。これが本当に……本当に貴方の選択なのか」

躊躇など彼らしくない。それをまるで示唆した様なタイミングで、部屋の扉を勢いよく叩く音がした。

「私はまた、永い時間を…  
をほざく！？」

いいえ。笑わせるな、今更何

自嘲して独白に薄ら笑いを浮かべる。

開かない扉を、かけた術を解くというより強引に蹴破ろうとしているのか、その音の大きさが今度はサリエリを急かす様にも聞こえる。

振りあげる短剣、終わりの瞬間。

この一振りが、最期を迎えるはずだったのに。

けれども。

時は止まりはしない。

どんなに強く願っても、個々の想いを乗せてそれは平等に流れる。

僕にも、貴方にも 君にも。

「何を。邪魔など…っ！！！」

「……………カ、ジ…………カ」

彼女の指先が、そつと頬に触れ涙のあとを拭う。ブラウンレットの瞳は真っ直ぐに僕を見詰め、ゆっくりと伏せた。

「ラヴィ…さま、あきらめないで…………カジカは、そんな…ラヴィさまは…きら、い」

「…………カジ、カ…カジカ…っ！！！」

眼前に、力を無くした手がずりりと落ちる。目の当たりにしたそれ

を、受け入れられない事実に彼女の名を喚く様に叫んだ。

「どうし…って！！ どうしてっ…カジカっ！！！！」

覆い被さる彼女の身体を引き剥がし、サリエリは邪険に床に突き放すと、倒れ込むカジカの背に刺さる短剣を手にした。

その一瞬間をもって、

「抜くな」

外れてしまったのは自らを縛りつける自製の鎖。

「ラヴィくん　駄目だ、落ち着きなさい」

「…カ、ジカ」

「そんな風に…こんな形でその力を使うことは許さないっ」

何も聞こえない。痛みも感じない。開いた両目にも何も映らない。広がるのはただの真白と空白の記憶。

「それは君の意志ではないっ、奔流にのまれたら…ラヴィくんっ、君だっただけでは…っ」

カントンなんだ。

本当は、使うことよりも、使わないでいることの方がムズカシイ。

「やめるんだっ…　　ディアーナ　！！！！」

だって僕は、  
僕そのものがチカラのカタマリなんだから。

本当に簡単に、  
キエテシマウよ、ミンナミンナ。

「ラヴィっ　！　！　！」

「…え」

抱き締められる感覚。とても力強い、それは確固としたもの。

「馬鹿やろっがっ　！　！　死ぬ気かつ、お前は…っ」

「ぼ、く…っ」

引き戻される、現実。  
定まった焦点に見えた人物に、その人を呟く。

「師…匠」

「黙ってる。　　おいっ誰か、医者とか呪術師とかっ、総動員で  
連れて来いっ」

大勢の兵士が周りを固める様に立っていた。その足許、僅かに見える情景に身を起す。

「動くなっ、出血が多すぎ…っ、聞けっコラっ」

「カジ、カ…カジカを…っ」

「カジカならまだ息がある。術師を今呼んでいる、だからお前は…」

「我の声を、聴き生ぜ サラ…っ、サラっ！！！」

この怪我でまだ精霊が召喚出来るのかと、クレイドは目を瞠るが、やがて顕然として現した癒しの精霊のその姿に、重ねて瞠目した。

《…ラヴィ、酷い…すぐに》

「僕じゃな、い…彼女を…カジカを、はや…く」

《…っ？ ラヴィ…それは、》

「阿呆かつ、カジカにはじきに術師が来る」

「ダメ、だ…他の精霊では、間に…合わな…っ 急いで…っ  
！…！」

《…分かったわ。ラヴィ》

「根性だな、お前。こんな細っこいナリでよくまあ…とにかく、止血するから傷を」

「いい……触られると、痛くて……集中、出来ないか、ら」

「本末転倒だろ。馬鹿が」

騒々しくなる室内、その中で長いとも短いとも言えない沈黙のあと、ラヴィが重い口を開いた。

「サリエリ、は……」

「アイツなら……居ない。生きてるのか、死んでんのかも　お前  
が部屋に大穴開けるからっ、逃げた可能性大だっボケっ」

クレイドの指す方向に、瓦礫の山となった壁と、闇夜に降り頻る雨が見えた。

「すまん。来るのが……気付くのが遅すぎた」

「師、匠は……っ」

「お前の言いたいこと、後でちゃんと聞いてやるから。今はもう喋るな」

「だって、目を閉じたく……ないん、だ……僕は……だ……か……」

「おいつ　！　踏ん張れ、ラヴィっ」

《　ラヴィ　！　？　》

「サ……」

《彼女は大丈夫よ。今から貴方を　　だめよ、ラヴィっ姿が保てない》

その容が失われる様を、薄らいだ意識の中で彼女に重ねて見る。

「あり……と……」

《ラヴィっ》

「精霊っ　！」

ぶっきらぼうに彼女の腕を掴み取って、クレイドは強く握り締める。

「俺は半分が精霊、お前維持出来るか　？」

《不賤ね。でもこの通りじゃない》

完全無欠の美を称える精霊、サラが嫣然としてのたまう。

「なら俺を媒介にコイツを治せ。コレが支配を求め、それに応えたお前になら難くないだろ　？」

《存分に振る舞えて　？》

「分かってるよ、幾らでも持っていけ」

後の事は何一つ覚えていない。  
気が付いたら、そこにはカジカも師匠も、

サリエリも、もう側には誰も居なかった。

瞳を閉じる。

毎夜、眠る度に見る夢は、

これが夢であれば、と

願わずにはいられない事実。

それから、

開いた目に映るのは、変えられない現実。

「 やあっと目が覚めた。ねえ…僕が、分かる？」

お前の言葉を、ちゃんと聞いてあげなかったこと、それは後悔。  
でも僕は、

「 どう？ 鏡、見てるみたいだろ？」

理由なんて本当にどうでも良かったよ。

サリエリ。お前が望んでいるのなら、僕は……。

「気持ち、悪い。」

どんな現実だって、それを受け入れたのに。

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

まだ若干の謎を残して、過去のお話終わりました。  
不出来過ぎの文章で申し訳ないです。

## 蒼翼の欠片

暴虐に、神は盤上の人間を弄ぶ。

我々が創りし下等なる者ども、

その逆鱗に触れたること

その咎、無窮の贖いに等しく。

四、神に愛されし者。

「……気持ち、悪い」

「のっけからソレ？ 普通だったら驚いたりとかするんじゃないの」

「サリ…サリエリは？」

拘束くらいは覚悟していたのに、とりわけて何かをされている様子でもない。

手も足も動く、強いて言うならどうしようもない倦怠感と頭痛がするだけで、俯せた身体をゆっくりと起こして辺りを窺った。

「おい。聞いてんのかっ翼有種」

「……こいつは何処？ サリエリは居ないの？」

廃屋だろうか、随分長く使われていないのが見て取れるくらいに荒れ果てた部屋に、家具が埃をかぶっていた。

「オマエ、ふざけてんのっ？」

「別にふざけてなんか…頭ガンガンする、僕どれくらい眠って

」

折角身体を起したのに、飛び掛られてまた床に逆戻りした。

「…って！！ 頭打ったっ、なにすんだよバカっ」

「こっちのセリフ…ああ、そうか。怖いんだ、直視」

深い、翠の瞳が嗤った。

「べっつに？ 気持ち悪いから見るな触るな近寄るな。」

眉尻を上げ憤り寸前のその顔を、怒ってもあまり迫力が無いのかと、ちよつと残念には思う。

「離れて。シエラ」

そのレプリカは、容姿だけは非の打ち所がない自身の生き写し。

「性格サイテー。なるほど、アノ人生だもんな無理もないか…なあ？  
アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファールス」

中身は、墮天使。

自分と同じ様には笑わないし、同じ様にも泣かないだろう。

「ほんつと、悪趣味。性格だつて、絶対そつちの方が最低だね」

「天使だもん。セオリーじゃん？」

製作者の、サリエリの中の自分が自身を見る。それは言い知れぬ焦燥感でありながら胸中を掻き立てる。

「プライドくない？ 何だろう、もの凄く腹が立つんだけど…」

ピリピリと震撼する空気に窓ガラスが音を立て、家具の上に積もった埃がパラパラと落ちたが、吹き飛ばされたシェラの身体がそれに当たって埃が舞い上がった。

「ケホケホ…っ、いついきなりナニすんだっバカ翼有種っ」

「鬱陶しいから」

「言つとくケドっ…わざわざ覗いたワケじゃないからなっ、オマエが超無防備なのが悪いんじゃないっ」

「前科があるから信用出来ない」

再び起き上がって、外れたボタンをとめようと手を掛けたが、そのまま暫らく動きを止める。

「……誘導したたる、わざと。あんなリアルなの、夢でも…あんなのは…っ何で見せるんだよっ、シエラの阿呆っ！！！」

先程までの無遠慮なトゲトゲしさは何処へやら、何だか涙目で阿呆とか言われてたじろいでしまう。

「オマエずつと寝てるしっ、暇だったんだから…いいじゃんか別に過去ぐらい覗いたって」

「嫌だよっ、嫌に決まってるだろっ」

「っーか、身体ごと複製されたって、そっちの方が問題なんじゃないか？ どっちかってゆーと」

確かにどちらも普通ではない事ではあるが、問題視すべき点のズレに、彼に、シエラは首を傾げる。

「それは…知ってたから。気持ち悪いって言ったじゃん…それ以上でも以下でもないが感想」

「……………変わったヤツ。」

「僕の顔で、そんなヘンな顔しないでよ」

「ヘンな顔って？」

「だから…っ、口を…っ…あああ…っもうっ、イライラするっ頭痛いしっ」

髪を掻き上げて頂垂れる。ついでに大きな溜息もつく。

「熱があるってサリエリが言ってた。そのせいじゃない？」

「ああそうっ…って、サリエリっ、サリエリは何処っ！？」

埃まみれになった服をパンパンとはたいて、シェラが立ち上がりこちらに歩み寄る。

「知りたい？」

上目遣いにシェラを見る。やっぱり気持ち悪いが不思議な感覚。もう一人の自分が、自分ならしないだろう冷笑を浮かべて、見下しているなんて。

「不気味。」

「そればっか。滅多とないシチュエーションなんだから、どうせならもうちょつと諧謔を弄する言葉とか使えない？」

「キャラじゃないもん。サリエリは何処？」

すつと、目前にしゃがんでラヴィの顔をしたシェラがニッコリと笑みを作る。

「ぼく、オマエの顔は好きだよ。顔は、ね」

油断はしていないつもりだったのに、瞬きの早さで胸元をとられて鼻先に引き寄せられる。

「さっきの、お返し。」

(…え)

ちゅっ。

「ん…っ

う…げえええつつっ  
！！！！」

悶絶寸前。まさか自分の顔にキスされるなんて、これ以上はない報復。

「あはははっ。

最っ高に楽しいね、翼有種」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「全っ然楽しくナイ…っ　！　！　！」

ぼかつ、と一発思い切りシエラの顔を殴る。

「　　いつ…痛ってえっ　！　！　殴るかっそこでっ　！　！」

「殴るっ」

それこそキャラじゃなさそうなのにと、手を頬にあんぐりとしてラヴィを見た。

「自分の顔なのに憚るとかない　？　あ、口切れてるし」

「無い」

一言だけ言っつて、後はムスツとしたままボタンを留める。

「……オマエさあ、大概面白いよな。状況とか分かってんの　？」

知らん顔で乱れたシャツを直したりしているラヴィに、溜息を漏らす。

「子供　？　めっちゃめっちゃガキじゃん、ナンだよコイツ」

眉根を寄せて、シエラが空を指でピンツと、ラヴィ目掛けて弾く。それは空圧となって押し迫るが、無表情のままの彼の目前で弾き返された。

「さっすがはお偉い呪術師さん。詠唱もアイテムもいらなんだあ」  
床に開いた穴とラヴィを交互に見て、シエラがわざと面白おかしく言った。

「ふざけないでよ。知ってるくせに」

「まあね。もしかしたら、オマエよりオマエのこと知ってるかも」

「シエラっ、いい加減にしてよっ。サリエリの居場所さっさと教えてっ」

「居所も何も…ココだし。もうすぐ帰ってくるんじゃない？ 買い物から」

「買い…物」

「リンゴ。買いに行ったよ」

何故に買い物。何故にリンゴ。訝しげにシエラをじっと見るが、自分の顔なのに掴み所が今一つ分からない。

「ふーん。」

「ナンだ、その中途半端な返しは」

「にしては汚いよね、ココ。サリエリだったらせめて掃除くらいしてそうなのに」

「オマエが寝てたからだろっ…っーかさ、サリエリサリエリって…  
殺されかけたのにナニ慕ってんの？」

「べ、別に慕ってなんか…」

「動揺してんじゃん」

「してない」

「した」

「してないっ…近いつて、離れてよ…っ…！」

突き放そうとした腕を直様シエラが掴み取る。締め付ける程の強さ  
で持ち上げて、ニンマリと笑みを作った。

「翼有種の話、聞きたくない？ 取り分けてグリモワール  
って言われてる奴のこと…ああ、オマエが」

「…速さだけは認めるよ」

「？」

掴んだ手に、腕に文字が浮かび上がる。

「ナンだよ…これ、術式…？」

「得意なんじゃないの？ 黒魔術だよ。かなりハイスpekだけ  
どね」

「言ってた通りだ」

クスクスと鼻で笑って、シエラが翠の両目を見開いた。

「人間以外には容赦ないからって、サリエリがね。だから喧嘩は禁  
止って　　でも、」

もう片方の手で、鉛灰色した文字の上を翳す様に覆う。

「ボクも、今はグリモワールなんだよね」

即座に跡形もなく消えた文字を、満足気にラヴィに見せ付ける。

「教わらなかった？　殊に天使には注意しろってっ　　！　　！」

「っ…」

ずっしりと、胸に重厚な塊が押し掛かり、そのまま壁に突き飛ばされる。

何て言うか情けない。自分がかけた術をそっくりそのまま返された上に、防御も間髪の差で間に合わず殆どを食らってしまった。

こんなことは初めてで、対処に遅れたなんていい訳、師匠にバレたらどれ程いびられるか。

「げほ…っ、居なくて、助かった…よっっ…　　！　　！」

相殺して術を解く。咳き込みながらシエラを睨み付け、何も食べてなかったので吐かなくて良かったか思ってみたり。

「肋骨いっちゃった？」

「うるさいっ」

「オマエが悪いんじゃない、話全然聞かないから」

「話なんかしたく……」

言い掛けて、ふつりと黙り込む。これまでの経験上、自分は話を聞かない傾向にあって、それで色々ややこしくなったりしていることに、今頃やっと気が付いた。

「いいよっ、聞くよっ」

「……ナンで偉そうなんだ。まあ、いいけどさ」

とりあえず喧嘩は中断と、シェラが側の椅子を引っ張って、ラヴィの前に腰掛けた。

「この力、なんでオマエが使えるのか…教えてやるよ、グリモワール」

「あのさ、翼有種とかグリモワールとかっ、僕はラヴィって名前があるんだけど」

「……はあ。やっぱりガキじゃん」

next



蒼翼の欠片（後書き）

つか、二人ともガキだ（笑）

…で、その頃のサリエリさん。

「店主、そのリングをわけて下さい」

「ヘイツ、お幾つ？」

「十個。」

「毎度おおきにっ」

「…当然、まけて頂けますよね？」

「も、もちろん…っ」（ナンか知らんが怖ええーっつ）

## 蒼翼の欠片

昔時の話だよ。

ひとりの女神が、人間に恋をしたんだ。

そこから、均衡が崩される。

神と人との、埋まらない溝と蟠り。

「まあ、元々さあ無理な話じゃん？ 神と人がむつまじく、なんてさ」

椅子にまたがり背もたれに両腕を乗せて、シエラは当然と言う風に同意を求めた話っぷりで続けた。

「女神の名はディアーナ。兄のセレヌウスが人を愛した彼女に怒り狂っちゃって、あつという間に人の住む地を破壊したんだ。その場所…知ってる？ オマエ」

「…アルトニア」

「アタリ。アルトニアは神々と人間が交流する唯一の地だった。そこをぶっ壊して、天上から最初に降り立つ地アースカルドとアルトニアとの天導回廊もセレヌウス様が壊しちゃったんだ」

「随分と傲慢な神」

ラヴィの言葉に、シエラがクスリと笑う。

「傲慢だよ、神だもん。当たり前じゃん」

人の定義に当て嵌める方が間違っていると言いたいのだろう。確かに、その通りではあるけれど。

「怒りに触れたディアーナ様は石にされちゃった。それがカラク・ラリス」

「そこまでしなくても。って思うけど」

「なんでー？ オマエなら分かり過ぎるんじゃない？ クスクス…賢い頭で考えな」

ワントーン上げて話すシエラに、その理由に、直ぐ様気付いて悔恨する。

「別に不念でもないよ。そんなの天上界じゃ有り触れてるし、恥じることでもない」

「恥じてなんか…っ」

つい意気込んでしまって、これでは思う壺だと唇を噛むが、シエラの後の表情と言葉は、煽動には程遠いものだった。

「人間の常識で過ちだって言うんだったら、オマエたちには否定出来る根拠がある」

珍しく真面目な面持ちで、その瞳を真っ直ぐに向ける。

「翼有種は、女神と人との混血

殊にアーシエラルドを継ぐ

者は、その始祖だから」

「混、血……ええっ！？」

「だから姉弟が交わっても、取り分けて騒ぐ程のことじゃないんじゃない……って、おーいつ聞いてんのかっ？」

如何とも。

横殴りのパンチを食らったような衝撃で、顔面が引きつる。

「おいつ翼有種っ！聞けよっ、まだ続きがあんだからっ」

「混血……まるつきし人間じゃないんだろーなあ……とは、そこはかとなく。ああでも……何で選りにも選って神って……女神って？何ですかそれ……」

「ナンか……聞き捨てならないくらい残念そうだな」

「残念……そんなの超越して怨むよ」

「はあっ！？」

頂垂れてブツブツ独り言を言ってるラヴィの前で、シエラが首を捻る。

「あのさあ……大体そこはかとなくってナニ。長命で魔力にも長ける種族がマンマ人間な訳ないじゃんっ、阿呆か」

「うう……。そう、そうだけどっ、僕は人間でいたかったのっ！」

「変。オマエ」

「うるさいなっ、いいよっ…混血ったって、今じゃ人の方が割合多いはずだしっ」

「あらまはね。でもオマエはちょっと違うだろ……おい？」

両耳を塞いでそっぽ向き、頭をぶんぶん振る。

「……………なんて往生際の悪いヤツ。疲れる」

「いいよもっつ、知らなくっても生きていけるしっ」

「聞けって！！！」

両腕を掴んで、無理矢理両手を耳から引き離す。

「グリモワールって呼ばれてるこの魔力っ　これは神の持つ力だ」

「……………だよねえ…当然の流れでそう来るよねえ。ああ、もう僕頭の中真っ白」

放心状態だったり、ヘラヘラ笑ってみたり、泣きそうな顔をしたり。どれも当て嵌まらない、行き場所も納まりどころもない心境。

「ディアーナ様の力だ。隔世的に持って生まれて来る、それがオマエ…五人目のグリモワールってワケ」

「…何の為…とか、理由とかあるのかな…それ」

「知らない。でもオマエの過去を覗いてて、一つ気になったことがある」

「僕の過去？」

「オマエとサリエリの関係…ついかつ、一番大事な確信部分っ！  
聞かなかっただろ、ボケがっ」

悲しいかな、言い返せない。

「それで…気になるって、その……何で僕を殺すか、だよな？」

「それ以外にナニがあんの」

「はははは。……あの、さ…シエラは、シエラは僕になって本気で  
ディアーナを起こす気なの？」

「は？ 飛ばすなよ話をっ！ ……そうだよっ、ボクを貶めた神  
々を見返してやる　これはゲームなんだっ」

サリエリにしたって、シエラにしても、転がされる自分の身にも  
なって貰いたいと、ラヴィは切に思う。

「オマエは強制参加ね。大体のこと教えてやったんだから、賭けて  
くれるよねえ？」

「だからっ、何でそうなるんだよ」

「賭けて貰うよ？ ふたつ、勝った方が王座と生き残れる資格者になるんだ」

しかも、いずれも一方的。こちらの利なんて全くの皆無。

「ああ、もう…鬱陶しい」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「なら、生きることから早々に離脱したら？」

軽んじて言われる程に重みがあるなんて。いま一つ回転しない頭で、反芻してみる。

「それは出来ないよ……これは精霊が消滅と引き換えにくれた命だから」

ぼんやりとした表情で答えるラヴィに、業を煮やしたのかシエラが再び飛び掛って胸倉を掴み取る。

「ふざけんなよ。じゃあれか？ 助けて貰った命じゃなきや、くれるってこと？」

ただシエラを見詰めて、何も語らないままのラヴィに同じ色の瞳が睨め付ける。

「ボクは咽喉から手がでる程欲しいよっ！？ オマエの命……全部っ、サリエリだって同じだっ」

激昂する彼の風采に感じられるのは、持て余す煩わしき、それだけ。

「……だから……そーゆーの、鬱陶しいんだって」

「馬鹿にするなっ！！」

押し倒し殴り付ける。その痛みは鈍く、厭わしいばかり。

「オマエ…っ、何の為に生きてんだよっ　！　？」

「　は…っ　」

そんなことを訊かれて、ちゃんと理由を答えられる者などいるのだろうか。不明瞭のまま、結局最後までその意味を思い定めることなく終えるのはいけないことなのか。

「分かんないよ…っ、生きる意味も死ぬ意味も、そんなのどうだっていい」

「他人には生きるとか言うくせに　？　厭んでんの、自分に」

「　　そう、かも…ね」

「なん、だよ…っそれはっ　！　！」

驚掴む手が震えるくらい、シエラは強く握ったシャツを持ち上げて、空いた片方の手でもう一度ラヴィを殴り付けた。

「そつだよ…ただ生きて息をして、お腹が空いたら食べて眠くなったら寝る…今みたいに殴られたら痛いし、腹が立つから殴り返す  
生きるって、それでいいじゃない」

「へドが出る、クソ食らえ…っ」

「…何が…何がいけないんだよっ　！　？　大義名分が無いと生きてちゃいけないのっ　？　命を粗末にするなとかっ、僕はどれだけの犠牲の上に生きてるのか…っ、役に立ちたいって思えば思う程、

僕は誰かを傷付けられるんだ……なのに死ぬことすら許されないっ、負けちゃ……負けちゃいけないんだ……っ」

押し払い、上体を曲げ起す。血の味がする口許をシャツの袖で拭い去った。

「死んだ人の分までとか、そんなの……そんなのは全部綺麗ごとなんだ。初めから僕の意思なんて何処にも無い、ただ勝てばいいんだから……簡単だよ、ホント」

「相当病んでんね、脳ミソ。      こんなヤツにボクは……っ、冗談じゃないっ      ！      ！」

ちりりと、帯電するシエラの身体から放たれた電流が空中で火花を散らし、空気を纏う様に燃え盛る。

「死が許されないだって      ？      大丈夫、殺してやるよ      ボクがね」

「ルウ      ！」

宙をきる左手に発現する精霊。 迸る流水、無数の水滴が飛沫して炎にぶつかる。

「面倒臭い、ナンでイチイチ精霊っ      ！      ？」

《主さまっ、ご命令を……っ》

「      氷雪」

主の声を聞き届けるが早く、水の精霊　　リリィ・ルウは大気を震わせて凍て付く冷気を作り出す。

「精霊なんてっ…そんなの直接使えよっ、まどろっこしいヤツ！」  
突き落とす手から擘く空気刃がラヴィに迫る。互角の力、薙ぎ払えずに目前に留めて術を詠み上げて相殺の意志を強固にそれに持たせる。

「だよ、こんな瑣末な術じゃグリモワールが聞いて呆れる」

右手を差し出し、浮き上がる蒼光。六つに尾を引く光芒が中心の次元を摩り替え、暗黒色に澱む。

「どっちも同じ力だっつんなら、ココの勝負だね？　翼有種」

頭を指してシエラが鼻先で笑う。やがて満面にたたえて、魔法円に手を伸ばした。

「　お前、分かってない」

「もう負け惜しみ？　けど執着はいい傾向」

はらはらと、花びらの様に淡雪が舞い落ちる。室内で繰り広げられるには、あまりに異様なありさま。

「言ったくせに…神の力、なら僕達には分不相応　　溺れるな」

「使いこなせないって言いたいの？　折角だけオマエの？　は女神の血肉で出来てんだよ…っ　！　！　！」

引き抜き顕然とする蒼黒色した刃の剣。翳すそれは禍々しく光りを反射して耀く。

「現せ、クレイド・グレイ」

生じる刃風、刃重ねの音がガチガチと鳴る。

「その剣と同じ…っ、この力は諸刃の剣なんだ。自由になんて使えないっ、壊れるよ…シエラっ」

「そんなことあるもんかっ」

「シエラ…っ！！」

「黙れっ！！」

詰める間合い、鬨ぎ合う両者の緊迫したそこに、不意に眦に映る赤い果実。

「その剣、」

ぼん、と片手で軽く宙に飛ばし、それを掴み取る。

「リンゴを切るには、少々大き過ぎます。お二人？」

含み笑い、サリエリが言った。

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

「はい、どうぞ」

室内は異様な空気を醸す。

ただでさえ荒れて埃っぼかった部屋が、床はびしょ濡れで所々が抜けて穴があいてたりもするし、家具類は倒れて破損していたり、壁は焼けて焦げ臭い。

でも、一番の理由は彼　サリエリが目の前にいる事だろう。

見渡して、彼はやれやれ…と、一言だけ言って濡れた床の上に何処から出してきたのか、絨毯を無理矢理敷いてテーブルを置く。

埃を拭い、手際よく手慣れたナイフで熟れたリンゴを切り、それを皿に乗せて差し出す。

「お二人とも、召し上がりなれ？」

「……リンゴなんか、食える雰囲気か？　この状況で」

シエラは立ったまま腕組して、ぶっきらぼうに返す。

「と言うか、何でこのリンゴは……」

「……うさぎさんの形なんだ」

ふつりと、ラヴィが物言う。

「それはね、その方が食べてる姿が可愛いから」

顔が、引きつった。

「育ちのいい子猫がじゃれ合うのは、中々に微笑ましい光景ですが、後片付けが大変です」

言った後ゆつくりと歩み寄る。ラヴィは目だけでそれを追い、サリエリはシエラの前にとまった。

「私の作品が傷だらけです」

ちゃんと見分けが付くのかと、少し感心してしまう。

「シエラくん、ラヴィくんとお話があります。いいですか？」

そう言って、隣室に手を差し伸べるサリエリのその手を見てふと思いきす。再会した日には片腕だったのにと。

「なんでっ、除け者っ？ ヤだよ」

「君の我儘は好きですよ。でも今は私の言うこと…聞いて？」

口許の傷に触れて、その手で襟元を直し歪んだりボンを整える。極めつけ、たわやかな笑みをシエラに向ける。

(…こ、小っ恥ずかしい)

自分はある風になされていたのかと、今更になって汗顔の至りである。

サリエリの見事な懐柔っぷりを改めて見せ付けられて、一応は冷静に、落ち込んだ。

「じゃ、終わったらすぐ呼べよっ」

「はい」

さっきまでの威勢の誇示は何処へやら、部屋を後にするシエラに吐息する。

居心地の悪いここに数秒の沈黙が流れてから、サリエリが静かに椅子を引く。

「君は、座って」

「…いい」

「座りなさい」

差し出す手を払い除けて、俯き加減に視線を足許に置いた。

「……僕に触るな」

「ラヴィくん、自覚してる？ 熱があるんですよ」

「殺せば、よかったのに」

カジカを使って眠らせて。そんな回りくどいことをせず、直接あの夜の続きを。

「それに私が知る限りでは、丸二日何も口にしていない」

「……ああ、そっか…寝てるとこ殺すなんて、お前には物足りない

か。そうだよ、散々いびって弱らせて…それからだもんね」

「そうでした。君は我儘な上、聞き分けも悪い」

がっしりと両肩を掴まれて、強引に膝を折り床に座らされた。

「だったらここで話しましょう。それとリンゴ食べて下さいね、毒は入ってませんから」

「何で僕の話は無視なんだよ…っ」

「君だって少しも私の話を聞かないでしょ　はい」

目の前にリンゴを乗せた皿を突き付けられて、やむを得ずそれを受け取る。

「ラヴィくんの方がヒドイね、顔…それと姿勢も少しおかしい。何処か…胸かお腹…痛むの？」

どうしてそんなことまで分かるんだと、躍起になって背筋を伸ばした。

「何でも無いよっ、お前だって…腕、生えたのか、それ」

「トカゲじゃあるまいし。まあ、私は色々と謎な人物になっているみたいですし、いいですよご想像で」

何だかよく分からないが、楽しそうに笑うサリエリを、充分怪異だという目で見てやった。

「君は、何かが変わりましたか？ ……七年前のあの日から」

唐突なその言葉に、その意味に、即答など出来るものではない。

「私はね、ずっと後悔してます。あの夜、君を手に掛けそびれたことを」

「あっそ。」

「だから今度はね、とどのつまりを虐めてみようかと」

「それ…ディアーナ」

「ええ。目覚めさせて、女神の前で君を殺すって計画です。我ながら今回も冷酷だなと、自画自賛してます」

「それで狂ってないって言うんだから物凄いわ…お前」

「ありがとうございます」

「褒めてないから」

身体の心配をしたかと思えば、笑ってあっさり殺すなんて言うのだから、まともである筈が無い。

けれども、彼の狂気には計り知れない何かがあることは事実だろう。今更ではあるが、サリエリが話そうといていた確信部分を、訊けばまた口を開いてくれるだろうか、ちらりとその表情を窺う。

「ラヴィくん？」

何でニコニコ笑ってるんだ、この男は。

「……………て言うか、本気でシエラにやらせるつもり？ お前のあの実験は…」

「ですねえ、恐らく無理でしょう。若干本物と肌の質感が違う気、致しません？」

「はあっ？ 肌じゃなくて根本的な…って、触るなバカっ！」

どうして、もつとちゃんと抵抗しないのかと、自分に問い掛ける。掴まれた手の感触、彼の胸に埋まる懐かしさを。

「ラヴィくんです……………本当に」

胸が、締め付けられるこれを、感情を頭では払えても…。

身体が彼を覚えている。

「……………サリ…エリ」

心は理解し難いと

痛切にそう思った。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「サリ、エリ……離せ……」

振り切つて、彼の両腕を掴み取る。顔を合わせられなくて、見られたくない表情を下に傾けた。

「七年、ずっと思うことはあるよ。本当は一番……生に執着して、それでいつかお前が僕の前に現れるって」

「それは……生きることへの執着？」

「……分からない。自分がそう思っているのか、そう言われたからなのか」

そつと持ち上げたサリエリの手は、当たり前前のようにラヴィの髪に触れ撫で付ける。

「君も、壊れてしまった？」

「自分で理解しているのは、そうとは言えないよ　だから、お前には理由があるんだろ」

サリエリは何も答えない。

ただ一点を、俯いたままの彼だけを見詰める。

「我儘言つて旅をしてきたんだ。僕の父と言われる人が、死で以つて終わらせた戦の傷跡と、たくさんの人たちに触れ合つて……悲しい

「ことも、僅かな喜びも経験した」

「……どうだった？　それで君は何を思ったの？」

「一生懸命、みんな生きてた。その為に、罪を犯す人もいて……生きることは、何であれその時々の実感を勝ち取るものだって、そう思う」

「君は、どうなの？」

「僕ばかり……お前はどんなだよ、何の為に生きてるんだ……？」  
顔を上げ、先程シエラに訊かれた言葉を、そっくりサリエリに返した。

「私がここに存在する理由は唯一つしかありません」

お前はそれを知っているだろうと、その目が笑みを容作る。

「……実感、ありませんか？」

ただ首を振って、掴んだままの彼の両腕にぎゅっと力をこめる。

「……多分、止まってる……あの日から」

死にたくない所以がみつからない。  
それでも生きてる自分は、本当は誰よりも生を渴望しているのではないか。

「足掻いて……もがいて、お前から生きること勝ち得たら……何か

が変わるのかな」

「私を、殺しますか？ ……それとも」

言いさしたまま黙した彼から、ラヴィはゆっくりと両手を離す。

「サリエリ…僕はそれを口にすることは出来ない……出来ないんだ」

「でも君は選ばなくてはいけない。今ここにきて、もう一度私はそれを問いますよ」

「問いましょう、って…簡単に言うなよ……どんだけ悩んでると思ってるの」

「もう時間…ありませんよ？」

じわり、上目遣いでサリエリを見て、思い切り溜息した。

「お前って、つくづく奇奇怪怪。」

「七年もあったのに、答えを出せない君に問題がありません？」

「…あのねえ…っ、顔みて話したら気持ち揺らぐとか、あんだろっ色々っ」

「私は君が、やっぱり可愛いなど。それと髪を切ったのは有るまじきです」

「…それだけ？」

「それだけ。」

何だろう、この脱力感。

その程度の感懐で、この男は自分を生きる理由だと述べるのか。

「長い髪が好きだつて言うなら、シエラの長いままにしておけば良かったじゃん。何も同じ様に切らなくても」

「君が長いのがいいんです」

「どー違うんだ、それ」

「違いますよ。全然」

もういい、面倒臭くなつて聞かなかったことにしようと、足許のリングを一つ手にかじった。

「ラヴィくん、食事とか睡眠ちゃんと摂ってます？」

懐かしいくらい、説教じみた話し方とお節介好き。

「雨に濡れたくらいで熱出すなんて、日常生活に問題があるとしたら」

「大きなお世話っ」

「……伸びませんよ？身長」

「あ、あのねっサリエリ。これから殺そうかって奴の身長が、伸びようが縮もうがどーだっていいだろっ！馬鹿かお前はっ」

マズイ、もう何か完全にペースを持っていかれてる。軌道修正せねばど、ラヴィイは咳払いなどしてみる。

「訊くけど。」

「はい」

「僕を殺す理由って、なに？」

「ラヴィイくん。出来ればリンゴはフォークで刺して食べて欲しい」

「……………」

落ち着こう。ここは冷静に、さらりとかわすのがベストだと、深呼吸する。

「今更で悪いんだけど、話してくれたらな…と」

「応つけ上がられないくらいには、下手に出てみる。」

「これから死ぬのに聞いたって仕様が無い。言っていましたよね、誰かさん」

「ぐうっ…。ちっ、ちょっと気が変わったかなあ…って、七年もあると考えも変わるし、ね？」

「いい加減ですね。あまりに釣り合いが取れてない」

「ごめん…だから後悔してる。ちゃんと聞いておけばこんなに悩まなくて済んだのかも知れないし」

「…そうでしょうね」

話していれば恐らく彼の答えは、即答で聞けただろう。  
何れとも代わり映えのしない、死の選択を。

「ラヴィくん…」

面を上げた、彼の長い睫毛に美しい翠緑の瞳は目映い程に耀いて。

「教えない」

心が乱れるくらい、その両の目に愛を囁いたことを。

「君にはもう、教えてあげない」

貴方が下す、

その選択を、待っていたいから。

n e x t

## 蒼翼の欠片

生か死か。

生きるか死ぬか。

殺すか、殺されるべきか。

「ここはやっぱり……」

まずは自問自答だろう。

自分は生きたいの？

死んでもいいと、思っているの？

「死は解放、だろうか……」

逃れる事と、どう違うのか。  
失うものの大きさは。

「……思い当たらないなんて。薄っぺらいで片付けるのも悲しいや」  
苦笑して、目を閉じる。

言う定。

「無理だよサリエリ……ナニ言っても、詭弁になっちゃう」

しん、と物音一つしない室内。

目を開いたそこに見えるのは、度外れに喧嘩して更に荒廃させてし

まった部屋の天井。  
二人が居た痕跡。

「僕の、過去……」

あの時、彼が口にしようとした言葉。  
記憶を咀嚼することは、耐え難いけれど。

「サリエリと僕との……繋がり」

憎みきれない程に愛されたのは。

「永い、時間……これが本当に、」

本当に貴方の選択なのか、と。  
それを問うのは自己か、それとも……。

「死んでも苦しんで欲しいくらいに」

愛してる？

その手を毛髪に、ぎゅっと掴み取った。  
長かったこの髪を、執拗に固執し触れるのは、  
この両目を、じっと見詰めるのは。

「……お前」

狂わされたのは、誰？

君の質問？

では一つだけ。いつからと言われたら、君が生まれるずっと前からです

「僕は、そんなに……サリエリ……っ！？」

横たえる身体を丸めて、震えを遣り過ぎず。

途方もない一つの答えに、哀咽すら叶わずに堅く目を閉じる。

君にはもう、教えてあげない。

「ラヴィくんが導き出す選択を、聞いてみたいから」

その何処にも、殺意は認められず。  
ただ柔らかに微笑んで彼は言った。

「待ってます。君の生まれた美しいあの地で……蒼翼の欠片と一緒にね」

窓の光りに、それを確かめる様にゆっくりと双眸を見開く。  
決着と覚悟とそして。

「……僕の、選択は」

食い縛り、上体を起こして広げた手に、じんわりと指を折り握り締める。

「クレイド・グレイ」

選び取る、自分が向かうべき一歩。

「僕を、師匠のところへ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

とぼとぼ…とぼとぼとぼ。  
ごっちゃん。

「……………あ、ごめんなさい」

三回目、ぶつかった。

《マスター……………ですからそれ、並木です》

「うん、そーだね。オデコが痛い」

《……………》

分かってないな。と思いつつ、クレイド・グレイは歩き出したラヴィの横に並ぶ。  
ずっと俯いて、かなりぼんやりとした顔で、取り敢えずは足を動かしてはいるが、心ここに有らずで通行人にはぶつかるし、街路樹にも二度ぶつかるし。

《マスター・ラヴィ》

無表情。でも一応は足許の呼び掛けに視線を傾ける。

《ご存知ないようなので。ワタシなんですけど、剣のサイズ変えられるんです》

「ふうん……………え。」

《それだけでなく、クレイド・グレイは多機能な魔法剣なんです》  
「ぜ、ぜんぜん知らなかった」

《なので、使う時はそのつもりで。毎回重い重いと仰ってるので》

「ああ、うん…ごめん。ありがとう」

《マスターが望めば、ワタシはそれに応えます。どうぞ思いのままに》

気の利いた言葉など、とてもじゃないが言えないクレイド・グレイであったが、かなり気を使って話してはみたもののやっぱりさっぱりで、慣れないことはするもんじゃないとあっさり諦める。

《そこを右に、大通りに出ます》

時間は正午過ぎ。睡眠薬を飲んで、宿から連れ去られて二日以上経過していたことを、先程知った。  
雨の夜に師匠と会った大きな橋が見える。よくよく見渡せば、知ってる街並みだと気付く。

「クレイド、師匠って何処に居るの？」

《元マスターは宿に》

「宿って…」

《察しの通り、マスター・ラヴィの宿泊している宿です》

「な、なんでっ！？…うーん、なんだろう…この微妙なカンジは」

《微妙ですか…ワタシには。人間てややこしいですね》

言われて、苦笑いした。

「人間…か」

立ち止まってクレイドを抱えると、一度大きく息を吸い込む。

「もうそこだし、走るよ」

本当に人とは難しい、とクレイド・グレイは思う。

雲一つ見当たらない、抜けるような空の青が川に落ち、穏やかな日差しが水面に浮かびキラキラとさせる。聞き慣れた石畳を歩く靴の音や、すれ違う荷馬車の車輪ずれの音。そんな風情の中、宿の門前で恐らく仏頂面した男が、もの凄く営業妨害だろう、どっかりと座り込んでいた。

(ああ、やっぱり…)

再び鈍くなる足取り。会うのが目的なのに、このまま回れ右したくなるがすでに遅し、ばっちり目が合ってしまった。

「い、いいお天気ですね。ひなたぼっこですか？」

「…ほう？ いい根性じゃねえか」

別に待ち合わせに遅れた訳でも、ちゃんと約束をしていた訳でもない。  
自分は何も悪くないのに、何でこんなに後ろめたいのかと、俯きながらも立ち上がった彼の側に歩み寄る。

「顔上げる。馬鹿弟子」

「師匠…あの、何でここに」

「お前に用があるからに決まってんだろーがっ。ボケがっ…ナンだ？ その顔はっ」

「まあ…ちよつと 痛てっ」

傷の付いた口許に手をあてて笑うと、いつも通り頭をぼかすと殴られて、だけど何故だか少し嬉しく思ってしまう。

「説明してもらおうか？」

「はい。…あの、ロイズさんとエドガーさんは？」

「ああ？ ああ、アイツらなら…」

ぱんつ、と勢い良く扉を開く。

二階の一室、まだ完全には回復していないロイズが休んでいるその部屋に、エドガーもそこに居た。

「……ラヴィ……くん」

慌てた形相で、ラヴィは二人のもとへ近付いて腰を屈める。

「ごめんなさいロイズさん…っ、師匠何考えてんだよっ　！　もうっ」

病人のロイズに縄をかけて縛り付けるなんて、全くもって信じられないことを部下にする人だと、縄を解きながらブツブツ独り言を言う。

「いや…でもですね、こうでもしないとこの人暴れる気満々で」

見張り役に回されたエドガーが、一応理由は言ってみるが聞く耳持たないのか、固い結び目にまだぶつくさ言っている。

「　クラフト」

ロイズの呼び掛けに、その手をやっと少し緩めた。

「アイツの居場所、知ってるんだな　？　お前は」

「………はい、でも」

「教えてくれ」

ゆっくりと面を上げてロイズに向かう。

「出来ません」

「クラフト、言ったよな…お前に俺を止める権利は、」

「ロイズさん　貴方には、守る家族がいる。生きてる人たちを優先して下さい」

「ふざけるな…っ、お前にそんなこと言われる筋合いは無いっ」

縄が解けるが早く、ロイズはベッドの脇に立てた剣を手取る。

「あの人は…サリエリには貴方の望む死を与えることは出来ないんです」

「居場所を言え」

剣を抜き、刃の向ける先の彼がロイズを見詰める。

「　僕も、死なないよ。そんなものじゃ」

そう告げて、一度奥歯を噛み締め、再び口を開いた。

「弁えよ、ロイズ・ハーヴェイ。これはアムネアジル最高審議官の厳命、背くことは為政者への謀反に値する」

「……なに、を…笑わせるな…っ　！　！」

床に力一杯剣を突き立て、ロイズはその肩を震わせる。

「そんな大仰なことか…っ、俺の命なんかっ、代わりはいくらでもいるっ」

その姿に、言葉に、ラヴィは視線を逸らして何度も首を振る。

「貴方は貴方でしかない…代わりなんて居ないんです」

途切れてしまいそうな細かい声。言った後、深く頭を下げ、ラヴィは部屋を出る。

「俺もな。今生きてる奴の方が大事だ」

扉の脇に立つクレイドがぼそりと言う。

「ロイズ、そうだろう？」

何も語らない背中を一瞥し、エドガーに目配せして立ち去る。階段の途中で、膝を抱えて座るラヴィの頭を小突いた。

「まあーた泣いてんのか」

「泣いてません」

「あつそ。…で？」

「場所を変えます…エドガーさんも来て？」

「勿論」

next

## 蒼翼の欠片

「お待たせしましたあ、ローストビーフにミートパイ、ソーセージとポトフとスコーンのクロテッドクリーム苺ジャム添え…と、クリームたつぷりのケーキをホールで…でしたよね？」

ずらりと並んだ料理に頷いて、ラヴィはフォークとナイフを手にした。

「いったただきま〜すっ」

場所を変えるとか偉そうに言っという、単に腹が減ってただけなのか。

レストランでしこたま料理を頼んで、満足気に馬鹿は肉をフォークで突き刺した。

「…全部食う気？ お前」

「師匠も食べます？」

「いらん」

甘いものが苦手なクレイドは、特にこのどっかりクリームの乗ったケーキの、そのビジュアルと匂いにげんなりする。

「エドガーさんも良かったらどうぞ」

ミートパイにかじりつくラヴィに愛想笑いを返す。

「だって僕、寝てたのも入れたら三日以上何にも食べてなかったんですよ…あ、リンゴは一切れ食べたけど」

「だからって食い過ぎだろ、何処に入るんだこんなに」

「腹が減ってはなんとやら。しっかり食べとかなないと熱も下がらないし」

「熱あるんですか？ 言われてみれば、その食べっぷりにしては顔色よくないですね。傷だらけだし」

紅茶のカップを戻して、テーブルを挟んだエドガーが覗き込む。

「エドガーさんの所為だよ。雨降ってんのに、道の真ん中で話なんかするから」

「ええっ！？ それで熱をつ？ …も、申し訳ありませんっつ」

「…うそ。」

クロテッドクリームを頬に付けて、ラヴィがニッコリ笑うので、思わずエドガーはナフキンを差し渡す。

「ありがと。…あ、エドガーさん、ここ奢ってね？」

「厚かましい。っーか、コイツは何者？」

「エドガーさん、自己紹介したら？ 大丈夫だよ、師匠なら」

テーブルに肘を付いて、訊いてる割に無関心そうなクレイドに声作りした。

「あの…私、スウエズール王国第四王子、エドガルド・ヴィンセントⅡ スウエズールと申します。因みにこの名を付けて下さったのってラヴィ様なんです」

「聞いたことはある。四番目はとんでもない虚けだとか」

「はい、それです。私のこと」

苦笑しているが、目は笑っていない。食えん奴だとニンマリ笑みを返す。

「虚けは権力に守られてボーツとしてるもんだ。違うか？」

「……ありがとうございます」

「エドガーさん、クレアの居場所を教えてください」

ガツガツ食べながら、僕の今までの旅は何だったんだろう…と口の中いっぱいにしてぶつくさ言うラヴィに、食うか喋るかどっちかにしろとクレイドが頭をぼかすと殴る。

「……で、馬鹿弟子は何でこんなにテンション高いんだ？」

「僕？ 普通でしょ」

どう見ても尋常ではないだろう。人目を憚らずケーキをホールごとがつつくラヴィの、少し腫れた頬をクレイドが指でピンツと跳ねる。

「インテリ眼鏡はお前の顔好きだし　？　誰にやられたんだ」

「シエラだよ。順を追って話すから」

フォークを置き、グラスの水を飲み干してからラヴィが二人に視線を向ける。

「カジカがサリエリに通じていました。それで僕、まんまと彼の策略に嵌って、連れてかれて……シエラは僕の複製になっちゃってて、まあ色々あって喧嘩してこの顔に」

「順で…阿呆かつ、端折り過ぎだっ」

「えー？　どの辺りが？」

「全部だっ　！　しかも眼鏡の話は全然出てねえだろうがっ」

「サリエリは…何も……うさぎさんのリンゴは切ってくれたけど、後は……」

トーンを落として話すラヴィに、イライラしつつも我慢して続きを待つ。

「待ってるって。カラク・ラリスと一緒に、僕の生まれたあの島で」

「ラヴィ様、その…彼の目的を、ですね…」

そこが聞きたいんだろう。このままだとまた殴り兼ねないクレイドをちらりと見ながらエドガーが口を挟んだ。

「あ、うん…そこ大事だね。ごめん僕なんか…うつぷ…っ、ちよっと待って…っ」

慌てて立ち上がり、手洗い場に駆け込む。

「…阿呆が」

言葉とは裏腹に双眸を細めるクレイドを、少しほっとしてエドガーはティーポットを手に、二人分の紅茶を注いだ。

「うえー…ああ勿体無い…折角食べたのに」

じゃばじゃばとついでに顔を洗って、大きく溜息を付く。

「はははは…っ…はあ。ナニやってんだか、僕」

鏡に映る、みっともない自分に苛立ちさえ覚える。

「……しっかりしろよ。ラヴィ・クラフト」

がんっ、と鏡を叩いて目を閉じる。

もう決めたこと。

それによって傷付く者がいる事も承知で、自分は自分の決めたこれ突き通すのだから。

開いた両目に、翠色の瞳が馬鹿馬鹿しいくらい輝いて見える。

「 笑止の至りだな、お前」

自虐的に罵って、無理矢理に笑顔を作ってから、二人の元へ歩みを寄せる。

一生懸命、歩くことだけ考えて、ふらついたりしない様に。

「すみませんでしたあ、食べ過ぎちゃったかな…ちょっと」

「お前の阿呆さは今に始まったことじゃないからな。もういい、行くぞ…ラヴィ」

さっさと店を出るクレイドをぼんやりと見るラヴィに、エドガーがそっと肩に触れる。

「出ましよう？ お会計済ませておきましたから」

「エドガーさん」

「行くのでしょうか？ アースカルドへ」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

年下に「齧って」といけしゃーしゃーのラブリ。

貧乏なんで、許してやって。

## 蒼翼の欠片

サリエリは、僕という存在そのものが生きる目的なんです。僕という、女神の力を持つて生を受けた者たちの。

ずっと…気の遠くなる程の時間を、彼は僕らを殺す為だけに生きてきた。

愛して、殺した。

何度も、サリエリは僕を殺す。

狂ってしまう前に…その力で何かを壊してしまわない様に。

知ってると思うんだけど。

僕がどれだけ彼に依存していたか。

とても愛していたから。

裏切りを口にされた時、死ぬことよりも怖かった。

注がれた愛情が、全部、嘘だったと認めたく無かった。

「分からん…そこまで追い込んでから殺す理由は？」

すると彼は、驚く程あっけらかんとして、なだらかに述べた。

憶えてますよね。ネイス卿の屋敷に、僕を迎えに来てくれたこと。依頼を受けて、あの街に跋扈した魔獣を片付けに向かった。

あの場所も魔獣も、サリエリの怪我也、全部僕をクレアに逢わせる為の画策。

そして僕は、彼の思惑通りクレアを好きになった。肉親の…自分の姉を愛した。それは多分、

「どうにもならない愛ってやつを、思い知らせる為…それがサリエリの根本だから」

全く理解出来ない。そう言って首を傾けた師の背に、おでこをくつつける。

「僕を愛してくれたこと…それはね、本当だったんだ。サリエリの誤算はそこ、本人気付いてるかどうか定かじゃないけど」

だからね、僕が選んだこれを、お前はと思うのかも聞き質せないけれど。

「お互い様…ってことで」

「はあっ？」

紅の翼が、一際にびゅんと音を立ててひるがえる。

《筆るなっつ！　オレ様の羽をっつ》

「あー、スマン。」

わざと揺すぶれて煽るジインの深紅色の羽を、クレイドが指から空へ舞い上がらせる。

「危ねえだろっ、ちゃんと飛べブサイクっ」

《ヤカマシイっ、さっきからブチブチと羽抜きやがって》

「減るもんじゃなし」

《減るわっ！ 減つとるわっボケっ！ ！》

ジインの背に、お互いが嫌々に乗せて、乗ってやって。

何度目の言い合いかも忘れてしまったクレイドとジインを、やっぱり何度目か忘れてしまったラヴィが宿めに入る。

「まあまあ…ほらジイン、見えてきたよ　アースカルドが」

《見えなくても感じるだろ…オマエも、あの島特有の靈気……阿呆クレイドもな》

「阿呆は余計っ……っって、なんじゃーっ！　？　コイツらはっっ」

無数に散らばる緑閃石の様な光が、風に乗って降下するジインをすり抜ける様に飛び、目前に迫り弾けた。

「なんじゃって…師匠、精霊ですよ」

「ラヴィっ、お前の所為かコイツらはっ」

「……歓迎、してくれてるみたい」

伸ばしたラヴィの手に触れる、半透明の緑色が容を生み出す。言葉を持たなくても、それらは婉曲に表情と身振りで心持ちを表した。

「お前に接触したら、コイツらは体を持てんのか」

「凄いでしょ？ 僕って」

振り向いてラヴィイを見るクレイドが鬱陶しげに吐息する。

「凄い…確かにな。」

身体中に精霊をくっ付けて苦笑いするラヴィイに、クレイドも噴出して笑った。

「 師匠。ありがとうございます」

レストランを出た後、クレイドも後方から飛竜で付くエドガルドも、何も訊かずにただ島へ向かってくれた。

「ラヴィイ」

名を呼ぶ声に、意思を伝える様に師の背中を、服をぎゅっと掴む。

「信じていいって言い切れるんなら、お前の思う様にしてやるよ」

「 はい」

心が、押し潰されそうです。

「信じて、トヤロ」

貴方を欺く事。その痛み、失することはないから。

「恐悦に存じます 師匠」

いいえ、

「クレイド…ラガーフェルド」

n e x t

## 蒼翼の欠片

アースカルド。

天上から神々が最初に降り立つ地。

往代に神聖なるこの遠島をアーシェラルドと言った。

碧に広がる美しい海と、蒼翠の匂い。

渡る風は恵風と謳われる、尊き侵し難い聖地。

「　　って、聞いてただけど。」

見渡して、叢生する草木にちよつと笑みすら漏れる。

「全然普通に荒れてるし…」

「この辺りはな。しょうがない、けど宮殿はちゃんと整備されてるからな」

クレイドが見上げる方へ顔を上げる。

切り立ったその場所に、壮麗な白亜の殿宇が見えた。

「どーやって建てたんだろ　？　って場所に建ってるんですね」

「お前ん家だろ、アレ」

「家って…」

そんなこと言われても実感湧かない。と言つかほぼ生まれて初めての生国に懐かしさすら無い。

「お待たせしましたーっ、流石ラヴィ様の精霊ですね速い…とは言  
ったものの、可視出来ませんが」

少し遅れて到着したエドガルドが、曖昧な笑みを浮かべて言う。

「エドガーさん、アルトニアでは見たでしょ？ ……ジンお疲れ  
さま、ありがとね」

礼を言うラヴィは眼中に無く、ジンはその横前方をじっと、ほぼ  
睨む。

「…あ？ ああ、助かったぞ。ブサイク」

《なんだその超テキトウっぷりはっっ》

「ラヴィ、コイツもう引っ込めろ。喧しくてかなわん」

《なんだとーっっ！ ！ ！》

「もうっ、二人とも子供みたいな言い合いばかりしないでよっ」

聞いてないし。

呆れて、もう割り込む気にもなれず、その場に座り込んだ。

「大丈夫ですか？」

「え…あ、はい……エドガーさん、クレアは何処に？ あそこ…  
ではないよね」

「宮殿はエルトフェニアとスウエズールの両国が微妙なバランスで占拠していますから……すみません」

「エドガーさんが謝ることないよ」

やっぱり少し気分が悪いのか、顔色のよくないラヴィが微笑みかける。

「クレア様はここからだ、丁度宮殿の向こう側に。両国にばれない様にこれまた微妙な場所で……本当に申し訳ないです」

「だから謝らないですよ……色々と手を尽くしてくれたんでしょ。逆に  
お礼言わなきゃ」

「とんでもないです、ラヴィ様」

「あ、ね……その……とても言い辛いんですけど……」

くしゃつと髪を掻き上げて、物憂いな視線をエドガルドに向ける。

「エドガーさんからクレアに、ね……」

《馬鹿ラヴィっ！》

「……んーっ、もうっ何っ？」

一応は大事な話だったのに。割って入るジインを面倒臭そうに見た。

《オレ様、小っこくなんないんだけど》

「……………うーん、土地柄？ よく分かんないけど……………はい」

いつもの手の平サイズに戻って、オレンジの体をくるりと一回転させて浮遊する。

《アイツ、先に門番に話付けるって行ったぞっ》

「え？ なんでーっ？ だって門で確か…エドガーさん行きましょっ」

「ラヴィ様」

立ち上がって歩き出すラヴィを、エドガルドが呼び止めた。

「直接…クレア様には貴方からお伝え下さい、ね？」

それ以上は何も言わず、歩み寄って振り向いたまま立ち竦むラヴィに笑みを傾ける。

「……………そう、だね」

「ですから、ここを通れるのは……………何度も言っておりますが、エルトフェニアの将官であってもですね、その……………」

「だからっ、その王から恃まれてるって言ってんだろーがっ、石かっ！ お前の頭はっっ」

「御沙汰がありません故、お通しする訳には…」

どっちの頭が固いんだと、門番はげんなりとしてクレイドを見るが、もの凄く睨まれて口を噤む。

「ぶっ壊すぞっ、こーなったらこの門ぶっ壊して通るからなっ」

困る。非常に困る。そんなことされたら、両国の問題にもなり兼ねないと、門番は門戸にへばり付いた。

「ちよつと待つてーっ…師匠大声で物騒なこと言わないでよっ」

「よろよろは黙ってる」

駆けつけたラヴィを見るでもなく言ったクレイドとは対照に、門番は彼を見て一驚する。

「よろよろ……。師匠、気遣いは嬉しいけど僕大丈夫なんで。それにこんな無茶しなくても普通に通れるのにつ」

「さ…最高審議官！？」

「ほら。ここね、審議官以上だったら符丁を使えば開けてくれるんですよ…って、何で僕のこと？」

「クラフィスト最高審議官…ど、どーしてっ！？」

「どーしてっ…あ。」

ぼん、と手を打ち合わせてラヴィが合点した。

「貴方は…っ…ニセモノ、か？」

偽者とは、先にここを同じ顔が通ったという事。流石にそこまでは考えておらず、どうしたものかと頬をぽりぽりと搔いた。

「つまり　アイツら堂々と正面から入ったってワケか。馬鹿弟子、やっぱ壊すしかねえんじゃ？」

「い、言っておきますがっ…この門は定められた鍵以外の方法では開かないですしっ、壊すにしても百と十一の術がかかっているんです、容易なことでは……」

「僕もそう聞いてます　でも、奥の手がある」

立ち塞がる門番の前に歩み寄り、ニッコリ笑ってラヴィは門を手にした。

「僕、偽者じゃないよ。これ極意って名の強硬手段…聞いたことあります？」

「…へ？」

ガチャンと、あっさり開錠した門に、門番は慌てふためいてラヴィから避ける様に数歩距離をおく。

「通してね。でなきや君…馘首されちゃつかも」

物騒はどっちだと、クレイドが呆れながら微笑した。

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

「今の…どうやって開けたんです？」

門を抜けると、今度は数えるのも一苦労しそうな石灰石の階段が延々と伸びていた。

「うーん…手品？ なんちって」

悪戯っぽく笑うラヴィに、エドガルドも引きつらせながらも笑って返した、が。

「あの…追っ手とか来ませんか？」

「それは大丈夫。門番が上に話せば、ちゃんと理解して貰えるよ。逆にね…それより、この階段の長さがあ…」

見上げるのはやめて、ひたすらに進もうと決め階段を上り始める。暫し黙して足を運んでいたが、じんわりと言葉では言い表せない、奇妙な感覚に歩みを止めた。

「……なんだろう、この感じ」

しゃがんで階段の石に触れてみる。その触感には視覚と何の変わりもない冷たい石で。なのに初めて見る景色も、この場所だつて当然歩くのは初めてのはずなのに、何だかここを知っている様な気がして、ラヴィは階段の先に目をやる。

「…  
やっぱ…長い」

でも何故か、これは自分の足で進まなければいけないのだと解る。身体の何処かが、ここを知っている。

「…そうなんだ」

翼を持たない種族でありながら、アントニムの妙名を持つ翼有種の血脈に触れた気がして、ラヴィは微かに笑みを漏らす。それからゆっくりと立ち上がって、後ろのクレイドとエドガルドに振り返った。

「……………あれ？」

「飛んでつちや、駄目なんでしょうかね」

先が霞んで見えるくらいげんなりする長い階段に、エドガルドが愚痴る。

「三つ編み、ブツクサ言っでないで上れっ」

「クレイド殿…いい加減憶えて下さいよお。エドガルドですって私」

「にしてもガリガリはいいよな、身軽で……………おい、馬鹿弟子は？」

前に居たはずのラヴィが見当たらず、クレイドは足を止める。

「ラヴィ様は前を…居ま、せんね？」

左手は壁、右手は断崖のこの場所で階段を上る以外他に行ける所など。

「空かつ」

二人同時に見上げるが、少し雲ってきた空が見えるだけだった。

「……ナニやってんの？二人とも」

「どわあっ…っ！！！！どっから湧きやがった馬鹿弟子っ」

目前で見上げてこっちを見るラヴィに、仰け反って階段を踏み外しそうになる。

「どっからって…さっきから居るじゃない。ヘンなの」

「変…変なんでしょうか、階段があんまり長い所為で…」

かぶりを振って、エドガルドが肩を竦める。

「急がないと、日が暮れちゃうよ。ほらっ足動かしてっ」

「ラヴィ様大丈夫ですか、体調あまり良くないのに」

「え…ああー僕は全然っ、もうすっかりっ」

軽快に闊歩しながら、ラヴィが囃し立てる。

「そうですね、頑張りましょう。最上にある祭殿目指して」

「おい」

呼び止められて、一拍間をおいてラヴィが振り向く。

「何？ 師匠」

「お前に師と呼ばれる筋合いはない」

上った階段を、音を立てずにゆっくりと数段下りて、ニッコリと笑みをクレイドに湛える。

「感心しちゃった。ボクやっぱり好きだよ、クレイドのこと」

「ふざけるな。アイツを何処へやった？ シェラ」

シェラと呼ばれる、ラヴィと酷似したその姿にエドガルドが目を見くする。

「もう一人のボク、でしょ。何にもしてないよ、心配するなら自分の方をしたら？ …クレイド」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

今回区切りの為、短いからオマケ付き（笑）

「ねえねえ。なんでクレイドはボクがシエラだって分かったの？」

「ですよねえ…何処からどう見たってラヴィ様と瓜二つ」

「だろ？ この髪型大変だったんだよー。これってアイツが自分で切ってたのかな」

「どうなんでしょう…ですが、」

「不器用そうだし。」

「意見合ってたな」

「合いましたね」

「随分な言われようでアイツには同情したいがっ、お前らっ！  
！ 俺様がシエラだって気付いた理由は  
聞かんのかつっ！ ！」

あ、忘れてた。

「き、聞きたいなあ…すっごくっ。なあ？ えっと…何て名前だっけかオマエ」

「エドガルドですってっ」

「あっそう。」

「何でそんな適当なあしらい方なんですかーっっ」

「まあ、いいじゃんっ。教えて欲しいよなあ　？　エドガドル」

「エドガルドですっっ」

またまた忘れられる。

「もういいっ、絶対教えてやらんっっ」

「そんなこと言わないで、クレイドの鋭い感性を知りたいんだよーっっ」

「…ふん。簡単だ」　鋭い感性のっっていう言葉に負ける（笑）

「ナニナニっ　？　？」

「アイツはお前みたいなキレがないっ。ドン臭いしポケっとしてるし、軽快に闊歩とかしないし、階段ではすぐ躓くっ　！！」

「ナンが…」

「…トドイ言われようですが」

納得した。

哀れな主役（笑）

## 蒼翼の欠片

「……ええっとー？」

振り返る、そこには真っ直ぐに伸びた階段が見える。階段、だけが見える。

「は、はははは…っ」

空笑い。手を胸元に、大きく息を吸って吐いてみた。何も変わらない。

後ろに居たはずのクレイドとエドガルドが、本当に忽然と姿を消していた。

「……つまり。これは罠の類？」

その罠に掛かったのは、自分なのか、はたまた二人の方なのか。

「多分、師匠たち…だよなあ。うーん…」

サリエリの所為であれば、恐らく偽者の自分が大活躍しているのだろう。二人が騙されてはいないか、一抹の心配ではあるが、こうなってしまうたらこちらは前に進むしかない。クレイドならば大丈夫だろうと、言い聞かせてラヴィは踵を返したが。

「は、ははは…っ？？」

頭の中で、うっそーん…と三度程反復した。

「扉が…見えるんですけど…」

ずつと先だが、間違いなく先程までは無かった扉が存在している。

「からくり屋敷ですかっ、ここはっ」

ただ単に、この宮殿が珍妙なだけなのか。エルトフェニアもスウエズールも一步も引かぬ競いで、こんな離島の宮殿を所望したがっていたが、もしかするとその辺りに理由があったのかも、ラヴィは前方の扉を疎ましげにじつと見た。

手品だったら絶対うけるのに。卑屈な笑みを零してまた階段を上り始めるが、途中どうしようもなくイライラしてきて、一段飛ばしで扉まで突進し、そのままの勢いでドアノブに手を掛ける。

「こうなったら、もうなんでもこいやっっ！」

威勢よく声をあげて、躊躇わず両開きの扉をばんつと開いた。

「お邪魔…っ」

その声が響き渡る程の広い空間が目前にあつた。白で統一された高い天井と壁。床は大理石でピカピカに磨かれてある。

窓は全て教会堂の様なステンドグラスで、取り取りの色彩は花などの模様が描かれてあり、外部からの透過光で一際に荘厳な美しさを醸していた。

正面と両脇にまた幾つか扉が見え、ラヴィは歩みを寄せてそれらを片っ端から開け放した。

「なあってね。嘘だよ、大人しくしてくれてたら何もしないから」  
ふざけて笑うシェラを、エドガルドがまじまじと見る。

「本当に…そっくりですね」

「それ語弊。そっくりじゃないから、もう一人って言い方しろよ」  
小癪な物言いは、それでも彼とは別人であると主張している様にも  
思える。

「体裁と力は同じ。アイツの髪の毛から造ったからな」

「で？ お前がここに居る訳はなんだ」

無粋なクレイドに、少しむくれてシェラが髪を掻き上げ、二歩ほど  
階段を上がる。

「迎えに来てあげたんだよ。ここね、ちょっと仕掛けがあって絶対  
迷うから」

「迷う…？」

どう見たって一本の階段が伸びているだけのここを、エドガルドは  
改めて眺める様に見る。

「何でお前なんだ？」

「なあに？ 不服なの、ボクじゃ」

意を得ないクレイドを苛立たしく思いながらも、側面では好意を寄せる奇妙な感覚があつて、その趣が好きなんだとシエラは独り納得しクスリと笑う。

「最短ルートで祭殿まで連れてってやるよ」

「アイツは無事なのか？」

「……無事だよ。此処は翼有の島、アイツはこの宮殿の主になる資格があるワケだし、迷つたりしない。体が知ってるんだ」

「そうか。なら、連れて行け」

偉そうにと、翠の瞳を柔和にシエラは口元を緩めた。

「もしかしなくても……僕、迷子？」

むやみやたらに扉を開けて突き進んではみたが、何だか同じ所をただ巡回しているだけの様な気がしてきて、深い溜息とともに肩を落とす。

「なんなんだよお、ここ。上に行く階段とか全然無いし」

祭殿に行き着くまでにバテてしまいそうだと、壁に背を預けてズルズルと滑る様に腰を下ろした。

「……しんど」

しんとした広い空間に足を投げ出す。ぼんやりと、鮮やかな彩色のステンドグラスを見上げて、ラヴィはふと思う。

「クレアって、ここに住んでたんだよね」

或いは自分もここに居たのかも知れないのだと考えると、可笑しくなってきた苦笑いを浮かべるが、妙なひらめきがして慌てて立ち上がる。

「……そっか。ここは翼有種が……」

今更ながらにラヴィは思う。

何て自分は馬鹿なんだと。

「行きたいと、願えばいい……それだけなんだ」

すぐ側の扉に触れ、ラヴィはそれを存分な面持ちで開く。

変わる光景にほくそ笑んだのは一瞬で、そこに見えたものに駭然として目を見開いた。

広い室内、その中央に檻の様な大きな鳥籠があった。

その中で扉の音に気付いた者　人が一人、振り返りこちらを凝視する。

声にならない間合い、ゴクリと咽喉を鳴らして、ゆっくるとラザイ  
が口を開いた。

「カジ、カ…？」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「ラヴィ、さま…？」

その声と表情が半信半疑に問い掛ける。柵を両手に掴み、カジカは目を凝らして近づくラヴィを見詰めた。

「うん…ラヴィ。僕だよ」

「ほん、もの…ですか？」

疑心暗鬼を生ず。彼女は繰り返して確かめ、ラヴィにブラウンレットの瞳を投げ掛けた。

「本物」

そう言って、少し首を傾けて精一杯に微笑んでみる。微妙な心中は抑置く、今は何故彼女がこんな所に閉じ込められているのかだ。

「サリエリ…が？」

暫し間を置いて、カジカは視線を外してから口を開いた。

「どうでしょうか…シエラが、ここに」

「そう…とにかく出よう、カジカ下がつって」

こんなに大きな鳥籠を何に使ったろうと、しろがね作りのそれを、趣味の悪さに吐息してから扉に付いている鍵を一瞥するが、見ぬ振

りをして目を閉じると同時に柵が数本ぐによりと湾曲した。

「ラヴィ様…私は」

私は貴方を裏切った者。

言葉にすることを躊躇う様に、カジカは組み合わせた両手にぎゅつと力をこめる。

「カジカ」

差し出された手。何一つ変わらない相好で彼は名を呼ぶ。

「さつきもね、思ったんだけど…僕って相当馬鹿なんだよね」

何度も首を振る彼女に、手を差し伸べたまま籠の中に踏み入る。

「それでも…僕にとってのカジカは…カジカだから」

「私は、私はラヴィ様を…っ、」

「カジカ　　行こ　？」

莞爾として笑う彼を直視出来なかった。

ただ、握られた手の感触を確かめる様に、一度小さく頷いてカジカは彼の歩みに合わせる。

伝わるあたたかさ。その背中を眼差して追い彼女は歩いた。

「あれだね」

部屋の奥に見付けた扉を、ラヴィは蓋然とそれを開け放つ。

開いたそこに見えるのは、壁も天井も無い広大な庭。  
溢れんばかりの花々が咲き誇り、宛らそれは空に浮かぶ空中庭園。  
ひらりと、視界を掠めたものにラヴィイは意識を傾ける。

「……この花…シエリル」

一際に、白い小さな花びらが風に遊ぶ。  
廻る記憶、その中の優しい香りが、零れる程の笑顔が追憶とともに  
思い焦がれる。

ここは、君の居た場所。心の中で、彼女の名を繰り返して  
。

「ごめん…ね」

「ラヴィイさま…？」

思わず知らず口にしてしまった言葉を、何でもないとカジカに告げ  
て笑ってごまかすが、繋いでいた手を振り解き俯いた彼女に困惑す  
る。

「やっぱり…ずるいよ、ラヴィイさまは……」

その言葉を、自分が口にするのは間違っている、ちゃんと知って  
いる。

それでも、心とは簡単に片付けられるものではなくて。

いつだって、彼は同じ瞳の色を持つ彼女だけを想うのだ。

渡る風が、彼女の赤毛をさらう。揺れる木々、緑葉の擦れる音だけ  
が耳に届き、流れる雲は濃い灰色をしてカジカの心を喻えている様

だった。

「ラヴィさまっ」

ややあつて、まるで挑む様なその声にラヴィは表情を強張らせる。

「お誕生日っ、おめでとっございます…っ」

「…………え…………」

「おめでとっございます…ラヴィさま」

そつと、顔を上げたカジカははにかんで、やがて微笑みをラヴィに向ける。

「あ…の、えつと…僕、今日…？」

「そうですねっ、すぐ忘れちゃうんだから」

呆然とカジカを見るラヴィの肩をばんばんと叩いた。  
確かに忘れてはいたけれど。

予想外の彼女の言動に、どうしていいのか分からず、まだぼんやりしている彼の背中を押して、花がよく見える場所まで進んだ。

「綺麗ですねっ」

「…カジカ、その…ありがと…でも、」

言い掛けて口を噤み、ラヴィはその場にしゃがみ背を丸める。

「ラヴィ様」

「情けないんだけど……だけど、謝るのはカジカに失礼だから……もう触れない」

「……はい、それで……いいです」

「誕生日、覚えててくれてありがとう……カジカ」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

「さっきもね、思ったんだけど…僕って相当馬鹿なんだよね」

今頃気付いたのかラヴィっつ  
！  
！  
！

にしても、女心って難しいザンス。

## 蒼翼の欠片

幾つかの扉を潜る様に開き、明らさまにこれまでとは違う立派な扉の前で、シエラが歩みを止める。

「ここから先はね、別格。殊に神聖地とされてるところなんだ」

所有する、二つの国の王すらも踏み入ることは叶わない壤土。切り岸にあつて、空と海の碧を臨む牆壁を持たない十全の場。

「聖地つて、そのまんまなんだけどね。昔天上人が地上への最初の一步を踏む場所で、これを護っていたのが翼有種：多くは天使と人の混血で、翼有の語源もそこからだよね」

開け放つのは、蔽かに有らしめる祭殿への扉。

「千年以上前、神はいきなり地上へ降りるのをやめたんだ……理由はね、神の一人が人間を愛してしまつたから」

人には侵し難いそこに、シエラが笑みを含ませて二人を招き入れる。

「人を愛した神には兄がいた。兄は妹の神を愛してたんだ、だから腹癒せに天と地を結ぶ天導回廊を壊した」

でも。

「神と人との契り……それは終わりじゃなくて、起こりだった。そうだよな？ サリエリ」

「……ええ。その通りですよ、シエラくん」

祭殿へ続く途次に立つ彼が和やかに口を開いた。

「その昔、愚かな人間が身の程も弁えず、女神に触れたのが始まり」

「多分こうだよな？ 神は神の力を持って生まれた子を…我が子を殺せと人間に命じた」

側に寄り、サリエリにそう言うと、シエラは彼の手に持つカラクラリスを取り上げる。

「ええ。愛して殺せと、条件付きでね」

「……なんだ、それ…」

それまで黙っていたクレイドが、心悪い表情を浮かべてサリエリに問う。

「ゲームですよ。人間なんて盤上の駒、傲慢な神の考えそうなルールです」

「で、殺しちゃったんだ。まあ…逃げる場所なんて、無いもんね」

最後の扉の前に、シエラがクスリと嗤う。一際に重厚で壮麗なそれに手を触れた。

「 やっぱり、君では開けられないか」

「はあ？」

不機嫌にサリエリに投げ掛け、カラク・ラリスをぎゅっと握る。

「誰に言ってるの？ クレイド…もう片方の石、持ってんだろ？ 出せよ」

「……お前ら、欲しいのか…アイツが」

本当に望むものを手に入れるには。

扉から離れ、シエラはクレイドに歩みを寄せる。ゆっくりと面を上げて真っ直ぐに彼を捉えた。

「欲しいよ。死んで貰う為にね、アイツが死ねば願いは叶うんだ」

「存在を消し為り代わる事が望み？ 馬鹿馬鹿しい…っ」

「何だっついていいよ…ボクを玩具にして捨てたアイツ等を見返せるんならね」

幻惑はされない。けれども彼の容貌をしたその口から発せられる言葉に、クレイドは厭わしさを覚える。

「お前は…お前も殺すのか？ その神のルールとやらで、またアイツを…サリエリ…っ？」

「そうですね、ですがそれはラヴィくん次第、ここに居るみんなを殺めてしまうことだって、彼には可能な訳ですし」

まるで他人事のように話すサリエリに、鼻持ちならず近付いてタイを

掴み取る。

「育てたお前がそれを言うのか。アイツが言ったこと、さっきはさっぱりだったが、アイツは…ラヴィはお前の正体に気付いているぞっ？」

分かっていてここへ向かう、その想いは如何ばかりか。

おおよその理解も出来兼ねないそれに、クレイドは苛立ちを隠せなかった。

「そう、ですね…ラヴィくんなら、そろそろ気付くかもね」

「言ってた。お前が自分を愛したことが誤算だったな」

サリエリは静かに笑みを湛える。

「間違いありません…私はラヴィくんを愛してしまった。だから、ここに居るんです…あの子を待っているんです」

「……………わっからんっつ！ 自分の子供くらいに思っているアイツを…っ、神が何だって言うんだっ？ そんなもんクソ食らえだろっ！！！」

「言葉は汚いが同意見です。それに、神はもうこんなゲーム疾うに放棄しているでしょうから」

「もういい…っ！！ アイツを連れてここを出るっ」

「ナニ言ってるの？」

ギリりと、締め付ける肢体。立ちはだかる彼は、深い翠の瞳をクレイドに向け閃く。

「そんな事出来るワケないだろ？　一応人質だつてこと自覚してよね…クレイド」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

……えーっと、エドガーさん……ドコっすか（笑）  
セリフなしっつ！！

## 蒼翼の欠片

お前は何を望む？

その扉。

君こそは、どれを選び取るの？

例えば、君が悲しむなら

私は身を引き裂かれる程の痛みに耐え。

君が涙すれば、

心が抉られるくらいの苦痛を伴う。

故に愛おしい君が、光りを独り占めした様に煌めく瞳で笑いかけるから、私の心臓は度に早鐘を打つ。

だから、

「 待つてましたよ」

だからこそ、君に死を与えることが最善の愛。

それは込み上げる情愛と、塗炭の苦しみ、情操の噎び。

「ラヴィくん…いえ、アーシェラルド・ラヴィ・クラフィストファ  
ルース」

その瞳は一つも変わることなく、光輝を放つ。

「……それが、最後の扉」

サリエリの背に見える荘厳としたそれに視線を置き、ラヴィは落ちて着いた足取りで向かう。

「思いつきり無視だよね。クレイドが心配じゃないの」

わざと引き止めているとも取れる様なシェラの口調に、立ち止まって無表情のまま答える。

「シェラ。師匠は僕に心配なんかして貰いたくないよ…それに」

一呼吸置いて、ラヴィは笑みを浮かべる。

「……いつだって覚悟は出来てるんだ。師匠ってそんな人」

「ナニそれ。悟っちゃってるワケ？」

「そつだよ。僕はお前とは違うんだ…あの扉だって、開けられるのは僕だけ」

まるで開けられなかったのを見ていたかのようなラヴィの口振りに、ギリリと奥歯を噛み締める。

「邪魔しないでね、シェラ」

「オマエっ　！！」

「性格の悪さはお相子。」

クスリと笑うラヴィにいよいよ歯軋りする。

「偉そうにつ、それで勝ったつもり？　言っとくけど、あの扉の向こうはオマエの死に場所、墓穴を掘ってんだよ」

「……だから？」

まさかの切り替えしに、シエラは言葉を詰まらせる。正直彼が何を考えているのか、会話も表情もデタラメな気がして違和感が残る。

「ラヴィ…お前」

「師匠、これから何が起こっても貴方はそれを……信じるって、そう言うことですよね？」

顔は合わせない。俯き加減で横顔のままクレイドに確認する。

「俺様を相手に駄目押しか…いいだろう、見ててやるよ」

ただ一度頷いて、ラヴィは再び歩き始める。

数段の幅広い階段を踏み締める様になり、残り一段の所で横に立つサリエリに手を取られた。

「　　待つて、君は…」

思いがけず抱き締める、らしくない彼にそっと目を閉じる。

「……………ばか。お前に抱き締められても、もう嬉しくないんだよ……サリエリ」

「ラヴィくん……ええ、分かってます」

「……………ねえ……憶えてる？　いつかお前が言った、僕は甘んじて死を受け入れる様に育てられてないって言うの」

「勿論です」

「　　お前の所為だ。僕はずっともがいて……もがいて生を勝ち取ってきた。お前の言葉はどんな魔術より強烈で……僕を……」

「苦しめた？」

それには答えず、ゆっくりと目を開ける。

「勘違いじゃなかった。お前のこと大好きだったから……同じ様に愛されてるって、それは間違いじゃなかった……だから、だからそれでいいよ僕は」

サリエリを引き離し、彼が見せた微笑みは手向けの様で名残惜しく思えた。

「ラヴィ……」

「お前は僕が一番欲しかったものをくれた人だから……随分遠回りしちゃったけど、ちゃんと応えさせて？　それはこの扉の向こうにあるんだ、サリエリ」

徐ろに手を伸ばし押し開く。  
最後の扉が、開いた。

n e x t

## 蒼翼の欠片

「冗談じゃない…っ！ サリエリもっ！ ナンだよそれ、アイツのいいようにされて別れを悲しむみたいな顔してんなよっ」

「あのならシエラ、お前も相当…っ」

「煩いよっ、クレイドは黙ってボクについてくればいいんだっ！  
…そうだよ、分かってるよね？ 変なことしたらこの腕へし折  
っちゃうから」

「シエラっ、おい…っ」

「ボクはっ…ボクはアイツを殺すんだっ！」

躍起になり、無理矢理に引っ張ってラヴィの後を追うシエラを見下ろして、クレイドは小さく吐息する。

「あのなら、シエラ」

低く、つつめくクレイドの声に耳だけを傾けた。

「無理だ。お前にアイツは殺せない」

キッと、翠緑の瞳が上目遣いで睨め付ける。それは凄むというより、逸る心を映し出している様に見える。

「生きる意味を見失ったアイツに、ボクが負ける筈ないんだ」

より深く、望んだ者こそが生を勝ち得る。  
でもそれは、

「人間の、話だろ」

人ならざるモノには当て嵌まらない。だからこそ、もがき苦しんで  
いるのだろつ。

精一杯生きることを躊躇って、おくびにも見せず笑顔で包み隠して、  
自らをもまやかす。

人と共に、人として生きることの矛盾に苦しめられても、それでも  
まだこの天下に執着するのは、ただそこに産み落とされたというだ  
けの簡略な所以なのかも知れない。

「だったらシエラ…窮屈だよな、お前には」

「ナニがっ？…ナンでもいいよ、話はもうお終い　　おいっ、  
ソコの二人っ来ないのか？」

立ち尽くしたままのカジカとエドガルドを一瞥して、それ以上は何  
も言わず扉への階段を踏み出す。

「………何で、誘ってんでしょうね？　　彼」

「知らない、でも…行くわ。私はもう、ただ見届けるだけの子供じ  
やないもの」

歩き出したカジカに、数歩遅れをとってエドガルドも彼らを追った。

「見えますか？ 僅かに切り立ったそこにある女神が」

「女神って…ディアーナって言ってあげないの？」

「ラヴィくん…」

風が変わるのを肌で感じる。

翼有種として生まれた自分が、唯一懐かしいと感じられるこの場所は、生を受けて最初に目にするパノラマ。

墮ちるくらいの星と、海を渡り祝福を与える精霊の姿が、誕生間もない翼有の瞳にはしっかりと映っているという。

この地上のいずこにも比べ難い神聖で美しいこの地を今再応し、ラヴィは見渡す。

「ここへ再び来ると、思い出そうですよ…生まれた時の記憶を」

「うん、分かるよ…星の数にも負けないくらいの精霊の群れが…僕は、愛されてたんだ…ね」

「至当です。君は誰よりも慈愛に包まれてその命に恵みを与えられたのだから」

「サリエリ、今日僕の誕生日なんだ…だからこの日を選んだの？」

「いいえ。ですが…おめでとラヴィくん」

微笑むサリエリの表情が、以前とは違っていることを彼は気付いているだろうか。

「いいよ、白々しいし…」

俯いてラヴィは目を閉じ、これから失ってゆくものと得られるものの価値をぎゅっと噛み締める。

「私は、ディーアと…彼女をそう呼んでいました」

「……ふうん」

「君は彼女にとっても似ています。性格も…そう、私は君に彼女を重ねて育てた」

「ならディーアになって、相当性格悪いや」

「そういうところが、大好きなんです」

余裕で交わすサリエリを睨んでやる。迫力なんて全然ないことも分かっているけれど。

「だったら…僕、女に生まれてたら…そしたらお前、それでも僕を殺そうとした？」

突拍子もないラヴィの問いに、サリエリは視線を逸らして一度咳払いする。

「ラヴィくん、そんな不毛な質問には答えられません」

「……ばか。適当言って、さっさと促せばいいのに。へんなどこ真面目だよ、サリエリは」

「ラヴィくん…?」

不意に、今度はとても静かに微笑む彼を、サリエリは瞠目する。

「僕はお前に　　望みでは無く『願い』を、ひとつ叶えてあげるから」

n e x t

## 蒼翼の欠片

それから彼は、ニッコリと作り笑いして目途へ、女神に向け歩き出す。

何度となく触れた細く柔らかい薄茶の髪が、風にふわりと泳ぐその後姿を、もう呼び止めることは許されない。

愛しているから殺してしまうなんて、どうしようもない自我を狂ってはいないと？

「いいえラヴィ。充分過ぎる狂人ですよ、私は」

君はどうして、全ての過ちである私を愛せるのだろう。

君が苦しむのも、耐え難い痛みに身体を丸め遣り過ごさなくてはいけないのも、そんな風に笑っていなければならぬのも、それらは全部私の所為なのに。

「待てよっ、翼有種っ！！」

真意までは、計り知れない。

どんなに君を解っていても、心の底には触れられない。

「サリエリ…っ！ オマエ腑抜けっ！ ナニやってんだ

よっ ! ?」

胸倉を掴み取って身体を向けさせるシエラの後ろで、されるがままのサリエリにクレイドは目を細める。

「……どうすればいいのか、分からないんですよ…私も」

「…っ、もういいっ ! ! 所詮オマエも神には抗えないただの人間ってことだ」

激昂して、シエラは掴んだ衣服を投げやりに突き放した。

「ボクは違っっ ! この神の力でボクはアイツに…っ」

「シエラ」

吐息まじりに、少し首を傾けて数メートルの間合いにラヴィが立っていた。

「……お前煩い。そんな大きな声で誇示しなくても聞こえてるよ」

「黙れっ、オマエこそさっきから勝手なことばかりっ」

「まったく…わざわざ戻って来たり、あっちで待ってんのに。僕だっつて格好つかないよ」

今度はちゃんと聞こえるくらいの溜息をわざと零してから、ラヴィは同じ顔をした彼を見定める。

「僕は殺されるつもりは無いよ」

そう告げてゆつくりと視線を、もう一度サリエリに移す。

「僕はお前に殺されるつもりも、お前を殺すつもりも無いから…サリエリ」

「……ラヴィくん」

「シエラ言ったよね？　これはゲームだって。僕達が盤上のコマなら今動くのは僕　でもってこれでチェックメイト」

「それで？　誰が勝つ？」

「誰も勝たない」

「はあっつ？　？　オマエ阿呆かつ、勝敗つけなきゃ意味ないだろっ！　」

「そんなことは無いよ。勝利じゃなくても得られるものはある、シエラにもちゃんとね」

「白黒つけるって言ってんだっ、そんな曖昧なものに興味なんか無い…っ」

「……チェスじゃないの？　なんだオセロだったのか」

シエラのかめかみからピキピキいう音が聞こえてきそうで、クレイドが含ま笑いする。

「まだ分からないの？　シエラは僕にはなれない、その力だって

似て非なるもの」

「煩いつ　！　！」

「気付かないフリしてるだけ　？　シエラが本当に欲しいのは僕の命なんかじゃないでしょ…っ　？」

「煩いよっ　！　御託は死んでから言ってな…っ　！　！」

焰黒、禍々しい漆黒の塊がラヴィに向け放たれるが、微動だにせずそれは彼の目前で造作も無く掻き消された。

「…っ…　！　？」

「僕の本気はね、あんなものじゃないんだ。言ったでしょ、君とは比べようがない　　グリモワールはこの地に二つは存在しない」

「クスッ…　　いいよ」

シエラの理解し難い言葉と笑みに、腕を捕られたままのクレイドは眉根を寄せてラヴィに視線を置く。

「だったら…　　だったらで方法を変えればいいんだ」

無表情、それが相応しいかどうか。シエラとは対照的に顔色一つ変えないラヴィの意図を汲めず、クレイドは些か焦れる。

「方法とか、無いから。シエラの思う様にはならない」

「……オマエ、弱点とか無さそうな無敵っぷり発揮しちゃってるけど？ 王手を宣言するのは早いよ、カラク・ラリスはボクが持つてんだ」

「だから何？ そんなの理由じゃない」

「そつだよねえ……くれてやってもいいよ？ でも、」

蒼に耀くそれを手に取り口元に、ニヤリとシエラが嗤う。

「げっ！ ……ウソだろっ？？」

有り得ない光景に、エドガルドが思わず声を発する。

ゴクリ。と  
口を開けて、シエラが石を呑み込んだ。

「欲しけりゃ、クレイドの身体ごとボクを貫きなっ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

身体に纏いつく湿った風が、この悪天に一頻りの雨を予測させる。

「一つはボク、もう一つはクレイドが持ってたんだし、一石二鳥だろ？ 翼有種」

「なんて無茶苦茶言ってますかあの天使っ、ラヴィ様がそんなこと……って、カジカ殿？」

フラリと歩みを運ぶカジカが、緩徐にラヴィへと向かう。一際に強い風が吹き、遠く懸崖に打ち付ける波濤の音が耳を翳める。

「……カジカ」

彼女は真っ直ぐにラヴィを捉える。赤茶の瞳に、ただ彼だけをおさめた。

「ラヴィ様」

すっと、腕を伸ばしてその背を抱き締める。愛おしむ様に、両腕でぎゅっと包み込む。

「大好きよ、ラヴィさま…私ずっと貴方が好きだった」

まさかの展開に、エドガルドがキョロキョロと皆の反応を見る。誰一人表情を変えないことに、知らぬは自分ばかりかと、ただ首を傾げる。

「私のこと、愛せませんか？ みんなに優しい人だつて分かつてる…でもそれってズルイです、期待してしまうもの…あの時だつて、大怪我だつたのに貴方は自分より私を優先してくれた」

「カジカそれは…っ」

「貴方は自分の命より私が生きることを選んだんだよっ！？」

どうして…どうしてよ…っ、愛せないのに何で助けたりするのよっ！！」

「カジカ…」

「私が人間だからですか？ 貴方と同じ時を歩めないから？ 私が同じ翼有種だつたら…だつたら愛してくれますか？…？」

身を振り、横顔に近づく彼女の指が頬に触れる。そのまま横様に振り向かせ、カジカは彼に口付けた。

刹那に、閉じた唇は噎び、抑えきれない情念が吐き出される。

「 答えてよ…っ」

それはラヴィの目前に穏当な程、光りを孕んで犀利さを見せ付けた。

答えなんて、

突き付けるそれを見れば、彼女がその答えを知っていることを、エドガルドにだつて容易に理解出来る。

カジカの手にしっかりと握られた鋭利なそれを、ラヴィはただ見詰めて、触れる刃先の冷たさを覚りながら薄らに唇を開いた。

「 愛せない。君への想いは愛とは違う」

言葉は返らない。

ただ一度、短刀を持つ彼女の手が揺るぎ、ぎゅっと握り返した。

そうだね、

それが君の答え。

そしてそれは、僕の罪

。

「さあて。この状況、どうする？ 翼有種」

雨粒が、足許に濃灰のしみを落としたり。

目の師は両腕の自由を奪われたまま、黙してただラヴィを見据える。

「面白くなってきたじゃん？ みんながオマエに期待してるんだ、見せてあげれば？ 本当のオマエはこんなにもグロイってところさ」

降り出す雨は神が嘆き零した涙だと、人が幼子に読み聞かせる物語。

「平気じゃないフリなんてもうやめなよ。オマエは数えらんないくらいの屍、踏んで今そこに立ってんだろ？」

違うよ、神は無慈悲。

一滴の涙もくれたりしない。

「……そうだね、間違っていないよシェラ」

もう一つ、ラヴィの咽喉元を付き付ける鈍色は、愛憎のかたち  
憎悪の象徴。

「クレイド将官、カラク・ラリスを天使に渡して」

「身を挺して護った男に、今度は自分がその刃を向けるのか…ホン  
ト女つてのはワカラン生きモノだな」

「そんなこと無いわ…。だって、ここに居る人達…みんな何処かが  
狂ってるもの。みんなね、この人が欲しいのよ」

「俺はいらんけどな、こんな泣き虫。…で？ 石を渡してお前は  
どうするんだ？」

「私の願いを叶えてもらうの。最初からその約束だったから」

想いの在り処が悲鳴をあげる。

その言葉も優しさも微笑みも…全ては何一つカタチを成さない目  
に見えない心の記憶。

神は願いを叶えてはくれないよ。

ただ祈るだけでは、何も起こりはしない。

それは奇跡じゃない、

神の所業は人のそれと同じ。

どんなものにも、その代償は存在するのだから

だから、ね、

「カジカ…君の願いも、叶うか、な」

不意に絞り出された声は、か細く彼女の耳に届く。

「…私のっ、私の願いはっ…」

それでも。

「師匠僕は、信じることでしか…他には何も…だから、」

「それら全てを、お前は受け入れるか？」

クレイドの苦言に、こぶしをぎゅっと握り締める。

「ごめんなさい、師匠」

水平に持ち上げた左腕、ラヴィは俯いたまま硬く結んだ手の平を広げる。

「…それは、違っただろ」

噛み締める唇、真意と行動が伴わない痛み。

そして。

「成せ クレイド・グレイ」

「悲しいの、間違いだ」

陸離として光彩を放つ粒子の凝集。銀の光は閃光が瞬き、そこに剣が形成される。

「待って、何をするのっ！？」

予想だにしないラヴィの選択にズレが生じる。  
それは有り得ない答え、彼ではない選択肢。

「翼有種…っ！？」

「動くなよ？ シエラ 望んだことだろうっ？ お前がな  
っ！！」

ほんの少しの誤算から、全てが狂い出す。

迷いの刹那は、容易にラヴィから解放を与えた。姿勢を落とし、構える剣の切っ先は肉を裂き、手に伝わる重い感触を味わう。

そうじゃない。

これから僕は、ここに居る全ての人を欺くのだから。

「ラヴィ様…っ！！！」

名を叫ぶ声を後目に、躊躇わずクレイドの腹を刺し貫いた。

「……お前にしちゃ出来、これでいい…馬鹿弟子」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

神についてここで書かれていることは、あくまで「その」のお話でのことですからっつ。

ぶんぶん怒ったりしないで下さいね。

## 蒼翼の欠片

ごめんなさい。

『 奪いますよ？ なんかことしたってね』

『 へえ？ 強奪する根性あんのか、お前に』

騙して、ごめんなさい。

『 ……もう、形振り構ってられないから。』

師匠、』

『 あん？ 』

「 師匠…僕は、貴方が 」

つつめく声は、遠い波の音にも消されてしまいそうなくらい細く、それでもしっかりとクレイドには届いた。

「 ……ラヴ、イ…おま、え…？ 」

その中に含み持つ本当を、確かめる様にクレイドが呟く。  
何も返されない。

ただ剣を握る両の手に、もう一度力を込めて深く穿つは天使の肚。

「 翼有…っ、だって…オマエは… 」

「お前はこんなことする奴じゃないと思ってた？ 愚の骨頂、笑っちゃうね」

その口元からは冷笑が漏れる。

「ヘタクソ。呑み込めるワケないじゃん、あんなトリックで僕を騙せたつもり？ けど、ご希望通りにはしてあげたでしょ？ シエラ」

クスリと鼻笑い、シエラの隠し持つカラク・ラリスを取り上げる。

「僕の方が上手い」

「！？」

「これで二つ。揃ったね」

「オマエ…っ！！」

「片方を持っていたのは僕。師匠のはダミーだよ、僕のピアス」

「…ラヴィ…っ、お前ちよっ…待てっ！！」

一度だけ、クレイドに面を向ける。一度きり、真っ直ぐに師を見詰めて背けた。

「ばいばい。シエラ」

力任せに剣を抜き去り、そのまま駆け出す。

「……許さ、ない…許さないっ　！　！　翼有…っ　！　！　」

視界を掠めるサリエリの姿に唇を噛み、踏み締める様にしてラヴィは女神へと向かう。

「……ラヴィ…君は」

何故君は、私に殺せと命じない？  
なぜ、君は私を

「どうして…望みではなく、願いなのですか…っ　！　？」

やたらに。

荒れだす波の音と、降り出した雨がかしがましいくらいに耳を支配する。

「煩くしないで…大丈夫だよ、真底は変わらないから」

だからあと少し、もう少しだけ静かにこの想いを、たくさんの人に謝罪を

「シエラっ　！　…駄目だっ行くなっ　！　！」

「よくもボクをっ…こんな屈辱　！　相打ちだって構うもんか…っ　！　！」

クレイドの制止を振り切り、走り出すシエラが剣を作り出す。  
この痛み、

この汚辱、許されるものか。

「違うっ…アイツはわざとお前を…っ、シエラっ　！　誰か  
ソイツを止めろっ　！　！」

上手く動かない身体に苛立ち、クレイドは地面を叩く。

「行くな…っ」

それが彼の望みであつても。  
いいや、

「そんなもんが望みだつた訳じゃないだろうっ　！　？　ラヴィ…  
っ」

女神の目には見えていただろうか？

僕達が生きて成し得てきた、たくさんのことを。

「　　ディアーナ、貴方の瞳は僕と同じ翠なの　？」

そつと、石の姿の彼女に触れる。

「だって…サリエリが言うんだ。貴方と僕は似てるって……」

微笑み、指をその背に、欠けた翼にカラク・ラリスを添える。

「サリエリの望みは…貴方が目覚めたら、きっと消えちゃうね」

寄り添い、その頬に口付ける。

「僕は、幸せだったと思うよ……だって、」

だって今は、

「少し…怖いんだ」

震え出す指先をぎゅっと握り締めて踵を返す。

迫るシエラを見定めて、ラヴィは剣を持ち構える。

「……クレア」

ラヴィ。

知ってる？ 翼有は自殺出来ないのよ。

永い時を生きるかわりに、その生を自ら絶つことは出来ないんだって。

「そんなことは無いよ……方法なら、あるんだ…クレア」

n e x t

## 蒼翼の欠片

愛しい君に、

この錯雑とした想いを伝えられなかったことを。

「クレア…君に逢って話せなかったことは、後悔…かな」

切り岸に立ちその時を、瞼は伏せずに見ていようと思った。

望まれても、望まれていなくても、自分はこの行為を許してはならない。

「よくも…っ！　！　オマエの好きになんかさせないっ

！　翼有…っ　！　！」

最期まで、自らを決して許してはいけない。

生きるのを止めてしまうことは、どれ程のことなのか。

その所業を、この目に焼き付けておくだけではまだ足りないけれど。

「ぼく、は

震える唇を無理に開き、笑ってみせる。

これが最後の嘘。

「死なば諸共っ…　　翼有っっ　！　！」

僕の時間が、もうすぐ止まる。

刺し構えるシエラに悟られない様、斜に持つ剣をギリギリの所で下ろした。  
金属音、鉄が地に落ち当たる甲高い音がしたあと、シエラの耳元に押し殺した痛苦が漏れる。

「 な、ん…っ ！ ？ 」

吐いていきそびれた息をするシエラの肩を強く鷲掴み、ラヴィはその瞳に彼をおさめる。

「 我ながら見事な程合い      でもまだだ…っ、躊躇って、んの…  
？   根性なし…っ 」

「 ……翼…有 」

「 急がないと師匠に…かけた術…解けるだ、ろ…っ 」

「 術…っ ？ オマエ… ！ ？ 」

シエラの遅疑を振り払わせる様、無理に抱き寄せ彼の身体を強く引き付ける。

「      もっと深く、貫けっ…シエラっ ！ ！ 」

神は、満足しているだろうか。

貴方たちを欺き、人を騙った      哀れな女神のその子は、

誰よりも神に愛され、誰よりも神に嫌われる存在でなければならな

い。  
だから、

「……ありが、と……ごめんねシエラ　お詫びにお前の願い、叶える……から」

その最後の采配を振るうのは、  
誰でも無く、僕。

「オマエ……なん……っ、なんでこんなこと……っ　！！！！」

「黙っ……て、今最後の術……あと……すこ、し……」

シエラの手から剣が消え失せる。胸郭を貫いたそこから溢れ出す真紅を無意識に塞ぐ様に押さえ付けて、ラヴィは漸うとここで目を閉じた。

「翼有っ　！！……おいつ　ラヴィ……っ　！！！！」

そんなことをしたって血は止まらない。脈を打つ度に噴出す程の出血と痛み表情を歪めるラヴィに、堪え切れず腕を掴んだ。

「痛っ……あ　ば、かつ……」

「え」

バランスを崩し、グラリと身体が後ろに倒れ込む。その背にあるの

は、はるか下方に見える海。  
最初から、全部が終わったらここから飛び込むつもりではいたけれど。

「……間に……っ合え　！　！」

天使まで一緒なんて想定外。

渾身で初めて自らの意思を持って膨大なる魔力を解放し、術を完成させる。

神の持つ力であればこそ、叶えることの出来る御業　　。

最後の、奇跡。

「　シエラっ……翼を……っ　！　！」

「……っば、さ……？」

落ちる速度が緩やかになる。白い、純白の羽根が一枚、はらりとシエラの眼界に舞った。

「立派だよ……その翼、で……シエラ　　帰れ……っ」

誰にも何も言わせない、神が造り変えしそれは、リングを持った真正銘の御使い。

バサリと広翼するそれを認めて、掴まれた腕をある限りの力で断ち切った。

「ラ……ヴィ……ラヴィっ　！　！　！」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

その綺麗な深緑の瞳を輝かせ、幼さの残る顔付きが満面の笑顔を作る。

回顧する往昔。

『師匠つ、僕はいつか…たくさんの人の役に立てる術師になりたいですっ』

それがお前の望みなのかと尋ね返すと、尚も笑みをこちらに向け、直向なままに彼は頷いた。

五、その瞳に映るものを。

「……あら……雨が」

降り出したばかりの雨が、不意にそれをやめてしまったかの様に止んだ。

夜雨になるだろうと思っていたのにと、首を傾げて空を見上げる。流れる早さの雨雲が一点を打ち開き、夕月の淡い光が半天からじん

わりと広がり出す。

「きれい…不思議な空ね」

美しい光景…それと同時に、何か例え様もない物悲しさがする。

「あつ　！　姫さまっ、ボクたち凄いの見ちゃったんだっ」

後ろから甲高い声がして振り返り、駆けてくる幼い子供二人に表情を強張らせた。

「こらっ、また宮殿の方に行ってたのね　？　見付かると大変だっ  
ていつも　」

「ごめんなさいっ、でもねっ…ピカッとお空の方がね」

「空じゃないよ、祭殿だよっ」

「祭殿　？　光ったの…　？」

「うんっっ」

声を揃えて頷く二人に、宮殿のある方角に視線を向ける。

「ここからじゃ見えないよっ、それにもう光ってないよ　？」

例え様もない物悲しさが、胸騒ぎに変わった。

「　？　姫さま……クレアさま　？」

一度かたく結ばれた唇を、ゆっくりと微かに開き呟く。

「……………ラヴィ……………」

びゅんっ、と風を切り、海面すれすれで捕捉に成功する。

バシャバシャと、何度か海水に片翼を濡らしながらも、再び上昇しバランスを保ちながら飛行した。

「……………間に合った、か」

飛竜の背に横たわる彼を抱えて、その有様に間に合ったは適当ではないと、エドガルドは口を噤んだ。

一目に、絶命だと分かる。

「……………死ん……………死んだのか……………？ おいつっ」

真白の羽根と黄金色のリング。天使の可視は初めてだが、取り戻した彼の元の身体は術師らに聞いていた通りの姿だった。

「……………とにかく、祭殿に」

とにかく。彼は人よりも生命力に長ける種族であることに一縷の望みを残こそうと思った。

笑顔が見たいんです。

『人が…笑ってるのは、とても幸せなことでしょう？』

「ボケが…っつ ! !」

飛竜が祭殿に降りるや否や、クレイドの投げ掛ける一声は怒号そのものだった。

血にまみれた身体の、傷のある場所を一瞥しこぶしを握る。

「メガネっ ! コイツの印は何処なんだっ ! ?」

足が前に進まない。幾度も彼の側に近付きたいと、足を動かそうとしているのに。

「知ってんだろ…っ、答えろっ サリエリっ ! !」

答えない、答えられない。言わずもがなであることは分かっていたから。

「クソがっ ! ! 信じるっ…そう言ったのはお前だろうがっ…死んでんじゃねえ…っ…ラヴィっ ! !」

「クレイド殿、私はこのままラヴィ様をクレア様の元へ運びます。あの方なら…クレア様なら……」

再びラヴィを抱えて言うエドガルドに、クレイドが頷いた。

「頼む」

「はい。…貴方は、大丈夫なのですか？ 傷を…」

その腹を、確かに貫かれていた筈なのに、痛む様子もないのは不可思議であった。

「……全部コイツの演技だ。あれは魔法剣…痛みも血も全部が幻影」

「あれが…まぼろし……」

口をつくシエラの表情は困惑の色を濃くする。

、 僕の方が上手い、  
今になって、その意味を理解する。

「今更そんな話してもしょうがない。一先ずは急げっ、俺も後を追う…場所は？」

言い掛けたエドガルドとクレイドの間にシエラが割り込む。

「いいから行って。ボク知ってるから…案内するよ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

とりあえず一発殴らせる。

と、殴った後からクレイドが口に出した。

ズレた眼鏡を外して手に握る様にして持ち、サリエリはクレイドを視野におさめた。

自然現象の動きが急に止まる。

雨すらも、止めてしまったのだろうか。厚い雲が弾かれた様に広がり、薄らに映る月は待ち構えていたとばかりにまあるい円を描き現す。

「満足…とは言えないな、その顔」

その願いは、間も無く叶うというのに。

「ここに居るのは阿呆ばかりだが、一番の阿呆はアイツ」

にべも無い言葉とは反して、心痛な面持ちでクレイドはサリエリを見据える。

「四人…です、あの子で五人…私は永い時、彼らを殺める為だけに生きてきました」

神と自らの血を継ぎ、その力を与えられた者を殺すだけの目的で生き永らえる。

禁忌を犯した者への罰だと、神が与えたる業。

「殺さない…殺してしまわなければ、彼らは力に溺れいずれ狂っ

てしまう。神の言葉だけではない、私はあの子たちを救いたかった」

「……悪いが、お前のそれは言い開きにしか聞こえん」

「異存ありません…私はあの子を殺す理由を見つけられなかったんです、最後まで」

手の中で、パキンと割れた眼鏡に血が伝い床に落ちる。

「あの子は…っ、どうして自分を殺そうとした者の為に自らを犠牲に出来るんでしょう…っ！？ 分からないんですよ…何故あの子はっ…ラヴィは一度も自分の為にディアーナの力を使わなかったのですかっ？」

捲くし立てるサリエリに表情を変えず、クレイドが間を置いて答える。

「お前が分からんことを俺が分かる訳ないだろう。言えることは一つ、お前にとって…アイツだけが違っていったってことだ。受け取れ」

「………なんで、すか？」

正面に差し出すクレイドの握りこぶしに、一応は手を伸ばしそれを凝視する。

「万に一つでも、アイツがまたお前の前に現れたら……そしたらお前がそれを返してやれ」

零れて手の平に落ちる小さな碧い石を、そっと握り締め堅く目を閉

じる。

「私は……っ……ラヴィ……っ」

刹那、踵を返しかけたクレイドが堪え切れず彼の肩を掴み取る。

「そんなになるんなら……っ、何故お前あの時一度きりでやめなかつたっ！？ アイツの想いもっ……自分の感情だって知っていたんだろっつ！？」

責め嘖むこれに言葉も返せないことは分かっている。ぞんざいに肩を払い、クレイドは背を向けて歩き出した。

「……クレイド」

「案内しろ、シエラ カジカ、お前も来いっ」

座り込んだまま動かないカジカの腕を引っ張り上げて、無理矢理に歩かせる。

「逃げるなっ。お前は最後まで見届けなきゃならんっ、分かるなっ？」

返答は無い。それでも自らで歩み出す彼女に、クレイドは黙して祭殿を後にした。

宮殿を遠く側面に、生い茂る木々に隠される様にしてある洞窟。  
この地を熟知している者にしか見つけ難い場所に、ひっそりと生き  
残りの翼有種らが鳴りを潜めていた。

どちらの国にも付きたく無い者。

この力を利用されたく無い者。

この地を離れたく無い者。

その中に、スウエズール国から逃げ出した彼女が居た。

「 クレア様っ ！ ！ どちらにいらっしやいますかっ

？ クレア様っ ！ ！ 」

「 エドガルド様っ ？ どうされたんです大声……………」

入り口で声を上げるエドガルドに、見た目にも相当年老いた男が姿  
を見せるが、彼を見るなり途端に口を噤む。

「 ランドロフ殿っ、 急ぎクレア様にお会いしたいっ 」

「 …………… エドガルド殿、 その…何が 」

彼の抱えるそれに、老人が目を瞠る。

「 説明をしている時間がありませんっ、とにかくクレア様を…っ  
！ ！ 」

胸から下を血に染めた少年は老人の目にも息があるとは思えない。

近付き、よくよく顔を覗きこむと首を横に振る。

「翼有、ですね。しかし…エドガルド殿……この者はもう息をしておらぬ」

「分かつ…分かつてます。ですがこの方は…っ、もういいっ！  
！こちらで探しますっ」

失礼、と老人を避ける様にして中に進むエドガルドの前方に、その彼女が立っていた。

「クレア、様」

n e x t

## 蒼翼の欠片

それでも、

それでも私達は祈るだろう。

この悲しみに救いと、心からの拠り所を求める為に

。

神よ

どうか、愛するものをお救い下さい。

微かに開いた唇が、形作り言葉にした。

声にならなかったのは、今は届かない想いの顕れ。

ばか、ね。

不器用な人。

貴方は、

「心まで、諦めてしまったの……」

抱えられた彼に、たたずむ足を前に進め、手を差し伸べてその頬に  
触れる。指先が震えていた。

「強いふり、してただけなのね……いいのよ、当たり前だもの、一  
人で歩くのはとても怖いことだから……」

長い髪が触れるくらい近くに顔を寄せて、クレアはラヴィをいとお  
しげに包む。

その身体は少しも動きはしない。閉じた目が彼女を見詰めることも、両手におさめ抱き返してあげることも無い。こんなに近くに、互いに顔を向かい合わせる距離にいるのに、まだこんなにあたたかいのに、乾いた唇は何も語りはしない。

「クレア様……」

ゆっくりと膝を落として、エドガルドは目を瞑った。

二人を、こんなかたちで逢わせてしまったこと、悔恨の情に責められる。

「ラヴィ」

その手はまだ震えていた。けれども彼女の目は翳ることも、涙すらも見えはしない。

「でもね、」

強い耀きを以って告げる。

「信じてる。だからラヴィ」

私はまだ諦めないわ」

今はまだ、そのときでは無いのだと。

決然として永訣を否定する。

「まだ終わりじゃない……っ」

明言は、彷徨う闇の最中を照らす一筋の光の様だとエドガルドにはそう思えた。

「ランドロフ、癒しを使える者を集めて」

横たえ、血に染まるシャツのボタンを外しながらクレアが告げる。  
老いたる所為ではない、耳を疑う言葉にランドロフは彼女の行動にも訝しげて訊ね返した。

「姫さま何をなさるおつもりで……？」

「彼を助けたいの。だから皆に協力を」

「ご正気か？ 幾ら貴方様でも……」

ボタンに手を掛ける彼女を制する様に腕を伸ばした。

「この者はもう死んでおりますっ、死者を蘇えらせることなど出来ぬことは……言わずともご承知でしょう？」

「離しなさい……っ、傷を塞ぐの」

「ランドロフ殿、急がねばなりません 何故なら、この方は……」

言ってしまった方がいいものか、ギリギリのところまで悩むが協力して貰う為ならば背に腹はかえられない。エドガルドは深く息を吸い、吐き出す勢いで言い切ろうとした。

「アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファルス……  
彼の名です」

口をついたのは彼女の方だった。

「……アーシエラルド……ですと？ まさか……」

「いいえ本当よ。彼は……ラヴィは亡き父の実子  
私の……私の弟なの……」

もう一度耳を疑う。しかし確かに聞き届けた言葉が間違いでは無い事を、彼女を知る者には嘘でないことは明白だった。  
足許の彼を見定めようと視線を移し、細く息を漏らすランドロフにエドガルドが彼女の言葉に続けた。

「この方の素性を知る者は少ない。理由は……」

これが真実であれば、その理由は一つしか思い当たらない。

「グリモワール、なのですな」

「如何にも」

「気は……動転しておりますが、納得致しました。すぐに皆を集めて参ります」

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

馬鹿ね。

なんて、死んだ奴になんてことをクレア嬢つつ。

でもこれしか思いつきませんでした。

女は土壇場に結構強い生きものだと思ってます。

生命を生み出すもとなる身体を持つ女性は、いつだって男性の支えなんだと。

だから男はそれを護る為に強くなれるんじゃないかな、と。

ぎゃあつつ、うさこらしくない言葉を吐いてしまったよ（笑）  
恥ずかしい…。

## 蒼翼の欠片

五人目の子が、その扉を開いた。

全てのものの、母となる彼女の目覚め。

雲間に覗く月、眼下に落ちる明かりが、気の遠くなる程永い時を解放する。

「そう、君は隠れるのが得意だった」

その美しさであれば、ただ立っているだけでも花たちが嫉妬する。

言葉にならないくらいに麗しさと、不意に見せる凄艶さは些少とも人に似ていた。

なのに君は恥らって、いつも姿を包み隠す。

けれども。

「私は君を見付けるのが得意でしたね」

月読みの女神。

「……ディーア」

真白な肌が、誘う。

翡翠輝石の瞳が月の光りに照り返す。

「私を恨んでいるか……サリエリ」

開いた口から告げられた最初の言葉。

恨むとか、憎むとか。

愛しているとか、もう愛していないとか。

「分かりません」

君への想いは、そんな感情では答えられない。

「正直言つと、今は何も考えられない」

「ここに、私がいるのに？」

白い美貌が翳りを見せて、僅かに首を横たえる。

「デューア……」

「嘘。全部知ってる……何度も何度も心を殺して見てきたからだから、私からは貴方に触れられない。触れてはいけない。」

幾らそれを乞おつとも、貴方を抱き締めてはいけない。

「泣いていたよ……あの子。そなたに愛して欲しくて、ずっと震えていた」

『望みは……貴方が目覚めたら、きっと消えてしまつから』  
自らに死を選び取らせた者の、最後に見せた切なる笑みも。

「酷い人。お前にはそれが出来たのに」

「ええ」

能わずと、静謐な面持ちを向けるサリエリに女神は視線を落とす。

「……酷いのは、私だ　驕慢に……いや、それらを言葉で尽くすくらいでは……それでは足りない」

「デューア、解っていたことだ。目の当たりにして今更懺悔なども痴がましい」

「サリエリ……」

「それ程に　私が君を愛していたことは事実。ただ身勝手に、世界の何かを変えてしまっても構わないと……堕ちたのは誰でも無く私なんです」

神の怒りにふれて、一番苦しんだのはダレか？  
それを問えるものが、もうこの世界には存在しないのに。

「最初の子を殺めた時、生きる資格の無い者が永劫の命を与えられている滑稽さに笑ってしまいました」

狂う資格すら、無い。

「サリエリ……」

「陋劣されて然り、なのに……恕すと何故言える？」

「　　待て、サリエリ」

月と同じ色沢の長く美しい髪が目前を翳める。

「戯けか。そなたばかりが人非人みたいなこと言うのだな」

翡翠の目を眇めて、ディアーナが反駁する。

「あ。今、そりやお前は女神だからって言ったぞ。目がそう言った  
っ」

正面に立って腕組み、睨み付ける彼女をサリエリが見返す。

「神なんてクソ食らえだろう。こんな贖罪しか与えられない愚かな  
生きモノなんぞ、捧まれる価値もない」

「贖罪…？」

「そつだ。馬鹿な兄上が与えた尊き御慈悲だそつだ。何も分かつて  
ない…人がどれだけ情に溢れたものなのか！ 誰かの為に身を犠  
牲にすることを、どの神が出来るっ！？ いないな、はつきり  
言つて」

麗しき眉宇を顰め確言するディアーナに、吐息でサリエリが返す。

「言ってることが、よく分からない…ディアーア、君は…」

「つまり、だ。今この時こそが贖罪、私に永遠はもう無い」

「な、ん…？」

彼女の料簡は今一つ掴めないが、最後の言葉だけは理解出来た。

「神を捨てようぞ。サリエリ」

「デーーア……」

「なんだ？                    ああそつだ。変わらず好い男だな、お前は」

くちびるをきゅっと引き、泰然と女神が微笑んだ。

n e x t

## 蒼翼の欠片

悠然と見せ付ける美、風にたゆたう髪に白い指先が伸び撥ね上げる。

「今…この時？」

両手を組み合わせて持ち上げ、背を伸ばすディアーナに訊ね返す。

「そうだった。一夜の目覚め、太陽と顔をつき合わせることは無い。お前とも今夜限りで別つ…然りとて哀しくもあるまい？」

言葉にならず、黙したまま彼女を見詰めた。

「馬鹿げてるだろう？ 兄上はご満悦の様だがな」

月光に映える形のいい唇が、笑みを零した。

「だからだ。兄を欺くよ。私は人が好きだし、何よりもお前と残した証であるあの子を」

するりと、脇から背に回る愛しい男の両腕に包まれ、彼女の視界をその胸が埋め尽くした。

「……同じことを言うんだね、君も」

一度きり、その美しい頬をこわばらせて、彼女はじんわりとその緊張を解く様に双眸を伏せた。

「私はお前に抱かれる資格はないよ」

「相等しく…ですが私はこれでも人なので、欲求には逆らえない」  
哀切な表情で微笑むその男の胸元にそつと頬をすり寄せて、伝わる鼓動に耳を傾ける。

「便宜だな、人とは」

「デイーア…だから人には永遠と言つ言葉がある」

ただ信じて望む。故に意味のある言辞。

「その矛盾こそが愛おしいな…サリエリ」

「ええ。ですから、辻褃の合わない者には生き辛い…デイーア私は、」

「待て」

絹ほどの長い髪が、はらりと肩を滑り落ちる。

「解っている。だから口にするな」

「君も相当に都合がいい。悲しむのは私だけ？」

「かつ…かなしい…のか？」

「悲しいよ」

「当たり前なのか？」

「当たり前です」

クスリと笑うサリエリの、らしさとも言つべき隘路さに、懐かしくも齒痒い思いで上目遣いに見据える。

「……本当に、何でそんなに似ているんでしょうか」

「お前がそれを言うのか？ 手を掛けた張本人くせに」

「それですが、本当言うと私は何もしていない。あの子は出会った頃から…今までと一つも変わらないんですよ」

彼女の艶めく髪を掻き上げ、耳に掛けて指でなぞりながら口元を緩める。

「頑固で我が侷なところまでそっくりです」

朱に差す頬を膨らませて、負けてはなるものかと尚も彼を見詰めてやる。

「悪かったなっ、神らしくなくて」

「……違えてる、だからこそ…君を愛した」

敢え無く敗する。心地よい敗北に外した視線を、ディアーナはまあい月に移し変えた。

「……全くお前は、ズルイ男だ」

ただの娘の様に頬を染めて、宵の空に見える朗月を眺めてから、ゆつくりともう一度サリエリを両の目におさめた。

「お前を愛したことを私は非として認めない。従って私は為すべきことをするよ」

「ディーア……」

「サリエリ…私の我が侘も、最後まで理に適って」

痛いくらい強く抱き締められ、ディーアは瞳を揺るがせる。きつとこれが最後の抱擁だと、漏れた吐息から震える声を絞り出す。

「……縛るようで悪いが、愛している…ずっとお前だけを」

「悪くないよ」

「そうか…なら、そうだな……お前の望みを叶えるのも悪くないかもな…サリエリ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

時々、ときどきだけどね…僕は自分がどうすればいいのか、持て余すんだ。

あの日　　。

白い花が揺れ、風に遊ぶさまに双眸を細めて彼は微笑んだ。  
余りに儂い、この花に肖似する危うさに相反する人々の流説を埋め  
合わせるナニかに…。

『…クレア』

私はそれになりたいと思った。

それでも、

貴方は今度はちゃんと笑顔で私を見詰めて、それから抱き締めてくれたね　　ラヴィ。

「……クレア様」

呼び掛けに応えない彼女にもう一度名前を呼び、そっと手を重ねる。

「変わりましたよ、クレア様」

「ローゼ…ありがとうございます、でも…」

ローゼと呼ばれた女性は重ねた手をぎゅっと握り、小さく頷いた。

「平気はもう聞き飽きました。それに癒しなら私も得意です、ね？」

年端の変わらないローゼとは、幼い頃から姉妹の様に仲が良く、彼女の長技が癒しであることも知ってはいた。

「ローゼ、本当に…」

「傷は塞がったのですから…クレア様はこの方に付いた血を拭いて差し上げてくださいな」

「…です、ね。流石に男に身体を拭かれるのは勘弁して欲しいかも…ラヴィ様」

ローゼの隣で水を入れた器を持つエドガルドが苦笑うのを見て、張り詰めていた緊張を解す様にクレアは口元を緩めた。

「お願い」

「お任せ下さい、クレア様…皆も死神が来れぬ様踏ん張ってますから」

誰一人、何も口にせずただ術を敢行してくれることに感謝して、クレアは血で汚れた彼の頬に触れる。

「……死神って、本当に存在するんですね」

「居るわよ。肉体から魂を切り離しにね…エドガルド様は見えなくて正解、酷い風体だし」

そつなく話すローゼに、すっかり苦笑が板についたエドガルドが濡れた布をクレアに手渡した。

「魂はまだここにある。筋肉の硬化だつてずっとクレア様が防いでいるの…この方は死を迎えてはいないわ」

故に、生前と変わらない柔らかい肉体、血液の大半を失われても、不思議なくらいにその容貌は眠った様にも見える程だった。

「ローゼ……ラヴィは、私の弟なの」

ぽつり、と。血を拭う手を止めて、独白の様にクレアが呟く。

「ええ。先程ランドルフさんが興奮して話してたから。王子でグリモワールなんて、エルトフェニアも手放さない訳か」

彼の整った面を伏せがちに、ローゼは見詰める。

「でも…理由が分かって私少し怒ってるんですよ。その所為でスエズールに貴方様を渡さなければならなかった…そうなのでしょぅ？」

と、クレアとエドガルドを交互に見る彼女に、その件について謝り  
尽くしたエドガルドが、俯き加減に申し訳なく何度も頷く。

「しかもっ、どの様な理由がお有りだとしても、ご自分で命を絶た  
れるなんて…っ、目覚めたらその綺麗なお顔を一発くらいは殴って  
差し上げるといいですわっ」

「ローゼ…」

「死にたいと、死ななければならなかった…は、全然違います。で  
もこの方の行為は許されるものじゃない…痛みや苦しみに耐えるの  
は自分だけでいいなんて思ってたっしやる方には、ガツンと言って  
差し上げないと」

厳しくも優渥に療治を献じる彼女に、クレアは込み上げる思いを押  
し止める。

泣くのは、彼がもう一度笑顔を見せた時に……。

「全くだな。」

(……え)

すっと、耳に届く澄んだ声を聴いた。

「遅くなった。我が来たからには 案ずるな、翼有の姫よ」

もう一つ、シャラリと振るう錫杖が高く鳴った。

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

「ふむ。ガツンと言っておこつぞ」

飄々と現れた…が当て嵌まる彼女の訪れに、仰天を超えて奇妙なくらい冷静に皆表向き落ち着いて凝視している。

女神の降臨には凡そ相応しくない出現。あまりにぎつくばらん、率直な立ち居振る舞いと口調。

「……あ、の」

口を訊いていいものかと、頭を過ぎるが答えが出ぬままローゼが口をつくが、それ以上言葉が続かず時間が止まった様に誰一人動けずにいた。

「何だ？ ……よもや我を見紛うか」

女神の問いに、ローゼは思い切り否定する様に首を大袈裟なくらいに振った。

「……ディアーナ様……皆口がきけぬ程驚いているのです」

立ち上がったクレアが、気おくれしつつも彼女に話しかけると、二度程まばたきしてぐるりと周囲を目でなぞる。

「そうであった。我は石…そなたらは善くしてくれたので、すっかり古馴染みの心地でした」

詫びる様な口振りに、クレアも申し訳なさそうにいいえ、とだけ答

えて嚙む。

「……女神、様……？ あの、私にも見えるのですが」

以外に無鉄砲なところがあるエドガルドは、割合普通にそう告げると、ローゼがギロリと睨み付ける。

「見える？ 姿のことか…我は元より目眩ましなど使わぬ。よいか？ 神などは、人に一番近い生きモノぞ」

「はあ……。ああ、それで翼も無いのですか」

「いや、それはある。ほれ」

バサリと広げた純白の羽翼をエドガルドに示した。

「しかしこれはな、愛しい男と抱き合うには…少々邪魔であろう？」

「た、確かに」

「うむ。」

「……ディアーナ様」

躊躇いながらも呼び掛けるクリアに歩みを寄せて、女神は劈頭に返す美しき微笑みを零した。

「姫よ、案ずるなど申したであろう。その者は我がこれより連れ戻して参る、これまでのそなたらの尽力無駄にはせぬよ」

「私は…彼は本当に…っ」

「私の血が少なからずあの者の重荷になっていることは否めない

だが、あの子は好いているのだよ…この世界を」

気丈にも涙を見せぬクレアを真っ直ぐに見据え、女神は言明する。

「生きたいのだ。そなたの行い間違っておらぬ　　なあ…翼有  
の姫」

震えるクレアの肩を愛おしげに、包み込む様にディアーナが抱き寄せる。

「…こうしてまた抱き締めてやればよい。複雑であるのが…そなたの想いもまた我と等しく」

「ディ…アーナさ、ま」

「愛したこと、恥じてはならぬよ…その気持ちは清らかで何ものにも侵されぬ心情」

惜しめない微笑みは心よりの慈愛に溢れる。

声にならず、クレアはただ一度彼女に伝わる様に頷いた。

「さて、いい加減心得て貰わねばな。呑気に寝てる場合ではなからう？　アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファルス」

「いやあ、呑気って訳ではないかと…」

どうやら空気の読めないらしいこの男。勘当同然とはいえ、王子気質は抜けないものなんだと、ローゼが溜息する。

「なかなか面白いな、そなた」

横たわるラヴィを覗き込みながら、エドガルドにクスリと笑うテイアーナのさまを見て、神のツボが分からず首を傾げたくなる。

「残念だが話はここまで　　これより参るぞ。そなたのもとにな」

n e x t

## 蒼翼の欠片

知っているか？

ここは、心を映す鏡となる処。

人は最期に何を思い、何を為し得てきたのかを、剥き出しにする。不寐なくらい、それを自身に見せ付けるのだ。

やがて冥府より迎え来る、死の神を待つ…些少の時に。

「…が。何だそなたは、真つ暗だな…嗜好を疑うぞ」

闇の中で背を丸め、閉ざすその者にあけすけな見解を述べる。

「陰気な。」

その背中に、さつくり酷評を送ってから数秒黙ってみた。

「……何も言わぬのか」

振り向きもしない、何とも可愛げのないことかと、手に持つ錫杖で小突いてやる。

「お前に見せるものなんて無い…いつまで待たせるの」

「はて？」

多少苛立ってはいる様だ。これ見よがしに溜息を漏らしてから俯き加減の顔が少し上を向いた。

「はて？　って、なに」

「考え惑うときに使う言葉だが」

「……あのねえっつ」

至極普通に答えると、髪をくしゃくしゃに掻き乱してようやく顔だけこちらに向ける。

「遅いよっつ、こっちはずっと待　　て……」

「何と。我が来ること知っていたのか」

「て……で……であーなっつ　？　？　？」

「ディアーナだ。」

しゃがんで頬杖を付き、素気無く返す女神が目前にいた。

「因みに正しくは鬱陶しいくらいに長い名だよ、そなたには特別に教えようか？」

「結構です……じゃなくてっ、どーして貴方が……だって……だってっつ、ちよっと待ってよ……」

「忙しい奴だな。待たされて怒って、待たせるのか」

「　　貴方は、サリエリと……」

眩く様にそう言つと、困惑する表情の彼に女神らしからぬニッコリ笑顔が返ってきた。

「まさしく愛する男の名…そうそう、そなたには礼を言わねばならなかったな。起してくれて感謝するぞ」

「サリエリと…サリエリには逢えなかった…の？」

「逢つたよ」

「…はあ。……つて、だったらどーしてこんな所に居るんですかつ」

「アーシエラルド・ラヴィ・クラフィストファルス」

急に改まった面持ちで、彼女はそつと立ち上がる。

「と、これもまた長い名だな。ラヴィでよいか」

つられて立つラヴィが、とりあえず頷いて彼女に目を凝らす。

「ここは暗い。何とかせい」

「……………は…？」

「は？ ではなからう、阿呆かそなたは。暗いからそんなに眉間にシワが寄っておるのだ」

「……………違つと思いますけど」

何を言うのかと思えば。少々げんなりして言い返すと、指先で額を小突かれた。

「戯け。そなたの心根が暗いからこそ暗いのだ、もっと明るく楽しかった頃のことを想起せよ」

「やです」

「頑固な。…ふっ、流石に似ておるな、我の血を引いておることだけはある」

腕組をして頷き笑う女神に、思いつきり否定する様にブンブンと首を振る。何処が似ていると言うのか、自分はこのように偏屈じゃないはずだ……多分。

「面立ちも、な。髪を伸ばせば女だな、まるっきり…ぶっ。」

「僕は男ですっっ」

まあ、実際通してたこともありましたが…とは絶対に言えない。

「ラヴィ。可笑しな奴よの」

「どつちがですかっっ」

「死んだくせに元気なことよ」

「だったら明るくとか楽しいはいらないでしょ…っ、もっっ訳分かんないっ、なんなんですか？ 貴方はっっ」

「ディアーナだが」

「じゃなくてっ　！　…ああっっ、もうっイライラするっっ」

「神だよ　　そなたを甚振りにやって来た、美しき月の女神だが  
…何か？」

n e x t

## 蒼翼の欠片

「死んでも苛められるんだ、僕…笑えますね」

「では笑え」

「……………貴方は、」

「偽善者には簡単なことであろう。笑いたくなくても笑える…辛くても、悲しくても笑うのであろう？ そなたは」

言われて、視線を僅かに逸らすラヴィに、わざと彼女は歩みを寄せてもう一度向き合わせる。

「そうやっていつも、自分だけ辛ければいいのだと捻くれた自己愛にどっぴり浸かるのがおぬしの特技よの」

「何ですか…それ」

「ならば一度でも思ったことはあるか？ そんなお前を齒痒く見ている者の胸中について」

「……………いませんよ、そんな人」

「いたよ。お前は知らずにたくさんの者を傷つけて、馬鹿丸出しで笑っていたんだよ。滑稽な道化さながらにな」

こぶしを固めて深く息を吐き出し、ラヴィは嘲たように笑みを浮かべる。

「可笑しなこと言わないでよ、傷付く？ 意味分かんないし」

「強くもないくせに…騙しきれていたとでも？ 愚かなことよ」

「騙してなんか…っ、それに…僕は強いよ、みんなもそう思ってる」

「言つてて虚しくないか？ 自ら命を捨てた者の言葉ではないよ」

「違う…僕は…っ」

「違わぬ」

「違う…っつ！ ！」

ぎゅっと、握り締めた両のこぶしの行き所が定められず、自身を包む様に交差して背を丸める。

「ラヴィ。然らば何故そのような表情で今いるのだ」

かぶりを振って奥歯を噛み締める。震えだす肩を諫めるようにきつく両腕を握り締めた。

「……………ん…で…」

込み上げるのは憤りそのもの。何故これを、有ろう事かこの女神に言われなければならないのか。

「なん…で…なんなんだよ…っ、神だからってズカズカ僕に入って

来ないでよ…っ！　！　今更そんな話して面白いんですか？  
そんなこともうどーだっついていいじゃないかっっ

「どうでもいいなら話さぬ、ラヴィ…そなたは」

「僕は弱い生きモノだったて、認めればそれでいいの…っ？　い  
いですよ、幾らでも」

「そうではない、感情に走り過ぎるな」

「　　いいえ」

じりじりと後退りするラヴィをとらえようと、手を伸ばすが拒絶が  
その手を払い除ける。

「僕は脆弱です…結局誰一人…僕は誰も、救えてなんか…幸せ  
になんか出来なかった　　ただこの力が怖くて…怖くて怖くて  
それを誤魔化すので精一杯…平気なふりして笑ってないと、僕は  
自分が　　」

「ラヴィ…っ」

次は無理矢理に彼の手を掴み取り、強引に引き寄せる。

「僕は自分が、保てなかつた…た……ディアーナ、貴方の力は大きい  
です。強大過ぎて…僕は……僕が……貴方の所為でどれだけ僕が辛  
かったと思ってるんだよ…っっ」

「すまぬっ」

ポロポロと子供の様に涙を零す彼を、手放すまいと有る限りの力で抱き締めていた。

「すまぬ…っ、ラヴィ」

声を噛み殺して泣く彼をどうしようもないくらい愛おしく思う。

この哀切さは、我が身のみが知り得る叫びであることも。

「……ラヴィ、そなたは人なのだよ…だからこそその苦しみは、喜びにも変えられる　　そうは思えぬかな」

言葉は返されずに、ただ一度だけ彼が首を振る。

「我はそなたを…っ」

面を上げて見定める彼女の目に映るのは、涙の残る顔のまま茫然として笑う彼の姿。

それから、ゆっくりとラヴィはその口を開いた。

「僕は…いいんです、道化のままです　　ここで終わりたいんだ、  
ディアーナ」

n e x t

## 蒼翼の欠片

痛ましくも暗澹たる微笑みに。

「解っておるのに…っ、何故お前はその様にしか生きられなかったのだ」

壊れてしまいそうな身体をもう一度包む様に抱き締めると、彼の手がそつとディアーナを包み返した。

「それはディアーナ　　僕が何であれ人でいたいと…そう願ったからです」

徐々に力を込め、身を屈めて彼女の懷に埋もれる様にラヴィイは身体を丸める。

「僕にも解るよ、貴方も…同じくらい人間に焦がれているんだ。どうしようもないくらい…人を愛している貴方だから……」

「ラヴィイ…」

「だから、ね…さつきはあんなこと言っちゃったけど、本当は責めるつもりも…恨んでもないです。辛かったのは嘘じゃなかったけど、でも僕は…それでも　　」

「それでもっ　　？　　何なのだ　　？」

言葉を途切らせる間近の彼の耳に故意に声を上げて問うと、小さくなった肩を竦めてから顔を上げ、ディアーナに向け破顔一笑を作る。

「何でもないです」

「……ばっ…馬鹿者っつ！　！　何でもない訳なかるっつ」

答えずに、また面を伏せるラヴィの頭に触れる。

「言ったのだよ、そなたは…っ　　死が怖い、と」

彼女の言葉に、ぎゅっと背が強張るのが伝わる。

「不本意だと認めているではないかっ、そなたはまだまだ生き  
」

「ディアーナ」

口許を塞ぐ手の向こうに、同じ翠緑の瞳が見えた。

「やめて」

笑顔の消えたその目から逸らさず、彼女は手を引き剥がす。

「止めぬぞ…っ　！　お前のそれは強情を越えて意固地と言っつのだ  
っ、だがな…知っておろっ？　我もまた直情径行の意地っ張りで  
な」

「馬鹿なこと言わないでよ…意地の張り合いなんて、引き合いにな  
らないよ」

「…ふっ、神を相手に馬鹿とはいいい度胸だ　　よいか？　その

耳、よく掻つ穿つて聞け！　そなたは死を怖れたし幸せだったとも言った。それはつまり生きていたい証であるうっ　！」  
認めよっ　！　と付け加えて、全く神らしくない彼女が息巻くが、反応の薄さに堪らずゲンコツでラヴィの頭を一発殴る。

「しつかり聞けと申したであろうっ、戯けがっっ」

「……分からない」

「何っ　！　？　何処が分からぬのだっ」

「サリエリが貴方を好きになつた理由が…全く」

「な…っ…え　　かつ、関係なかるう…っ　！」

「顔　？　…ぐらいしか思いつかない」

「ぐらいとは何だっ、だからこそ愛したと言ってくれたのだっ…諸々のこと子供には分からぬわっ」

「子供じゃないですよ」

「我からしてみれば、そなたなどまだまだ小僧　　ではないっつ、話を摩り替えるなっ」

やや頬を染めて憤るディアーナに微苦笑を浮かべて、ラヴィは伏しがちにゆっくりと口を開く。

「　　貴方の言う通りです、僕は衷心から死を望めなかった……」

でも、死を選ぶことの方が大きかったです、僕には」

その言葉に、ようやく頑なに閉ざしていた真意を彼女は見付ける。深潭に佇むのは、拒まれることへの恐怖。それが死にも勝る人への  
渴仰。

至りていじらしい彼を愛おしく、なれど、だからこそ己の役柄を違えてはならぬと彼女は取り成す。

「ラヴィ、そなたは本当に子供よの……何一つ分かっておらぬ、人の心をおぬしの尺度で忖度するのは間違っておりますよ」

僅かに視線を上げた彼の頬を、ディアーナはそっと両手におさめる。

「誰一人、そなたの死を喜んでいる者はおらぬぞ」

「そんな訳ない……っ、そんなの……そんなこと……っ」

「嘘は申さぬ、我が今ここに……そなたの前にいる事がその誠ぞ」

首を横に振るラヴィの頬を、半ば強引に正面を向かせ、真っ直ぐな視線を彼に置く。

「そなたの姉は亡骸を前に涙も零さず、気丈にも耐えて待つておる。皆も死の神を遠ざけようと尽瘁しておるのだ」

きゅっと、唇を噛み締めて、どうしようもない痛みを遣り過ごす様にラヴィは堪える。

「ラヴィ……サリエリは待つておるぞ。悔しいがな……今一番その手に抱きたいのはそなたなのだ」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

何よりも愛おしい君を、ただ質実に  
今はただ想う。

声音に、もうわずらいは無い。じっと見詰める翠の両眼を、彼女の偽り無い明言を疲弊した素顔で受け止める。けれど、

「……サリ、エリは……」

こわい。

苦痛と逡巡が心を覆す。断ち切ることの出来ない枷が緊縛する。

「僕は、居ちやだめなんだ……サリエリには、もうあんな思い……して欲しくないから」

つぶやき、繊細な眉を顰めて眼差しを閉ざす。然れども、女神は拘わらずに懐の深い笑みを顕した。

「そなたは、サリエリの格別なのだよ。それに……いや、案ずるなラヴィ。脅威については我が些少なりとも扶けるつもりだ」

不意に、両手が包む輪郭を傾けて、ディアーナの花唇が額にそっと触れる。

「怖れるな。そなたは何ものにも変えられない宝を持っておるのだから」

ぴんっ、とその口づけた額を軽く弾く。

「人として、人を想う心だよ……人間が、あの世界が好きなのだろう？」

「ぼく、は」

「ラヴィ、そなたはそこへ還っていいのだよ」

その微笑みは、人が祈り望む神の慈悲のかたち。許される、許してもらえるのだろうか。

自ら絶ったこれを無きものにする唯一つの　それは奇跡。

「ディアーナ…ぼくは、」

込み上げ、溢れ出す感情が咽喉元を詰まらせるが、声に出し心情を吐き出す。

「たくさんの人に…心に触れて、辛いこともあったけど……だけど、僕はそれ以上に温かさや優しさをもらったんだ……人の笑った顔が好きです、見上げた青い空がきれいだったり…草の匂いを運ぶ風が気持ちよかったです…そんな、なんでもないことが…ぼくは…僕は」

叶えられる、望みは　。

「……き、たい……あの世界に……」

「こらっ、大事なところが聞こえぬぞ。腹から声を出して言うてみよう」

切望に、胸があつくなる。

「僕は、生きたい…生きたいです…っ」

伝い落ちる涙、ふるえる両の瞳がそれでも逸らされずに、しっかりとディアーナを捉えていた。

「聞き届けたぞ、ラヴィ…このディアーナがな」

笑みをたたえ、女神はラヴィの視線を頭上に促す。

「闇はまた光になくってはならぬもの、か」

「こ、れ…星？」

無数に輝く、満天の夜空が広がるそれに目を瞠る。

「何を驚く？ これはそなたが最後に思った世界。我にも存知、祭殿よりの景色であろう」

やっとまともな景色になったと、ディアーナが彼の頭を小突く。

「人の世は、美しいな…ラヴィ」

本当に、なんて眩しいくらいに輝かしく、素晴らしい世界かと双眸を細める。

「戻ろっぞ。愛しき者の待つあの世界にな」

n  
e  
x  
t

## 蒼翼の欠片

呟きに、彼は名を口にする。  
闇だからこそに見えるもの。

もう一度、笑って

多分それが                    それこそが望み。

たとえ傍らに感じられなくても、星が耀ける漆黒にこの一身を。

お帰り                    ラヴィ。

「……動い、た？ ……今動きましたよねっ！？」

指がこんなふうには、とエドガルドが自分の指先をピクピクとさせた。

「本当っ？」

彼の声に閉じていた瞼を皆が開き、クレアがラヴィの手をとって声を掛ける……が、反応は無い。

「ちょっと……本当なんですか？ エドガルド様」

「え、ええ……確かに……多分」

ピクリともしないラヴィの身体に、ローゼが訝しげのまなこをエド  
ガルドに向ける。

「あ、あれ？」

可笑しいなあ、と首を傾げる彼に溜息して腰を落とすのと同時に、  
クレアの彼を呼ぶ声音が変わった。

「ラヴィ……」

もう一度、名を呼び掛ける。

「クレア、様」

そのまま、ローゼも固まってしまった様に、その光景に目を奪われ  
る。

突如として、彼を包む眩耀。溢れ出す、光りの粒子がそこに居る者  
の肌を照り返す。

「ひ、光ってますっ……光ってますよっっ」

袖を引つ張るエドガルドに、いつもなら一言物言うローゼも啞然と  
それを黙視していたが、次に起こったそれ以上の異変に、逆にロー  
ゼが彼の腕を握り締めた。

「……………うそ」

口をついた彼女の横で、エドガルドが身を僅かに乗り出す。

「ええええっっ？？？ラ……ラヴィ、さま？？ですよ、ね」

誰に言った訳でもなく、どちらかと言えば自らに言い聞かせた様なニュアンスにとれる言葉に、クレアが小さく頷いて声にした。

「……ラヴィです、ラヴィ…っ　！　ラヴィっ　！　！」

ここは、君の居た世界。

泣きたくなくなるくらい、大切な人達の住む場所。

だから、ほら　　目をあけてごらん　　？

轟音が、言葉を掻き消す。

待って、聞こえない。

聞き逃してはいけない、貴方の想いのひとつひとつを。

もっと…丁寧に導くように　　だから、

だから待って、

「……ディ…アーナ」

振り絞る、声も力も。

届かない、反則だと憤れるくらいの悲嘆。

「ラヴィ…っ　！　！」

ぎゅっと、握り返した指先のぬくもりと、頬に落ちたのは落涙。薄れて、定まらない視界。

「ラヴィ…っ　」

怖れるな、そこにはお前を愛する者の姿が見えるだろう？

「お帰りなさい、私の声…聞こえますか」

怖くなど、ないのだから。

「……クレ、ア」

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

えっと、ちょっと意味不明な感じ？（笑）

後々に引っ張ってるのです。

すぐ解ると思いますっつ。

## 蒼翼の欠片

足取りをピタリと止めて、視線を横様に流した。  
一際にかかる風にふわりと舞う粒子を指に絡ませる。

「……ふうん。」

「なんだ？」

口にした言葉とは異なる、その中に含まれる趣きにクレイドが訊ねた。

「もうそこだよ。アイツがいる…行けば？ クレイド」

指で示して無愛想に告げるが、月明かりに見えた表情は穏やかに、ゆっくりとその双眸を伏せる。

「シエラ？」

「……一夜にいったい幾つ起すつもりだよ」

クスリと笑い、真白な翼をバサリと現した。

「奇跡なんてのは、めったに起きないからそう呼ばれるんだろ？」

「奇跡？ まさか…っ！？」

駆け出すクレイドに付いて行き損ねたカジカの腕をシエラが掴み取る。

「オマエさあ……」

「離して……っ」

蔑んだ一瞥をくれて、シエラは僅かに肩を上げすまし込む。

「いいの？ アイツはもう本当にオマエなんかの手には届かないよ」

神にその命脈を賜れるくらい尊貴なるものなのだから。

「一人に喜んで貰ったって……って、もともと境涯が違うか」

「あの方はそんな人じゃない……そう、そうね……知っていたのに、愚かだ私は……」

「じゃあナニ？ ありがとうやらゴメンやら……そう言って微笑むとでも？ オマエもアイツを殺した一人だって、ちゃんと頭働かせてよね」

浅薄だと馬鹿にしながら、シエラ自身も皮相な言葉を連ねてもう一度彼女を見る。

あまつさえ強張らせた頬を固めて、カジカはじつと一点を、シエラを見詰め返して唇を動かす。

「微笑むわ。あの人はそういう人」

しっかりとした口調で述べる彼女に、シエラは明後日の方を向き吐息する。馬鹿馬鹿しいと思う、自分もこの女も。

「…あつぞ。」

その両足は震えて、手を離したら崩れてしまいそうなくせに。窘めておいて何だが、人とは虚勢ばかり張る面倒臭い生きモノだと、本当につくづくそう思う。

「まったく。煩わしいよ…オマエらも、アイツも」

この煩瑣とした人の世も。

「ほんつとに…馬鹿げてる」

そう言つて、ふつとシエラが笑みを漏らした。

「あの…適当に見繕つてきましたが、コレ似合うでしょうかね？  
ラヴィ様に」

血のついた服を着替えて戻ったエドガルドが、ありあわせにと持つてきたブラウスをローゼの前に広げて見せる。

「何処に服なんて置いて…：…と言うか、エドガルド様のだと大きいんじゃないかしら…：しかも必要以上にぴらっぴらな」

いつの間に私物まで持ち込んでいたのだこの人は。やや呆れ気味に答える彼女にエドガルドが詰め寄る。

「なっ、なんですかっ？」

「本当に目覚まされるんでしょーかね？」

「当たり前でしょう？ 心臓だって動いてるんだし、そもそも一度目を覚まされたじゃない」

確かにほんの一瞬だが目を開き、姉の名を呼んだがそれきりまた気を失った様に眠ってしまった。

「そう言えば…クレア様は」

「あの方も着替えに。無理矢理行って頂きましたよ、心証よくないでしょ…目覚めて姉君にご自分の血が付いてたんじゃ」

「ローゼって、ラヴィ様に…そのキツイですよね、あたりが」

「そっ、そんなことは…っ…曲がりなりにも王子っ、だしっ？」

「曲がり…」

ちらりと、奥の間に眠るラヴィの方に目をやる。

「失言ですっ、忘れて下さいっ」

「あ。私も曲がりなりにも王子、なんですが…」

「だからなんなんですかっ？ 存じてますっ」

「……ローゼって」

「な、何っ？」

「案外可愛らしいですね。照れ屋だって判明しました」

「殴りますわよ？ エドガルドお・う・じ・さまっ！

「！」

「はははは…っ」

この人は、本当に何なのだと深い溜息を漏らしたローゼの隣に、腰を落としたエドガルドもまた吐息する。

「………ローゼ、どう思います？」

「今度は何ですか」

「あのお二人…ラヴィ様とクレア様ですよ」

その言葉に、一度エドガルドに向けた視線をローゼはゆっくりと外す。

「憶測でものを言うのは好きじゃないので」

「…そう…ですよね」

next

## 蒼翼の欠片

裡にとどまるもの。

手応えのない残滓の響を能う限りに手繰り寄せる。

ねえ、もう一度ちゃんと、その思いが伝わるくらいに  
。 謔言を繰り返す。

何度も何度も無辺の闇の中に求める。

なのに、

強く打つ鼓動がそれを阻む。

醒ましなさいと、共にふるえるのは魂と魄。

……っ……っ……

居場所は、そこにある。

「……まっ……っ」

ドクン、と気脈に走る生血が揺り動かす。

「びっくり、したあ」

「……………え」

夢から覚めたようなか細い声音で無意識に返した。

「お兄ちゃんがまた寝ちゃったから、姫さまがすごく心配してたん

だよ？」

明るいトーンで話す幼い女の子が覗き込む。翠色のそのまっすぐな瞳に、まだ薄らとした両眼を凝らした。

「お兄ちゃん、もお平気？」

そう言っつて繋がれた手を目前に見せる。しっかりと握られていたのは、自分ではなく女の子の方であることに気付き、ぎこちなく離れた。

「うん、うめ…」

「うん、そーじゃなくてすごく苦しそうだったから」

「……苦る、し……」

言い掛けてかぶりを振り、口許を緩ませる。そつと胸郭の奥を確かめる様に指でなぞり、僅かに拵えた笑みで女の子に応えた。

「ありがと、大丈夫だよ」

「良かったあ…姫さままだかなあ、きつと大喜びだよねっ」

入り口をそわそわとして見る少女の髪に飾られた白い花に目を細め、ぎゅっと胸にあてた指先を折って握り締める。

「姫さまって…クレアだよ、ね」

「うんっ、お兄ちゃんは姫さまの大切なお知り合いの人なんでしょ

「？」

「……………うん」

「すぐに戻るって。だからそれまではわたしがお兄ちゃんの側に居てあげてねって」

「そっかあ……………」

「ねえ……………さつきから、お兄ちゃんなにしてるの？」

何やらベッドの上でまじつく様子に女の子は首を傾げる。

「お、起きようかなあ……………と思ってるんだけどお腹に力が入んなくて」

「起きてもいいんなら、背中押そうか？」

「ごめん、助かえ？」

「お兄ちゃん？」

（はあああつつつ？？？）

はらりと肩から流れ落ちるそれに、起しかけた半身の姿勢のまま五秒ばかり凝視したあと、ぎゅうと掴み取って引っ張ってみる。

「……………か、かみ…髪が長いです…って、なんでっ？？」

「ちゅあ……………」

「だよ、ね……ええと、」

些少混乱する頭を抱え、そろりとシーツを持ち上げて認める様に中を覗き込んでから安堵する。

「僕、だよね……当たり前だよねえ」

阿呆かと思いつつ、ほっとしてシーツを身体に巻きつける。

どうい理由でこうなったのかは解らないが、どうやら髪だけ伸びているらしい。

「お兄ちゃん…ホントに大丈夫？ お熱は？」

そつと額に手を当てて自分の体温と比べてみる仕草が可愛らしい。小さな手の平の温もりを感じて、微笑みを返した。

「ありがとう…僕と同じ翠の目なんだね。名前なんて言うの？」

訊ねると、少女は二つの瞳をぱつと輝かせて、何処か誇らしげにニッコリと笑った。

「シエリル！ このお花と同じ名前なのっ」

髪飾りの白い花を指して、零れるくらいの笑顔を見せる少女に胸が締め付けられた。

「……シエリル」

「うんっ！ 姫さまとねっ、姫さまの大好きな人が付けて……大好きな…もしかしてお兄ちゃんなのっ？」

言葉にならなかった。

切なくとも愛おしいあの光陰を、忘れ去ることなど出来はしない。  
決して仮初めなんかじゃない、彼女は

「あつ、お兄ちゃんっ姫さまだよっ」

僕の、大切な。

「…………ラヴ、イ……」

震わせて呼び掛ける、変わらない君の声に思い迷う表情を秘めるこ  
とが出来なかった。

n e x t

## 蒼翼の欠片（後書き）

えっと…この続きはまだ書いてません。

イラストと並行してやっていますので、のんびり更新になるかと思  
います。

ラヴィの絵とかいっぱい描いていますので、興味のある方は [http://blogs.yahoo.co.jp/r\\_r\\_simplicity](http://blogs.yahoo.co.jp/r_r_simplicity) に遊びに来て下さい^^

## 蒼翼の欠片

それきり俯き、黙ったままのクレアを前にどうすればいいのか、掛ける言葉も見付けられずにお互い黙していると、入り口からローゼが顔を覗かせた。

「シエリル、姫様たちお話があるから向こうに行ってましょ」

シエリルに話しているのに、何故かラヴィに視線を置く彼女を困惑した表情のまま見返すと、どういつ訳か睨まれる。

「ラヴィ様っ、お目覚めになられて良かった…あの、宜しければこの服をですね…」

「エドガルド様っ！それはお話が終わってからでもいいでしょ？」

「え？あのちよつと……ラ、ラヴィ様では…後程っ」

ひよっこり顔を出したエドガルドは、邪魔だと言わんばかりにローゼに無理矢理連れて行かれ、二人を追う様にシエリルも手を振って部屋を後にした。

「……………あ、の…クレア」

極僅かでも、しんとした空間の居心地の悪さにラヴィが俯いたままの彼女に呼び掛ける。

「迷惑かけて…ごめん……それと、」

言い掛けたラヴィに、不意にクレアが面を上げるのが分かり視線を上げる。それから本当に数年振りにちゃんと彼女の顔を見たラヴィは、瞳いっぱい涙を溜めたその顔に完全に言葉を失う。

「……………迷惑じゃ、ない」

すっと伸ばした彼女の手が一度頬に触れ、小さな音をたててもう一度頬にあたる。

それは心に響く痛みがした。

「逃げたって構わないっ…でも、貴方がいなくなったら、悲しむ者がいることを忘れないで」

生を命じるように。

「忘れないでっ」

生きよ、と。

その双眸には、零れ落ちる涙とは対照的なくらいの強い意志の顕れを。

言葉にならず、ただ何度か頷いて彼女の言葉を噛み締める。

「……………おかえりなさい、ラヴィ…ずっと貴方に…逢いたかった」

心地よい、彼女の声音に多くの想いが溢れ出す。  
けれど今は、

「僕もです　　ただいま…クレア」

もう抱き締めることはかなわないことも。知っているから、お互いに……。

だからこそ、伝えなければならぬ言葉があるのだと。

「クレア、ごめん……ごめんなさい……っ」

恣に。身勝手な自分を深く恥じ入る。

「僕は馬鹿だ。あのまま死んでいたら……これから先も、ずっと君を苦しめること……分かっていたのに……っ」

ぎゅっと、押さえつける様に胸元のシーツを掴み取る。

「ずっと、言わなきゃ……伝えなきゃいけないことがあったのにっ」

「ラヴィ……違うっ、違うの……あれは私の罪、ラヴィは何も悪くない」

「クレア……？ ま、待ってよ」

「罪なんだよ……。分かっていて、貴方に抱かれたの。弟だって……貴方を傷付けるって知っていたのに……っ」

「そうじゃない、クレア僕の話しを……っ」

「謝らなきゃいけないのは私の方……ごめんなさい……っ、ラヴィ……っ」

「クレアっ！ ちょっとストップ！……っ」

彼女の腕を取り、引き寄せる。睫毛の一つ一つが見えるくらいの至近に、その両目をおさめた。

「君はどうしてそれを罪だって言うの？ ……違うよね、クレアのそれは僕への罪悪感なんですよ」

吐息して、ようやく話せると眩き、ラヴィはもう一度彼女の翠の瞳を見詰めなおした。

「どうなの？ ここ大事だから…微妙だけど、だけど凄く大事なことから、愛したことが罪なの？」

「…そう、そうじゃ…ないっ」

「うん。だったらクレア、これは僕達二人の罪だから 僕だ  
って君に負けなくらい愛した」

「ラヴィ、でも…でも…っ」

「いいやつ！ 僕の方がずっとずっと君を愛してたっ」

「な、…ラヴィ…」

「ほらね。想いなんて目に見えないもの、どうしようもないんだよ。でも…僕、償うつもりはないよ」

腕はまだ掴んだままだった。そつとその手を、彼女の指先に滑らせ、ラヴィが微笑む。

「ずっと君を探してた。見つける方法は幾らでもあった。ただろうけど、

僕は自分の足で君を見つけたかったから……って、結局こんな形になつちやって全然格好つかないんだけど　　だけど今、目の前にクレアが居て、ようやく言える……たった一言だけど、とても大切な言葉を」

瞼を閉じ、一度静かに深呼吸して、それからゆっくりと両目を開く。

「クレア　　僕は後悔してないから」

君を愛したこと、後悔なんかしていない。

n e x t

蒼翼の欠片（後書き）

わお。

超久し振りにお話書いたら、ナンもカンも忘れ去っていた（笑）  
内容然り…書き方からして。

絵を描く十倍は苦勞しました。

一生懸命思い出して書いたのですが、多分…恐らくもっとシリアス  
展開にしたかった筈なんですよね…。

残念なっ（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6195h/>

---

翼、あるモノ。『蒼翼の欠片』

2010年10月21日09時44分発行